

イングランド国民のための
第二弁護論

ジョン・ミルトン

Joannis Miltoni
A N G L I
P R O
POPULO ANGLICANO
DEFENSIO
SECUNDA.

Contra infamem libellum anonymum
cui titulus,

*Regii sanguinis clamor ad
caelum adversus parricidas Anglicanos.*

LONDINI,
Typis Neucomanis, 1654.

The Original Latin Text
of
the Second Defence of the People of England
by
John Milton
based on the photocopy
of
Thomason Collection, The British Library,
Downloaded
from
Early English Books Online
in Comparison with
the Columbia Version

JOANNIS MILTONI

ANGLI

PRO

POPULO ANGLICANO

DEFENSIO

SECUNDA

Contra infamem libellum anonymum,
cui titulus,

*Regii sanguinis clamor ad
cælum, adversus parri-
cidas Anglicanos.*

LONDONI,

Typis Neucomianis, 1654.

電子ブック版『第二弁護論』まえがき

研究代表 野呂有子

1. 研究の手順と方法

本電子ブック、*Pro Populo Anglicano Defensio Secunda* (1654; 『イングランド国民のための第二弁護論』) は、本プロジェクト研究代表者野呂有子 (日本大学文学部教授) が、前掲電子ブック *Pro Populo Anglicano Defensio 1651/1658* (『イングランド国民のための弁護論』1651年版と1658年版の比較対照版) に続けて、本ウェブサイト「野呂有子の研究ウェブサイト」に搭載するために、3年間の準備期間を経て、構想し作成したものである。共同研究者は、以下に示す三名、すなわち、上滝圭介 (埼玉医科大学専任講師)、そして、天海希菜 (日本大学博士前期課程2年)、滋野元樹 (日本大学博士前期課程1年) である。職位・在学年などは、2019年3月現在のものとする。

今回のプロジェクトに取り組むにあたって、日本大学図書館所蔵の電子書籍蔵書、*Early English Books Online* (以降、EEBO) から入手した Thomason Collection 所収の以下の写真複写物を原典とした。JOANNIS MILTONI, *ANGLI PRO POPULO ANGLICANO DEFENSIO SECUNDA Contra infamem libellum anonymum, cui titulus, Regii sanguinis clamor ad cœlum, adversus parricidas Anglicanos. LONDONI, Typis Neucomianis, 1654.*

本文献の整理番号等の書誌情報および電子情報は以下の通りである。

Annotation on Thomason copy:/"may 30:/"

Reproduction of the original in the British Library

Bib name / number : Wing (2nd ed.)/ M2171

Thomason / E.1487[3]

Shawcross, J. Milton, 186./

UMI Colleciton / reel number :Thomson / 191:E. 1487[3]

Durable URL for this page: <http://reo.nii.ac.jp/hss/4000000000617637/fulltext>

テキスト判読の困難な個所に関しては、*The Works of John Milton*, Vol.VIII, ed. Frank Allen Patterson (New York: Columbia UP, 1933)所収の *Pro Populo Anglicano Defensio Secunda* のラテン語テキストを参照した。(以降、Columbia 版) 実際、コロンビア版がなければ、われわれの作業は困難をきわめたと想定される。本プロジェクトは、コロンビア大学版を集大成した、Patterson 博士を始めとする、多

くのミルトン研究の先達の功績から、大いなる恩恵を受けていることをここに記して、感謝の意を表したい。

本電子テキストにおいては、EEBO 版と Columbia 版の表記が異なる個所については、「EEBO 版の語句 [Columbia 版の語句] 」という形で示してある。Columbia 版テキストでは、原典巻末の *Errata* の内容はテキスト中に修正された形で繰り返されている。われわれのプロジェクトでは、当該箇所に脚注を付し、*Errata* の内容を示した。また、Columbia 版 “Notes” で、原典から Columbia 版テキストに確定する場合に行った変更・修正に関する表記が示されている。本電子テキストでは、Columbia 版 “Notes” に示された内容が、「EEBO 版語句 [Columbia 版語句] 」と一致する個所はそのままとする。一致しない箇所のみ、脚注でその旨を指摘するという形を取る。

また、読者・研究者諸氏に供するために、本電子テキスト内に EEBO 版のページ数と Columbia 版のページ数を示しておいた。EEBO 版については ←EEBO1、Columbia 版については Columbia2→ という形になっている。←EEBO1 は、ここまでで、EEBO 版の 1 ページが終了することを意味する。Columbia2→ は、ここから Columbia 版の 2 ページが開始されることを意味する。語の切れ目に関しては、なるべく語を切らずに編集した。当時の出版物のほぼすべてに認められる、旧ページから新ページへと移行する場合に示される重複語句および語句接尾辞等に関しては、これを削除した。

なお、本電子テキストの誤植・表記ミス等については、プロジェクト責任者野呂がすべての責を負うものとする。本プロジェクト作成に関わってくださった上記三名の共同研究者の方々、ご協力いただいたすべての方々はこの場を借りてお礼を申し上げます。

2. ジョン・ミルトンとラテン語論文『第一弁護論』及び『第二弁護論』の概要

Pro Populo Anglicano Defensio Secunda、すなわち『イングランド国民のための第二弁護論』（以降『第二弁護論』）は、前掲電子ブック *Pro Populo Anglicano Defensio*、すなわち『イングランド国民のための弁護論』（以降『第一弁護論』）と同様、John Milton（ジョン・ミルトン；1608—74）により、当時のヨーロッパの国際共通語であったラテン語で執筆された。

ジョン・ミルトンは、英文学史上、William Shakespeare（ウィリアム・シェイクスピア；1564—1616）と並び称される、17 世紀英国の叙事詩人にして革命詩人である。ミルトンが母国語である英語で書いた *Paradise Lost*（『楽園の喪失』；1667）は彼を世界的文豪の一人とした。

ミルトンは、1649 年に Oliver Cromwell（オリヴァー・クロムウェル；1599—1658）の主導するイングランド共和政府のラテン語担当秘書官となった。現在の

日本で言えば、外務省に所属し、国際公用語（現在は英語）で書類を作成する政府の役人といったところであろうか。しかし、ミルトンが単なる書類作成用の翻訳担当者とはまったく異なっていたことは、本ウェブサイト搭載の電子ブック『第一弁護論』のまえがきですでに述べたところでもある。ミルトンは自分自身のことばで、自分自身の思想を応答形式（当時はこの形の宗教・政治文書は極めて多かった）の政治論文に仕立てあげていったのである。

ミルトンはすでに、1649年1月に行われた、革命政府による、チャールズ一世処刑の妥当性を主張する政治論文 *Tenure of Kings and Magistrates*（『国王と為政者の在任権』；同年2月）を出版し、新政府にその手腕を認められ、ラテン語担当秘書官（同年3月）となり、共和政府の命を受けて、*Eikonoclastes*（『偶像破壊者』；同年10月）を出版している。この二つの政治論文はどちらもがミルトンの母国語英語で英国の読者を対象に執筆されたものである。

これに対して『第一弁護論』および『第二弁護論』はラテン語で執筆され、ヨーロッパの王侯貴族を含む知識層を対象としている。二つの書において、ミルトンは民主主義的精神および為政者と人民の間の法的契約、クロムウェルの主導する英国共和制擁護を広く国際的に問うている。これが各国の知識層に深く大きな影響を与えた。ヨーロッパの知識層に与えた『第一弁護論』の影響に関しては、本サイト電子データベース『イングランド国民のための第一弁護論——ラテン語英語日本語対照コンコードダンス』に付した「本プロジェクトの詳細」を参照されたい。

3. ラテン語を駆使した国際的な民権論争

ここで、二つの弁護論が出版を見るに至った経緯を手短かに述べておく。

1649年1月30日、かつてのイングランド国王 Charles I（チャールズ一世；1600—1649）は、イングランド国家への反逆者として処刑された。ここにイングランド共和制は産声を上げることとなった。その後の国内外の王党派の動きは活発であった。

チャールズ処刑の衝撃がイングランドの津々浦々を走り、また一方で全ヨーロッパの国王・王族を震撼させる中、2月9日にイングランド国内でチャールズの礼拝堂付き牧師 John Gauden（ジョン・ゴードン；1605—1662）により、英語で *Eikon Basilike*（『王の像』）が出版された。著者がゴードンであることは隠されており、亡き国王チャールズ自身が『王の像』を執筆したという体裁が取られていた。前日8日にはチャールズの遺体埋葬がなされていることから、『王の像』出版はあたかも亡き国王がキリストのごとく蘇ったかのような印象をイングランドの民衆たちに与えた。王党派はそのような効果を計算に入れて出版日を定めたと推察される。『王の像』各章の終結部には、「チャールズによる神への祈り」

が配され、殉教のキリストに模せられたその姿は多くのイングランド人の心を感傷で揺さぶり、その涙を誘った。

このように、チャールズを断罪したものの、共和政府による新政権の土台はまだまだ不安定なものであった。おりから、チャールズの遺児チャールズ（後の二世）がオランダのハーグで即位宣言を行ない、スコットランドとアイルランドでも彼を国王として認めるという宣言が出され、反革命の気運が高まりを見せた。その間にも、『王の像』はひそかに売れゆきをのばしていた。

10月6日、共和政府はミルトンによる、『王の像』反駁の書、『偶像破壊者』を出版した。『王の像』出版から8か月後、共和政府に反駁論執筆を命じられてから5か月後のことであった。

それも束の間、翌11月には、今度はオランダ、ライデンからイングランドの新政権を全ヨーロッパに向かって公然と糾弾する文書 *Defensio Regia Pro Carolo I*（『チャールズ一世弁護論』）が出版された。亡命中の遺児チャールズに依頼されて、国際的に学識の誉れ高い、フランスの大学者 *Claudius Salmasius*（クラウディウス・サルマシウス；1588—1653）が、ラテン語で執筆したものであった。

サルマシウスは、亡きチャールズを「極めて慈悲深い名君であり、イエス・キリストにも比肩する偉大な殉教者」として賞賛し、イングランドの新政権を「40名の暴君による軍事独裁政権」と決めつけ、その政治指導者たちを「神をも恐れぬ瀆神の輩」、「国父殺害者」、「無教養な野蛮人」として糾弾する。彼らは「イングランドのくずども」であり、「神の法」、「自然の法」および「人の法」を蹂躪する残酷な殺人・暴力集団だというわけである。ここで注目すべきは、サルマシウスが『チャールズ一世弁護論』執筆にあたって古代ローマのキケロ以来の伝統的な弁論の型、すなわち「賞賛と攻撃」の型を踏襲しているということである。つまり、敵を攻撃し、弁護すべき人物を称賛するという型である。

サルマシウスはいわゆる「国王家父長論」に基づいて、亡きチャールズを弁護する。「臣民が国王に従うのは、子が父親に従うのと同様、国王が臣民の国父だからである」と彼は主張する。また、「王権神授説」に基づいて「国王はそもそも神の承認を受けて統治の主権を保持する。それゆえ臣民はこれに服従する義務がある」という議論を展開する。この議論は大枠において、ロバート・フィルマーの『国王家父長論』（1631年以前に執筆され、王党派間で回覧）に重なるものである。

イングランド共和政府にとっては『チャールズ一世弁護論』を放置しておくことは外交政策上きわめて危険であった。「共和政府」と銘打ってはいるものの、その実体は「まともなラテン語」で共和政府を弁護できるような教養を備えた人物などひとりもない、未開の蛮族の集団だと自ら認めることに他ならないからである。武力（軍事力）はあっても知力（教養）はない、ヨーロッパの国際社

会ではまともに相手にされない連中だという王党派側の主張を裏付けることになる。まさに外患内憂の共和政府であった。

1650年1月8日、国務会議により、ラテン語担当秘書官ジョン・ミルトンに反駁論執筆の命令がなされる。樹立後間もないイングランド共和制を軍事的に支えたのがクロムウェルであるなら、言論で支えたのは自分だとする自負が『第二弁護論』中に示されるが、ミルトンの誇張とは言い切れない。

ちなみに、『チャールズ一世弁護論』出版に脅威を感じたのはイングランド共和制だけではなかった。1648年のウェストファリア条約でようやく国際的に独立が正式承認された新教国、オランダ連邦共和国では、翌年1月1日をもって『チャールズ一世弁護論』出版不許可の勅令が發布された。

『チャールズ一世弁護論』論駁は、ミルトンにとってはやりがいのある、しかし、骨の折れる仕事だったに違いない。彼は目を酷使し、失明した。序言を含めて全13章にわたるラテン語による長大な文書の中で、サルマシウスは旧約聖書・新約聖書、ユダヤの古文書、ギリシア・ローマの哲学者、弁論家、政治家、諸国王、ローマ法、初代教父たちの文書、諸外国の歴史書、および当時の多様な政治論文等を総動員させて、国王家父長制および王権神授説の理論的根拠として引用し、理論武装に怠りなかった。これを論駁するためにはミルトン自身が、引用されたすべての文書に目を通し、そのコンテクストを確定し直し、サルマシウスの議論の弱点を突いて、自分の理論を構築していかななくてはならない。単に『チャールズ一世弁護論』を読んで、そのあら捜しをするだけではことは済まないのである。資料収集と検索、読了に要した時間だけでも膨大なものであったと推察される。

こうして、1651年2月24日にラテン語による『第一弁護論』が出版される。『チャールズ一世弁護論』出版からほぼ一年が過ぎていた。母国語英語で『王の像』反駁の書、『偶像破壊者』を執筆するのに5か月ほどかかったが、ラテン語による『第一弁護論』執筆にはその二倍強の歳月が必要だったことがわかる。

『第一弁護論』は速やかに再版を重ねた。イングランドおよび大陸の出版社により（17世紀中だけでも）17の異なる版が出回ったということは、『第一弁護論』がどれほどイングランドおよびヨーロッパの知識人たちの間に流布したかを物語っている。（『偶像破壊者』は英国内で二版を重ねるにとどまった。）また、ミルトン自身が1658年に『第一弁護論』の改訂版を出版した。1651年5月にはオランダ語の翻訳が出現した。1652年にはフランスのパリとトゥールーズで、死刑執行人の手で公衆の面前で焚書にされ、販売禁止の命令が出された。

一方で、ミルトンおよびイングランド共和政攻撃の火の手は予想外の場からあがった。1652年9月中旬、オランダのハーグで *Regii Sanguinis Clamor ad Caelum Adversus Parricidas Anglicanos*（『王の血の叫び』）と題された『第一弁護論』反駁書が出版された。著者は英国国教会の牧師 Peter du Moulin（ピーター・ドゥ・ム

ラン；1601—1684）だったが、彼は匿名で問題の書を出版した。（その兄ルイスは世評では『王の像』をラテン語に翻訳した人物だという。）『王の血の叫び』は、サルマシウスを偉大な学者として褒めたたえ、「王権とイングランド国民とに反逆して、」共和政府の犯した「国父殺し」の罪を糾弾し、そのスポークスマンたるミルトン個人の人となりをあげつらって糾弾するという内容であった。ここにも、われわれは、キケロ以来の「賞賛と攻撃」という弁論の型を見ることができる。共和政府は再度反駁論執筆をミルトンに命じた、と彼自身は『第二弁護論』中で述べている。（しかし共和政府の正式文書中にその記録は残っていない。）

かくして1654年5月30日、『第二弁護論』は出版された。『第二弁護論』の中でミルトンは論敵をAlexandr More（アレグザンダー・モア；1616—1670）だと想定して議論を進め、モアが素行不良で信用のおけない、女たらしの聖職者であることを徹底的に証明しようとする。それは、論敵が『王の血の叫び』の中でミルトンの個人攻撃を行なうことによって、そのような人物を弁護者として任命したイングランド共和制を攻撃するという戦術を取ったからである。ミルトンはこれを逆手にとって論敵攻撃の戦術としたのである。また、ミルトンは自叙伝的個所で自分が高潔な人物であることを詳細に証明しようとするが、それは論敵の攻撃が事実無根であることを証明し、それによってイングランド共和制の名誉を擁護するためであった。

『王の血の叫び』反駁論執筆は急を要する仕事であったが、『第二弁護論』出版までには2年近い歳月が過ぎている。この間ミルトンを襲ったのは失明、妻Mary Powell（メアリ・パウウェル；1625—1652）の産褥死、そして当時一歳だった一人息子の死という家庭的悲劇であった。（新生児の女兒は助かった。）

こうした逆境を乗り越えて『第二弁護論』を出版したミルトンに、さらに厳しい試練が与えられた。『第二弁護論』中で論敵をアレグザンダー・モアと規定し、これを手厳しく糾弾したため、今度はモア本人がミルトンの敵対者として名乗りを挙げたのである。1654年10月、モアはラテン語論文*Fides Publica*（『公共の信託』）を出版し、自分が『王の血の叫び』の著者ではないことを明言し、ミルトンがいかに大きな間違いを犯したか、またミルトンがいかに信用できない人物であるかを徹底的に論じた。これに対してミルトンはさらにラテン語で、*Pro Se Defensio*（『自己弁護論』；1655年8月8日）を執筆してモアに応酬していくことになる。

なお、『自己弁護論』をもって、ヨーロッパを舞台にした、ラテン語論文という形を取った、ミルトンの国際的弁論と応酬は一応の決着を見ることになる。

EEBO1⇒

Joannis Miltoni

ANGLI
PRO
POPULO ANGLICANO
DEFENSIO
Iida,

Contra infamem libellum anony-
nymum, cui titulus,

*Regii sanguinis clamor ad cælum,
adversus parricidas Anglicanos.*

Columbia2→ Quod in omni vita hominum, omnique genere officii est primum, ut grati semper erga Deum, ejusque memores beneficiorum simus, tum præsertim, si qua supra spem votumque evenerint, uti, ob ea, singulares atque solennes gratias quamprimùm ←EEBO1 referamus, id mihi nunc in ipso limine orationis tribus potissimùm de causis video esse faciendum. Primùm, iis me natum temporibus [temporibus] patriæ, quibus civium virtus eximia, & supergressa omnes majorum laudes magnitudo animi atque constantia, obtestata prius Deum, eundemque sequuta manifestissimum ducem, editis post orbem conditum exemplis factisque fortissimis, & gravi dominatione rempublicam, & indignissimâ servitute religionem liberavit. Deinde, cùm extitissent subito multi, qui, ut est ferè ingenium vulgi, egregiè facta odiosè criminarentur, unusque, præ cæteris, literatorio fastu, & conceptâ de Columbia4→ se gregalium suorum opinione inflatus ac fidens, conscripto in nos libro admodum infami, tyrannorum omnium patrociniū nefariè suscepisset, me potiùs quàm alium quemvis, neque tanti nominis adversario, neque tantis rebus dicendis visum imparem, ab ipsis patriæ liberatoribus has partes accepisse communi ←EEBO2 omnium consensu ultrò delatas, ut causam & populi Anglicani, & ipsius adeò Libertatis, siquis unquam alius, publicè defenderem. Postremò, in re tam arduâ & expectationis plenâ, neque civium meorum de me sive spem, sive Judicium illud fefellisse, neque exterorum quamplurimis cùm doctis viris, tum rerum peritis non satisfacisse; adversarium verò, quamvis audacissimum, ità profligâsse, ut animo simul &

existimatione fractâ cederet; triennióque toto, quo postea vixit, multa licèt minatus ac fremens, nullam tamen ampliùs molestiam nobis exhiberet, nisi quòd vilissimorum quorundam hominum obscuram operam subsidio sibi corrogaret, & laudatores nescio quos ineptos atque immodicos, ad inopinatam ac recentem infamiam, siquo modo posset, sarcendam subornaret; quod statim patebit. Hæc ego divinitus mihi accidisse bona, & magna quidem ratus, appositissima denique non modò ad persolvendas numini ex debito gratias, ←EEBO3 Columbia6→ sed ad auspicium quoque optimum instituti operis capiendum, cum veneratione, ut facio, imprimis commemoranda esse duxi. Nam quis est qui patriæ decora non arbitretur sua? quid patriæ cujusquam esse magis decori aut gloriæ potest, quàm libertas, non civili tantùm vitæ, sed divino etiam cultui restituta? quæ gens, quæ civitas aut feliciùs aut fortiùs hanc sibi utrobique peperit? Etenim fortitudo, cùm non tota in bello atq; [atque] armis eniteat, sed contra omnes æquè formidines diffundat vim suam atque intrepida sit, Græci quidem illi, quos maximè admiramur, & Romani, ad tollendos ex civitatibus tyrannos nullam ferè virtutem, præter studium libertatis, expedita arma, promptâsque manus attulere; Cætera omnia in proclivi, inter laudes omnium & plausus, & læta omina, peragebant; nec tam ad discrimen & ambiguum facinus quàm ad certamen virtutis gloriosissimum atque pulcherrimum, ad præmia denique & coronas spémque ←EEBO4 immortalitatis certissimam properabant. Nondum enim Tyrannis res sacra erat; nondum tyranni, Christi scilicet proreges atque vicarii repentè facti, cùm benevolentia non possent, cæcâ vulgi superstitione sese munierant: nondum Clericorum malis artibus attonita plebs, ad barbariem eâ fædiorem, quæ stolidissimos mortalium infamat Indos, degeneraverat. Illi enim noxios sibi Dæmonas, quos abigere non possunt, pro Diis colunt; hæc Tyrannos nè liceret tollere cùm posset, impotentissimos creabat Columbia8→ in se Deos; & humani generis pestes in suam perniciem consecrabat. At contra has omnes traditarum diu opinionum, religionum, calumniarum, atque terrorum densissimas acies, hoste ipso vehementiùs ab aliis formidatas, decertandum Anglis erat. Quæ omnia, edocti meliùs, & [-] proculdubio cœlitus imbuti, tantâ causæ fiduciâ, tantâ animorum firmitate ac virtute superârunt, ut cùm numero populus sanè magnus essent, ←EEBO5 animis tamen tam erectis tàmque excelsis, vulgus esse desierint; Britanniaque ipsa posthac, quæ tyrannorum terra ferax dicta olim est, nunc liberatorum longè feracior, perpetuâ seculorum omnium celebratione dici meruerit. Quos non legum contemptus aut violatio in effrænata licentiam effudit; non virtutis & gloriæ falsa species, aut stulta veterum æmulatio inani nomine libertatis incendit, sed innocentia vitæ, morúmque sanctitas rectum atque solum iter ad libertatem veram docuit, legum & religionis Justissima defensio necessariò armavit. Atque illi quidem Deo perinde confisi, servitatem Honestissimis armis pepulere: cujus laudis etsi nullam partem mihi vendico, à reprehensione tamen vel timiditatis vel ignaviæ, siqua infertur, facilè me tueor. Neque

enim militiæ labores & pericula sic defugi, ut non aliâ ratione, & operam, multò utiliorem, nec minore cum periculo meis civibus navârim, & animum dubiis ←EEBO6 in rebus neque demissum unquam, Columbia10→ neque ullius invidiæ, vel etiam mortis plus æquo metuentem præstiterim. Nam cùm ab adolescentulo humanioribus essem studiis, ut qui maximè deditus, & ingenio semper quàm corpore validior, posthabitâ castrensi operâ, quâ me gregarius quilibet robustior facilè superâsset, ad ea me contuli, quibus plus potui; ut parte meî meliore ac potiore, si saperem, non deteriore, ad rationes patriæ, causâque hanc præstantissimam, quantum maximè possem momentum accederem. Sic itaque existimabam, si illos Deus res gerere tam præclaras voluit, esse itidem alios à quibus gestas dici pro dignitate atque ornari, & defensam armis veritatem, ratione etiam, (quod unicum est præsidium verè ac propriè humanum) defendi voluerit. Unde est, ut dum illos invictos acie viros admiror, de mea interim provincia non querar; immo mihi gratuler, & gratias insuper largitori munerum cœlesti iterum ←EEBO7 summas agam obtigisse talem, ut aliis invidenda multò magis, quàm mihi ullo modo pœnitenda videatur. Et me quidem nemini vel infimo libens confero; nec verbum de me ullum insolentius facio: ad causam verò omnium nobilissimam ac celeberrimam, Columbia12→ & hoc simul defensores ipsos defendendi munus ornatissimum, ipsorum mihi suffragiis attributum atque judiciis, quoties animum refero, fateor me mihi vix temperare, quin altiùs atque andentiùs [audentiùs] ¹quàm pro exordii ratione insurgam; & grandius quiddam, quod eloqui possim, quæram: quandoquidem oratores illos antiquos & insignes, quantum ego ab illis non dicendi solum, sed & loquendi facultate, (in extranea præsertim, quâ utor necessariò, linguâ, & persæpe mihi nequaquam satisfacio) haud dubiè vincor, tantùm omnes omnium ætatum, materiæ nobilitate & argumento vincam. Quod & rei tantam expectationem ac celebritatem adjecit, ut jam ipse me sentiam ←EEBO8 non in foro aut rostris, uno duntaxat populo, vel Romano, vel Atheniensi circumfusum; sed attentâ, & considente quasi totâ penè Europâ, & iudicium ferente, ad universos quacunque gravissimorum hominum, urbium, gentium, consessus atque conventus, & priore defensione, dixisse, & hac rursus dicturum. Jam videor mihi, ingressus iter, transmarinos tractus & porrectas latè regiones, sublimis perlustrare; vultus innumeros atque ignotos, animi sensus mecum conjunctissimos. Hinc Germanorum virile & infestum servituti robur, indè Francorum vividi digniq; [dignique] nomine liberales impetus, hinc Hispanorum consulta virtus, Italarum inde sedata Columbia14→ suique compos magnanimitas ob oculos versatur, Quicquid uspiam liberorum pectorum, quicquid ingenui, quicquid magnanimi aut prudens latet, aut se palàm profitetur, alii tacitè favere, alii apertè suffragari, accurrere alii & plausu accipere, alii tandem vero victi, dedititios ←EEBO9 se tradere. Videor jam mihi,

¹ EEBO 版 *Errata* 修正内容は Columbia 版表記と一致。

tantis circumseptus copiis, ab Herculeis usque columnis, ad extremos Liberi Patris terminos, libertatem diu pulsam atque exulem, longo intervallo domum ubique gentium reducere: Et, quod Triptolemus olim fertur, sed longè nobiliorem Cereali illâ frugem, ex civitate mea gentibus importare; restitutum nempe civilem liberúmque vitæ cultum, per urbes, per regna, pérque nationes disseminare. Sed nec ignotus planè, nec fortasse non gratus rursum advenero; si sum idem, qui pugnacissimum tyrannorum satellitem, & opinione plerorumque, & suí fiduciâ insuperabilem antea creditum, cùm nos nostrásque acies contumeliosè lacerasset, & Optimates nostri me primùm intuerentur, singulari certamine congressus, adacto convitiantis in jugulum hoc stylo, immò suismet ipsius telis, collocavi; & nisi velim tot undique lectorum intelligentium calculis atque sententiis, neutiquam addictis mihi aut obnoxiiis diffidere ←EEBO10 prorsus & derogare, opima spolia retuli. Hæc sine ulla vaniloquentia ità esse re vera [verâ], vel illud maximè argumento esse potest, quod ego nec sine Dei Columbia16→ nutu reor accidisse, quòd, cùm à Regina Suecorum Serenissima, quâ vivit opinor nemo, aut olim vixit, vel optimarum artium, vel doctorum hominum studiosior, honorificè sanè esset invitatus, venissetque & Salmasius & Salmasia, (uter enim horum is erat, uxoris palàm dominatus cum fama tum domi incertum admodum reddiderat) quo in loco peregrinus magno in honore degebat, ibi eum nostra Defensio nihil tale metuentem occupavit. Quâ statim à pluribus perlectâ, Regina quidem, quæ & ipsa cum primis [cum primis] perlegerat, de suâ pristinâ benignitate ac munificentiâ, id solum spectans quod se dignum erat, in hospitem nihil remisit: de cætero, si audita sæpius & quæ arcana non sunt, licet referre, tanta animorum facta subitò mutatio est, ut qui nudius tertius summâ gratiâ floruerat, nunc ←EEBO11 penè obsolesceret; nec ità multò post discedens cum bona venia hoc unum in dubio permultis relinqueret, honoratiórne advenerit, an contemptior abierit. Sed neq; [neque] aliis in locis detrimentum levius fecisse famæ satis constat. Verùm hæc omnia non eò attuli, quò me cuiquam venditarem, neq; [neque] enim est opus; sed quò id duntaxat latiùs ostenderem, Columbia18→ quod initio institui, quas ob causas, & quàm non leves, ab agendis Deo Optimo Maximo gratiis potissimùm sim exorsus; mihi que procœmium hoc fore honestissimum atque pulcherrimum, in quo præcipuè, tot argumentis enumeratis, demonstrare liceat, me, haud expertem licèt calamitatum humanarum, me tamen, résque meas Deo curæ esse; me maximis prope de rebus, & ad patriæ necessaria tempora accommodatis, & civilis vitæ religionisque ex usu maximè futuris, non uno pro populo, nedum uno pro reo, sed pro universo potiùs hominum genere, contra humanæ libertatis hostes, quasi ←EEBO12 in communi omnium gentium & frequentissimo concursu disserentem, divino favore & auxilio adjutum atque auctum: quo ego majus aut gloriosius quicquam mihi tribuere, neque possim ullo tempore neque cupiam. Eundem proinde immortalem Deum oro, ut consuetâ ejus ope ac benignitate solâ fretus, quâ

integritate, diligentia, fide, felicitate etiam, fortissimè justissimèque simul facta haud ita pridem defendi, eadem, vel eam amplius, Authores ipsos, meque tantis viris ignominia causam, non honoris additum ab immeritis opprobriis, atque calumniis vindicare sufficiam. Quod si est, qui contemni haec satius arbitretur potuisse, fateor equidem, si apud eos qui nos rectè nossent haec spargerentur: caeteris qua tandem ratione constabit non esse verum quicquid adversarius [Columbia20](#) noster est mentitus? cum autem, data, quae par est, opera, a nobis erit, ut quo praecessit calumnia, eodem vindex quoque veritas sequatur, & illos de nobis perperam [EEBO13](#) sentire opinor desituros, & istum fortasse mendaciorum pudebit: si non puduerit, tum demum, satius contempserimus. Huic interea responsum pro meritis celerius expedivissem, nisi se falsis rumoribus hactenus muniisset; dum saepius denuntiaret, ad incudem sudare Salmasium, nova volumina in nos fabricare, jam jamque editurum: ex quo hoc solum est consequutus, ut maledicentiae poenas aliquanto serius daret: expectandum enim duxi potius, ut potiori viribus adversario, integrum me servarem. Sed cum Salmasio debellatum jam puto mihi esse, utpote mortuo; & quemadmodum mortuo, non dicam: non enim ut ille mihi caecitatem, sic ego illi mortem vitio vertam. Quanquam sunt, qui nos etiam necis ejus reos faciunt, illisque nostros nimis acriter strictos aculeos; quos dum repugnando altius sibi infixit, dum quod praemanibus habebat opus, vidit spissius procedere, tempus responsionis abiisse, operis gratiam [EEBO14](#) periisse, recordatione amissae famae, existimationis, Principum denique favoris, ob rem regiam male defensam, erga [Columbia22](#) se imminuti, trienniali tandem maestitia, & animi magis aegritudine, quam morbo confectum obiisse. Utcunque sit, si iterum cum hoste satis mihi cognito, si bella etiam posthuma gerenda sunt, cujus feroces ac strenuos impetus facile sustinui, ejus languentes & moribundos conatus non est ut reformidem.

Nunc verò ad hoc quicquid est hominis, qui nos in clamat, aliquando veniamus: clamorem quidem audio, non Regii sanguinis, ut praese fert titulus, sed obscuri cujuspian nebulois; clamantem enim nusquam reperio. Eho! quis es? homone an nemo? hominum certe infimi, ne mancipia quidem, sine nomine sunt. Sempérne ergo mihi cum anonymis res erit? at verò hi regios haberi se vel maximè volunt: miror si regibus sic persuaserint. Regum sequaces atque amicos regum non [EEBO15](#) pudet; quo pacto igitur sunt isti regibus amici? non dant munera; immo verò libentius multò accipiunt: res suas non impendunt, qui ne nomina quidem causae regiae dare audent: quid ergo? verba dant, sed nec verba gratis dare suis regibus, vel satis benevoli in animum inducunt, vel satis constantes nomine adscripto audent. Me quidem *ὁ ἄνδρες ἀνώνυμοι*, fas enim sit Graecè quos Latinè quid nominem non reperio [non reperio], me inquam, cum vester ille Claudius de Jure Regio, materia sanè gratiosissima, [Columbia24](#) sine nomine tamen orsus esset scribere, & exemplo possem uti, usque adeò neque mei, neque causae pudendum

est, ut ad rem tantam accedere, nisi nomen palàm professus, turpe ducerem. Quod ego in Republica palàm videor contra Reges, cur vos in Regno, vel Regum sub patrocínio, non nisi furtim & clanculum, contra Rempublicam audetis? cur in tuto pavidí, cur in luce nocturni, summam potentiam, summam gratiam, timiditate invidiosâ planè, atque ←EEBO16 suspectâ obscuratis? satisne vobis ut præsidii sit in Regibus veremini? sic tecti, sic obvoluti non vos mehercule ad asserendum jus Regium defensores, sed ad ærarium compilandum fures potiùs videmini venisse. Equidem quod sum, profiteor; quod Regibus nego jus esse, vel in regno quovis legitimo pernegare ausim: nemo me læserit Monarcha, quin se priùs damnet, tyrannum fassus. Si tyrannos insector, quid hoc ad Reges? quos ego à tyrannis longissimè sejungo. Quantum à viro malo distat vir bonus, tantundem à tyranno discrepare Regem contendo: Unde efficitur, tyrannum non modò non esse Regem, sed Regi quidem adversissimum semper imminere. Et sanè qui monumenta rerum percurrit, plures à tyrannis quàm à populo oppressos Reges, atq; [atque] sublato inveniet. Qui igitur tollendos affirmat tyrannos, non Reges, sed inimicissimos Regibus, immo infestissimos Columbia26→ regum hostes tollendos affirmat. Vos contrà, quod regibus ←EEBO17 jus, datis, ut quicquid libeat jus sit, non est jus, sed injuria, sed scelus, sed ipsa perniciés: venenato isto munere, non salutari, quos supra omnem vim atque periculum fore prædicatis, eos ipsi occiditis; regem & tyrannum idem esse, siquidem idem utrobique Jus est, statuitis. Nam si isto suo Jure, Rex non utitur, (utetur autem nunquam quamdiu Rex, non tyrannus, erit,) non hoc Regi, sed viro assignandum est. Quid autem absurdius illo jure Regio fingi queat, quo si quis utatur, quoties Rex vult esse, toties esse vir bonus desinat: quoties vir esse bonus maluerit, toties se arguerit non esse Regem? quo quid in Reges dici contumeliosius potest? Hoc jus qui docet, ipse sit oportet injustissimus, atque omnium pessimus: pejor autem quo pacto fiat, quàm si quales format ac fingit alios, talis ipse imprimis fuerit? Quòd si omnis vir bonus, ut antiquorum secta quædam magnificè sanè philosophatur, est Rex, pari ratione sequitur, omnem virum ←EEBO18 malum pro suo quemq; [quemque] modulo tyrannum esse: neq; [neque] enim magnum, nè hoc nomine intumescat, sed infimum quiddam est tyrannus; & quantò omnium maximus, tantò omnium vilissimus, & maximè servilis. Alii enim suis tantùm vitiis volentes serviunt; Hic non Columbia28→ modò suis, sed ministrorum etiam atque satellitum importunissimis flagitiis etiam nolens cogitur servire; & suas quasdam tyrannides abjectissimo cuique suorum concedere: Tyranni igitur servorum infimi, suis serviunt etiam servitiis. Quamobrem rectè hoc nomen vel in minimum quemque tyrannorum pugilem, vel in hunc etiam clamatorem poterit convenire; qui in hac causa tyrannica cur tam strenuè vociferetur, ex his quæ dicta sunt, quæque mox dicentur, satis liquebit: uti etiam cur anonymus: aut enim turpiter conductus, clamorem hunc suum, regio sanguini, Salmasium sequutus, vendidit aut infamis doctrinæ conscientia pallens, aut vitâ

flagitiosus ac turpis, latere si cupit, ←EEBO19 mirum non est: aut fortassis ità se parat, ut sicubi spem quæstûs uberiores odoretur, desertis quandoq; [quandoque] regibus integrum sibi sit, ad quamlibet etiam futuram rempublicam transfugere; nè tunc quidem sine exemplo magni sui Salmasii, qui affulgente lucro captus, ab orthodoxis ad Episcopos, à popularibus ad regios, etiam senex defecit. Tu igitur iste è gurgustio clamator, qui sis non fallis; frustrà tibi ista latibula quæstisti: extrahêre [extrahêre,] mihi crede, neque Plutonis ista galea diutiùs te teget: dejerabis, quoad vixeris, me aut cæcum non esse, aut tibi saltem non connivere. Quis igitur sit, quod genus hominis, quâ spe adductus, quibus illecebris, Columbia30→ quibus lenociniis delinitus, ad hanc causam regiam accesserit, (Milesia propemodum, aut Baiana fabula est) si vacat [vacat,] nunc audite.

Est *Morus* quidam, partim Scotus, partim Gallus; nè tota hominis infamia, gens una, aut regio nimiùm laboraret; homo improbus, & cùm aliorum, ←EEBO20 tum, quod gravissimum est, amicorum, quos ex intimis inimicissimos sibi fecit, testimoniis quam plurimis infidus, mendax, ingratus, maledicus, & virorum perpetuus obtrectator & fœminarum, quarum nec pudicitia plus unquam parcere, quàm famæ consuevit. Is, ut primæ ætatis obscuriora præteream, primùm Genevæ Græcas literas docuit; verùm, sæpius licet nomen suum Græcè *Morum* discipulis interpretatus, stultum & nequam ipse dediscere nequivit, Quin eo potiùs furore est agitatus cùm tot scelerum esset sibi conscius, quamvis fortasse nondum compertus, ut pastoris in Ecclesia munus ambire, atque istis moribus inquinare non horresceret. Verùm haud diu Presbyterorum censuram effugere potuit, mulierarius ac vanus, multisq; [multisque] aliis criminibus notatus, multis ab orthodoxâ fide erroribus damnatus, quos & turpiter ejuravit, & ejuratos impiè retinuit; tandem adulterii manifestus. Hospitis ancillam quandam fortè adamaverat; ←EEBO21 Columbia32→ eam paulò pòst etiam alteri nuptam sectari non destitit; tuguriolum quoddam intrare hortuli, solum cum sola, vicini sæpe animadverterant. Citra adulterium, inquis; poterat enim quidvis aliud: sanè quidem; poterat confabulari, nimirum de re hortensi, prælectiones quasdam suas sciolæ fortasse fœminæ & audiendi cupidæ expromere de hortis, Alcinoï putà vel Adonidis; poterat nunc areolas laudare, umbram tantummodo desiderare, liceret modò ficui *morum* inserere, complures indè sycomoros quàm citissimè enasci, ambulationem amœnissimam; modum deinde insitionis mulieri poterat monstrare: hæc & plura poterat, quis negat? veruntamen presbyteris satisfacere non poterat, quin illum tanquam adulterum, censurâ ferirent, & pastoris munere indignum prorsus judicarent: harum & hujusmodi accusationum capita in Bibliotheca illius urbis publica etiamnum asservantur. Interea, dum hæc palàm nota non ←EEBO22 essent, ab ecclesia, quæ Middelburgi erat Gallica, procurante Salmasio, in Hollandiam vocatus, magnâ cum offensione Spanhemii, viri sanè docti, & pastoris integerrimi, qui eum Genevæ antea probè noverat, literas testimoniales, quas vocant, dum alii non ferendum

existimarent, [Columbia34](#)→ ut homo istiusmodi ecclesiae testimonio ornaretur, alii quidvis potius ferendum, quam ipsum hominem, ægrè à Genevensibus, & non aliâ quàm sui discessûs conditione, atque illas quidem frigidulas, tandem impetravit. In Hollandiam ut venit, ad salutandum Salmasium profectus, domi ejus in Uxoris ancillam, cui Pontiae nomen erat, oculos nequiter coniecit: semper enim in ancillis prolabitur libido hominis; hinc summâ assiduitate Salmasium cœpit colere, &, quoties licuit [licuit,] Pontiam. Nescio an ille commoditate hominis & assentatione captus, an hic optabilem excogitâsse se conveniendæ eo sæpius Pontiae occasionem ratus, prior sermones injecerit de responso [←EEBO23](#) Miltonii ad Salmasium. Ut ut fuit, Morus propugnandum suscipit Salmasium: Et Salmasius quidem Theologicam in ea urbe cathedram suâ operâ pollicetur Moro; Morus & hanc & aliud insuper suaviculum, furtivos Pontiae concubitus pollicetur sibi. Per causam cōsulendi [consulendi] de hoc opere Salmasium, dies ac noctes eam domum frequentat. Jámque ut olim Pyramus in morum, ità nunc repente morus in Pyramum transmutatus sibi videtur, Genevensis in Babylonium; verùm illo juvene quantò improbius, tantò fortunatior, nunc suam Thisben, factâ sub eodem tecto copiâ, ut libitum est, Pontiam alloquitur; rimam in pariete conquirere opus non erat; Spondet matrimonium; eâ spe plectam vitiat; eodémque [Columbia36](#)→ scelere, horreo dicere, sed dicendum est, Sacrosancti Evangelii minister, hospitem etiam domum constuprat. Ex hoc demum congressu, mirum quiddam, & præter solitum naturæ prodigiosum accidit, ut & fœmina [←EEBO24](#) & mas etiam conciperet, Pontia quidem Morillum, quod & Plinianum exercitorem diu postea exercuit Salmasium; Morus ovum hoc irritum & ventosum, ex quo tympanites iste clamor regii sanguinis prorupit. Quod quidem primò regiis nostris in Belgio esurientibus pergrata admodum sorbitio fuit; nunc rupto putamine, vitiosum ac putridum repertum aversantur. Nam Morus hoc suo fœtu haud mediocriter inflatus, & Arausiacam factionem totam demeruisse se sentiens, jam integras professionum cathedras spe improbâ devoraverat, & suam Pontiam utpote ancillam & pauperulam, jam gravidam sceleratus deseruerat. Illa despectam se atque delusam querens, & synodi fidem & magistratûs imploravit. Sic tandem evulgata hæc res, & conviviis penè omnibus, ac circulis diu risum & cachinnos præbuit. Unde aliquis, & lepidi sanè, quisquis erat, ingenii, hoc distichon, [←EEBO25](#)

*Galli ex concubitu gravidam te, Pontia, Mori,
Quis bene moratam, morigerámque neget?*

[Columbia38](#)→ Sola Pontia non risit; sed nec querendo quicquam profecit; Clamor enim regii sanguinis clamorem stupri, & stupratæ mulierculæ ploratum facilè obruerat; Salmasius quoque illatam sibi hanc totique familiae & injuriam & labem ægrè ferens,

séque ab amico & laudatore suo sic ludos factum, sic adversario rursus obnoxium, accedente ad priores ejus in causa regia infelicitates forsitan hoc etiam infortunio, haud ità multò pòst supremum diem obiit. Verùm aliquantò hæc posteriùs. Interim Salmasius, Salmacidis quodam fato, ut enim nomen, ità & fabula non abludit, nescius Hermaphroditum se adjunxisse sibi Morum tam gignendi, quàm pariendi compotem, quid is domi genuisset ignarus, quod peperit exosculatur; ←EEBO26 librum nempe istum in quo sentit se Magnum toties dici, & suo fortè judicio dignè, aliorum certè stultè atque ridiculè laudatum. Itaque typographum festinanter quærit; & fugientem ab se jam diu famam, retinere frustrà conatus, quas laudes, quas potiùs fœdas suî adulationes per hunc atque alios miserè concupiverat, iis etiam divulgandis obstetricatur ipse atque subservit. Ad hanc operam Vlaccus quidam est visus omnium maximè idoneus; huic facilè persuadet, non modò ut librum illum excudendum curaret, quod nemo reprehendisset; sed etiam ut Epistolæ ad Carolum videlicet missæ, multis in me, qui hominem nunquam nôram, probris & contumeliis refertæ, subscripto Columbia40→ nomine se profiteretur authorem. Nequis igitur miretur cur se exorari tam facilè sit passus, ut me tam impudenter nullâ de causâ lacesseret, & alienas etiam intemperies in se transferre atque præstare tam pro nihilo duceret, erga omnes etiam alios quemadmodum ←EEBO27 se gesserit, sicuti ego compertum habeo, ostendam. Est Vlaccus unde gentium nescio, vagus quidam librariolus, veterator atque decoctor notissimus; is Londini aliquandiu bibliopola fuit clancularius; quâ ex urbe, post innumeras fraudes, obæratu aufugit. Eundem Parisiis fide cassum & malè agendo insignem, via tota Jacobæa cognovit: unde olim quoque profugus nè multis quidem parasangis audet appropinquare; nunc si cui opus est balatrone perditissimo atque venali, prostat Hagæcomitis Typographus recoctus. Hunc ut intelligatis, quid dicat, quidve agat, quàm nihil pensi habeat, nihil esse tam sanctum, quod non lucro vel exiguo posterius putet, séque non causa [causâ] publica [publicâ], quod quis putâset, sic in me esse debacchatum, fatentem ipsum in se testem producam. Is cum vidisset quod in Salmasium scripseram, nonnullis librariis æra meruisse, scribit ad amicos quosdam meos mecum agerent, ut siquid haberem excudendum, sibi ←EEBO28 committeretur; se typis longè melioribus, quàm qui Columbia42→ priùs excudisset, mandaturum: respondi per eosdem, non habere me in præsentia, quod excuso esset opus. Ecce autem! cui suam operam tam officiosè modò detulerat, in eum haud ità multò post, scripti contumeliosissimi non excusor solùm sed & author, subdititius licèt, prodit. Indignantur amici; rescribit impudentissimus, mirari se simplicitatem eorum, & rerum imperitiam, qui officii rationem aut honesti ab se exigant aut desiderent, cùm videant quibus rebus quæstum faciat: se ab ipso Salmasio illam epistolam, cùm [epistolam cum] libro accepisse; qui rogabat, [rogabat] id uti suâ gratiâ vellet facere quod fecit; si Miltonio, vel cuivis alteri visum esset respondere, nullum sibi esse scrupulum; siquidem eâdem suâ

operâ uti voluerint[voluerint]: id est, vel in Salmasium vel in Carolum; namque id erat solum quod in responso ejusmodi futurum expectare poterat. Quid plura? hominem videtis; ad reliquos nunc pergo, non ←EEBO29 enim unus est duntaxat, qui hanc in nos regii Clamor quasi tragœdiam adornavit: en igitur initio, ut solet, dramatis personæ: Clamor prologus, Vlaccus Balatro, aut, si mavultis, Salmasius Vlacci Balatronis persona & lacernis involutus, Duo Poetastri Cerevisiali vappâ temulenti, Morus adulter & stuprator. Mirificos sanè tragœdos! bellum certamen mihi paratum! verùm qualescunque sortiti, quoniam alios atque hujusmodi adversarios Columbia44→ vix est ut causa nostra habere possit, nunc singulos aggrediamur; hoc tantùm præfati, si cui minus gravitatis nostra alicubi refutatio habere videbitur, cogitare eum debere, non cum gravi adversario, sed cum grege histrionico, nobis rem esse; ad quem dum refutationis genus accommodandum erat, non semper quid magis decuisset, sed quid illis dignum esset, spectandum duximus. ←EEBO30

Regii sanguinis clamor ad cœlum adversus parricidas Anglicanos.

Siquidem non Jure fusum ostendisses, More, istum sanguinem, haud incredibile narrares: nunc, quemadmodum primis restituti Evangelii temporibus, Monachi, cùm argumentis minùs valerent, ad spectra nescio quæ, & ficta monstra decurrere solebant; sic vos, postquam omnia defecere, ad clamores nusquam auditos, & obsoletas fraterculorum artes revertimini. Voces è cœlo audire quemquam nostrorum, longè abest ut credas; ego te clamores ab Inferis audisse, quod postulas, facilè crediderim. Verùm hunc regii sanguinis clamorem dic sodes quis audivit? Te ais: nugæ: Primùm enim malè audis: Ad cœlum autem qui clamor perveniat, si quis præter Deum, justis puto soli & integerrimi quique audiunt, ut qui possint, Columbia46→ immunes ipsi, iram Dei consciis denuntiare. ←EEBO31 Tu verò quorsum audires, an ut satyram cynædus scriberes? videris enim eodem tempore, & ementitus hunc clamorem ad cœlum, & cum Pontia furtim libidinatus esse. Multa te impediunt, More, multa intus forisq[ue] circumsonant, quæ te res istiusmodi ad cœlum perlatas audire non sinunt; & si nihil aliud, certè qui contra ipsum te ad cœlum quamplurimus fit clamor. Clamat contra te, si nescis, Mœcha illa tua hortensis, tuo maximè Pastoris sui exemplo, deceptam se esse questa; clamat contra te maritus, cujus torum violâsti; clamat Pontia, cui pactum nuptiale temerâsti; clamat, si quis est, quem probro genitum, infantulum abdicâsti; horum omnium clamores ad cœlum contra te, si non audis, neque illum regii sanguinis audiveris: interea libellus iste, non regii sanguinis clamor ad cœlum, sed lascivientis Mori hinnitus ad Pontiam, rectiùs inscribetur. Quæ sequitur Epistola prolixa quidem, & bene putida, partim Carolo, partim Miltonio, alteri amplificando [amplificandò], ←EEBO32 alteri infamando, dedicatur. Ab

ipso statim initio Authorem discite: *Caroli Regna*, inquit, *in Sacrilegam parricidarum*, & *(quia verba desunt idonea, Tertullianæâ voce abutimur) Deicidarum potestatem venerunt*. Hæc sive Salmasiæa, sive Moræa, sive Columbia48→ Vlaccæa sartago sit, prætereamus. Hoc verò aliis ridendum, Carolo indignandum profectò est, quod paulò pòst, *neminem*, ait, *vivere felicitatis Caroli studiosiorem*. Quine eandem & epistolandi, & excudendi operam Caroli hostibus detulisti, te vivit nemo felicitatis ejus studiosior? Miserum profectò dicis regem sic ab amicis omnibus derelictum, ut qui intimi restant, iis Vappa typographus comparare se audeat. Miserrimum, cujus fidelissimis, Vlaccus perfidus fide ac studio non cedat: quo quid insolentius de se, contemptius de rege amicisque regiis pronunciare potuit? neque hoc minùs ridiculum, induci Idiotam & operarium de rebus gravissimis ac regiis virtutibus philosophantem, eaq; [eáque] dicentem, qualiacunque ←EEBO33 sunt, quibus nec Salmasius ipse, nec Morus meliora dixisset. Equidem Salmasium, ut sæpe aliàs ità hoc loco haud obscurè, si multâ lectione, iudicio tamen puerili & nullius usûs hominem deprehendi; qui cùm legere potuisset summos in Spartanâ civitate optimè institutâ magistratus, si quid fortè viro malo excidisset sapienter dictum, id ei adimi jussisse, & in virum aliquem bonum ac frugi sortitione conferri, adeò id omne quod decorum dicitur ignorârit, ut è contra, quas probum Columbia50→ atque prudentem decere sententias arbitraretur, eas homini nequissimo attribui sustineret. Bono es animo, Carole: veterator Vlaccus, *quæ sua est in Deum fiducia*, bono animo te esse jubet. *Noli tot mala perdere*: Vlaccus decoctor perditissimus, qui bona omnia, siqua habuit, perdidit, author tibi est, perdere ut nolis mala: *Fruere novercante fortunâ*: Potin'es ut nè fruare, hortatore præsertim tali, qui alienis etiam fortunis frui per fas & nefas tot annis consuevit? ←EEBO34 *In sapientiam penitùs ingurgitâsti, & ingurgita*: sic monet, sic præcipit regum Institutor sanè optimus Vlaccus gurgis, qui arreptâ atramentosis manibus, coriaccæ lagenæ, inter combibones operas, ingenti haustu, sapientiam tibi propinat. Hæc audet tuus Vlaccus, tam præclara monita, nomine etiam conscripto, quæ Salmasius, quæ Morus, cæterique pugiles tui aut timidi non audent, aut superbi non dignantur; nimirum quoties te monito est opus aut defenso, alieno semper nomine, atque periculo, non suo, sapientes aut fortes sunt. Desinat ergò, quisquis hic est, *strenuam & animosam facundiam* ipse suam inaniter jactare; dum *vir*, si diis placet, *insignis, decoro ingenio nomen suum celeberrimum* edere metuit; librum, quo regium sanguinem ulcisci se ait, ne dicare quidem Carolo nisi per Vlaccum interpretem & vicarium ausus, Columbia52→ verbis typographi miserè contentus significare, *librum* se, sine nomine, *si pateris, O Rex, tuo nomini dicatum ire*. Sic functus Carolo in me ←EEBO35 impetum parat minitabundus: *Post hæc proœmia, tubam terribilem inflabit* ὁ θρυμμάσιος ille Salmasius. Salubritatem prædicis & concentûs musici novum genus futurum; isti enim tubæ terribili, cùm inflabitur, nulla aptior excogitari symphonia poterit, quàm si affatim oppedetur. Buccam

verò Salmasius nimis inflatam ne afferat moneo; quo enim attulerit inflatiorem, eò mihi crede, opportuniorem ad Colaphos præbebit; qui thaumasii Salmasii rhythmicum hunc sonum, quo delectaris, buccis ambabus resonantibus, numerose reddent. Pergis cornicari. *Qui nec parem nec secundum habet, in universo literarum & scientiarum orbe.* Vestram fidem! Eruditi, quotquot estis, vestram fidem! Siccine vobis omnibus anteferri Cimicem Grammaticum, cujus res atque spes omnis in glossario vertebatur? quem vel extremum meritò occupet scabies, si cum viris verè doctis comparetur. Hæc autem, nisi ab infimo quopiam & infra Vlaccum ipsum væcorde affirmari ←EEBO36 tam fatuè nequiverunt. *Quiq; [Quique] jam stupendam & infinitam eruditionem cælesti junctam ingenio ad causam tuæ majestatis contulit.* Si meministis quod suprâ narravi, ipsum Salmasium, attulisse hanc Columbia54→ epistolam cum libro excudendam, vel ab ipso scriptam, vel ab anonymo quovis, vernámque typographum exorâsse, ut quod author nollet, ipse suum nomen adscriberet, cognoscetis profectò pusilli omnino, & abjectissimi hominem ingenii suis laudibus tam miserè velificantem, & immensa encomia tam stolidi laudatoris aucupantem. *Opus æternum frustrâ sugillantibus nonnullis, jurisconsulti mirari satîs nequeunt quòd homo Gallus ità subitò res Anglicas, leges, decreta, instrumenta, ità teneat, [teneat] enodet, &c.* Immo quàm ineptierit in nostris legibus & psittacus fuerit, nostris etiam jurisconsultis testibus abunde ostendimus. *Sed ipse mox altera [alterâ], quam in Rebelles molitur, impressione, simul Theonum ora comprimet, simul Miltonum nobis pro eo ac meretur concastigatum* ← EEBO37 *dabit.* Tu igitur ut pisciculus ille anteambulo, præcurris Balænam Salmasium, impressiones in hæc littora minitantem; nos ferramenta acuimus, expressuri si quid habent impressiones & concastigationes illæ sive olei sive gari. Bonitatem interea magni viri mirabimur plusquam Pythagoricam, qui animalia quoque miseratus, & præsertim pisces, quorum carnibus, [carnibus] ne quadragesima quidem parcit, iis tam decenter involvendis tot volumina destinârit, tot pauperum millibus, Thunnorum, credo, aut Scombrorum, chartaceas in singulos tunicas testamento legârit. Columbia56→

*Gaudete Sombri, & quicquid est piscium salo,
 Qui frigidâ hyeme incolitis algentes freta,
 Vestrûm misertus ille Salmasius eques
 Bonus amicire nuditatem cogitat;
 Chartæq; [Chartæque] largus apparat papyrinos
 Vobis cucullos præferentes Claudii
 Insignia nomenque & decus Salmasii,
 Gestetis ut per omne cetarium forum
 Equitis clientes, scriniis mungentium*

Cubito virorum, & capsulis gratissimos.

Hæc habui in Editionem diu expectatam tam nobilis libri; cujus impressionem, dum, ut ais, molitur Salmasius, tu ejus domum, More, fædissimâ compressione Pontiaë contaminâsti. Et videtur sanè ad hoc opus absolvendum, Salmasius diu multùmque incubuisse; paucis enim ante mortem diebus, cùm vir quidam doctus, à quo hoc ipsum accepi, misisset qui ex eo quæreret, ecquando apparatus partem secundam in Primatum Papæ editurus esset, respondit, ad illud opus non ante reversurum se, quàm absolvisset quod adhuc commentaretur adversus Miltonium. Ità ego etiam Papæ refutandus præferor; & quem illi primatum in Ecclesia negavit, eum mihi ultro ←EEBO39 in inimicitia sua concedit; sic ego primatui Papæ jam jam evertendo salutem attuli; ego redivivum hunc Catilinam, Columbia58→ non in toga, ut consul olim Tullius, nè per somnum quidem, sed aliud omnino agens, Romanis mœnibus averti; non unus profectò cardinalatus mihi hoc nomine debebitur; vereor, nè translato in me regum nuper nostrorum titulo, Defensor fidei ab Romano Pontifice appellandus sim. Videtis quantus invidiæ artifex in me concitandæ, Salmasius fuerit; verùm ipse viderit, qui tam honestâ provinciâ turpiter relictâ, alienis se controversiis immiscuerit, ab Ecclesiæ causa, ad civiles & externas, quarum suâ nihil intererat, se traduxerit; cum Papa inducias fecerit; & quod fædissimum fuit, cum Episcopis, post bellum apertissimum, in gratiam redierit. Veniamus nunc ad mea crimina; éstne quod in vita aut moribus reprehendat? Certè nihil: quid ergo? quod nemo nisi immanis, ac barbarus fecisset, forman mihi ac cæcitatem objectat. ←EEBO40

Monstrum, horrendum, informe, ingens, cui lumen ademptum.

Nunquam existimabam equidem fore, ut de forma, cum Cyclope certamen mihi esset; verùm statim se revocat. *Quanquam nec ingens, quo nihil est exilius, exsanguis, contractius.* Tametsi virum nihil attinet de forma discere [dicere]², tamen quando hîc quoque est, unde gratias Deo agam, & mendaces Columbia60→ redarguam, nè quis, (quod Hispanorum vulgus de hæreticis, quos vocant, plus nimio Sacerdotibus suis credulum opinatur) me fortè Cynocephalum quempiam, aut Rhinocerotam esse putet, dicam. Deformis quidem à nemine, quod sciam, qui modò me vidit, sum unquam habitus; formosus nécne, minùs laboro; staturâ fateor non sum procerâ: sed quæ mediocri tamen quàm parvæ propior sit: sed quid si parvâ, quâ & summi sæpe tum pace tum bello viri fuere,[?] quanquam parva cur dicitur, quæ ad virtutem satis magna est; [?] sed neque exilis ←EEBO41 admodum, eo sanè animo iisque viribus ut cùm ætas vitæque ratio sic ferebat,

² EEBO 版 *Errata* 修正内容は Columbia 版表記と一致。

nec ferrum tractare, nec stringere quotidiano usu exercitatus nescirem; eo accinctus, ut plerumque eram, cuivis vel multò robustiori exæquatum me putabam, securus quid mihi quis injuriæ vir viro inferre posset. Idem hodie animus, eædem vires, oculi non iidem; ità tamen extrinsecus illæsi, ità sine nube clari ac lucidi, ut eorum qui acutissimùm cernunt: in hac solùm parte, memet invito, simulator sum: in vultu, quo *nihil exsanguius* esse dixit, is manet etiamnum color exsanguis & pallenti planè contrarius, ut quadragenario major vix est [sit]³ cui non denis prope annis, videar natu minor; neque corpore contracto neque cute. In his ego si ulla ex parte Columbia62→ mentior, multis millibus popularium meorum, qui de facie me nôrunt, exteris etiam non paucis, ridiculus meritò sim: Sin iste in re minimè necessariâ, tam impudenter & gratuitò mendax comperietur, posteritis de reliquo ←EEBO42 eandem conjecturam facere. Atque hæc de forma mea vel coactus: de tua quanquam & contemptissimam accepi, & habitantis in te improbitatis atque malitiæ vivam imaginem, neque ego dicere, neque ullus audire curat. Utinam de cæcitate pariter liceret inhumanum hunc refellere adversarium; sed non licet; feramus igitur: non est miserum esse cæcum; miserum est cæcitatem non posse ferre: quidni autem feram, quod unumquemque ità parare se oportet, ut si acciderit, non ægrè ferat, quod & humanitus accidere cuivis mortalium, & præstantissimis quibusdam, atque optimis omni memoriâ viris accidisse sciam: sive illos memorem vetustatis ultimæ priscos vates, ac sapientissimos; quorum calamitatem, & Dii, ut fertur, multò potioribus donis compensârunt, & homines eo honore affecerunt, ut ipsos inculpare maluerint deos, quàm cæcitatem illis crimini dare. De augure Tiresia quod traditur, vulgò notum. De Phineo sic cecinit Apollonius in Argonauticis: ←EEBO43 Columbia64→

———'Ουδ' ὄσον ὀπί(ε)λο κ' Διὸς αὐτῶ
 κρείων ἀτρεκέως ἰερόν νόον ἀνθρώποισι.
 Τῶ κ' οἱ γῆρας ἔ' ἐπὶ δ'λυαίων ἔαγεν
 Ἐκδέλει' ὀφθαλμῶν γλυκερὸν φάθ'. ———

(※The first words of the Greek lines above are corrected as below *in Errata*.⁴)

ὄσον δ' ἔλατ')

—neque est veritas Iovem ipsum

Edens veraciter mentem divinam hominibus:

³ EEBO 版 *Errata* 修正内容は Columbia 版表記と一致。

⁴ EEBO 版 *Errata* 修正内容は Columbia 版表記と一致。

*Quare & senectam ei diuturnam dedit,
Eripuit autem oculorum dulce lumen.*

Cæterum deus & ipse veritas est: in qua homines edocenda quò quis veracior eò similior deo acceptiòrque sit, oportet. Non est pium veritatis invidentem deum credere; aut nolle hominibus quàm liberrimè impertitam: Ob nullam igitur noxam, divinus vir, & humani generis erudiendi studiosissimus, ut philosophorum etiam complures, caruisse luminibus videtur. Sive illos commemorem civili prudentiâ, gestisque rebus admirabiles olim viros; primùm Timoleonem ←EEBO44 Corinthium, & civitatis suæ, & Siciliae totius liberatorem; quo virum meliorem, aut in republica sanctiorem nulla ætas tulit; tum Appium Claudium, cujus in Senatu pulcrè dicta sententia, Italiam Pyrrho, gravi hoste, seipsum cæcitate non liberavit; tum Cæcilium Metellum Pontificem, qui non urbem solùm, sed & fatum urbis Palladium, & penitissima sacra dum ab incendio servavit, suos oculos, [oculos] predidit; quanquam aliàs certè Deus pietati tam egregiæ favere se, etiam inter gentes, testatus est: quod tail igitur viro usu venit, ponendum in malis esse Columbia66→ vix putem. Quid alios recentiorum temporum adjungam, vel illum Venetiarum Principem Dandulum longè omnium præstantissimum; vel Boëmorum Ziscam ducem fortissimum, orthodoxæ fidei propugnatorem.[?] Quid summi nominis theologos Hieronymum Zanchium, nonnullósque alios? cùm & ipsum Isaacum Patriarcham, quo neom unquam mortalium Deo charior fuit, annos haud paucos, cæcum vixisse constet; ←EEBO45 aliquot fortasse, Jacobum etiam ejus filium, & ipsum Deo haud minùs dilectum: cùm denique Christi servatoris nostri divino testimonio compertissimum sit, illum hominem ab se sanatum, neque ob suum, neque ob parentum suorum aliquod peccatum, etiam ab utero cæcum fuisse. Ad me quod attinet, te testor, Deus, mentis intimæ, cogitationúmque omnium indagator, me nullius rei, (quanquam hoc apud me sæpius, & quàm maximè potui, seriò quæsivi, & recessus vitæ omnes excussi) nullius vel recens vel olim commissi, mihimet conscium esse, cujus atrocitas hanc mihi præ cæteris calamitatem creare, aut accersisse meritò potuerit. Quod etiam ullo tempore scripsi (quoniam hoc nunc me luere quasi piaculum regii existimant, atque adeò triumphant) testor itidem Deum, me nihil istiusmodi scripsisse, quod non rectum & verum, Deoque gratum esse, & persuaserim tum mihi, & etiamnum persuasus sim; idque nullâ ambitione, ←EEBO46 lucro, aut gloriâ ductus; sed officii, sed honesti, sed pietatis in patriam ratione solâ; nec reipublicæ tantùm, sed Ecclesiæ quoque liberandæ causâ potissimùm fecisse: adeò ut cùm datum Columbia68→ mihi publicè esset illud in defensionem regiam negotium, eodémque tempore & adversâ simul valetudine, & oculo jam penè altero amisso conflictarer, prædiceréntque disertè medici, si hunc laborem suscepissem, fore, ut utrumque brevi amitterem, nihil istâ præmonitione deterritus, non

medici nè Æsculapii quidem Epidaurii ex adyto vocem, sed diviniore cujusdam intus monitoris viderer mihi audire; duásq; [duásque] sortes, fatali quodam nutu, jam mihi propositas, hinc cæcitatem, indè officium; aut oculorum jacturam necessariò faciendam, aut summum officium deserendum: occurrebántque animo bina illa fata, quæ retulisse Delphis consulentem de se matrem, narrat Thetidis filius. ←EEBO47

Διχθαδίας κηρας φερύων θανάτοιο τελοσθη.
 Εἰ δ' ἐκ αὐτῶν ἡρώων τρώων· πύλιν ἀμφιμάχομαι.
 ὦλετο μὲν μοι γός· ἀτὰρ κλέθ' ἀφθιτὸν ἔσσε.
 Εἰ δὲ κεν οἶγαθ' ἴκωμαι φίλῳ ἐς πατρίδα γαῖαν.
 ὦλετό μοι κλέθ' ἐδλόν· ὅπῃ δὴρὸν δέ μοι αἰὼν
 ἔσσει.

Iliad.9.

Duplicia fata ducere ad mortis finem:

*Si hic manens circa Troam urbem pugnvero,
 Amittitur mihi reditus; sed Gloria immortalis erit,
 Si domum revertor dulce ad Patrium solum,
 Amittitur mihi Gloria pulcra, sed diuturna vita
 Erit.*———

Unde sic mecum reputabam, multos graviore malo minus bonum, morte gloriam, redemisse; mihi contrà majus bonum Columbia70→ minore cum malo proponi: ut possem cùm cæcitate sola vel honestissimum officii munus implere; quod ut ipsa [ipsâ] gloria [gloriâ] per se est solidius, ità cuique optatius atque antiquius debet esse. ←EEBO48 Hac igitur tam brevi luminum usurâ, quanta [quantâ] maxima quivi cum utilitate publica, quoad liceret, fruendum esse statui. Videtis quid prætulerim, quid amiserim, quâ inductus ratione: desinant ergò judiciorum Dei calumniatores maledicere, déque me somnia sibi fingere; sic denique habento; me sortis meæ neque pigere neque pœnitere: immotum atque fixum in sententia perstare; Deum iratum neque sentire, neque habere, immò maximis in rebus clementiam ejus & benignitatem erga me paternam experiri atque agnoscere; in hoc præsertim, quòd solante ipso atque animum confirmante in ejus divina voluntate acquiescam; quid is largitus mihi sit, quàm quid negaverit sæpius cogitans: postremò nolle me cum suo quovis rectissimè facto, facti mei conscientia [conscientiam] permutare, aut recordationē [recordationem] ejus gratâ [gratam] mihi semper atque tranquillam deponere. Ad cæcitatem denique quod attinet, malle me, si necesse est, meam, quàm vel suam, More, vel tuam. Vestra imis sensibus ←EEBO49

immersa, nequid sani videatis aut solidi, mentem obcæcat: mea, quam objicitis, colorem tantummodo rebus & superficiem demit; quod verum ac stabile in iis est, contemplationi mentis non adimit. Quàm multa Columbia72→ deinde sunt quæ videre nollem, quàm multa quæ possem libens non videre, quàm pauca reliqua sunt quæ videre cupiam. Sed neque ego cæcis afflictis, mœrentibus, imbecillis, tametsi vos id miserum ducitis, aggregari me discrutior [discrucior]; quandoquidem spes est, eo me propiùs ad misericordiam summi patris atque tutelam pertinere. Est quoddam per imbecillitatem, præeunte Apostolo, ad maximas vires iter: sim ego debilissimus, dummodo in mea debilitate immortalis ille & melior vigor eo se efficaciùs exerat; dummodo in meis tenebris divini vultûs lumen eo clariùs eluceat; tum enim infirmissimus ero simul & validissimus, cæcus eodem tempore & perspicacissimus; hac possim ego infirmitate consummari, hac perfici, possim in hac obscuritate ←EEBO50 sic ego irradiari. Et sanè haud ultima Dei cura cæci sumus; qui nos, quò minus quicquam aliud præter ipsum cernere valemus, eò clementiùs atque benigniùs respicere dignatur. Væ qui illudit nos, væ qui lædit, execratione publicâ devovendo; nos ab injuriis hominum non modò incolumes, sed penè sacros, divina lex reddidit, divinus favor; nec tam oculorum hebetudine, quàm celestium alarum umbrâ has nobis fecisse tenebras videtur; factas illustrare rursus interiore ac longè præstabiliore lumine haud rarò solet. Huc refero, quòd & amici officiosiùs nunc etiam quàm solebant, colunt, observant, adsunt; quòd & Columbia74→ nonnulli sunt, quibuscum Pyladéas atque Theséas alternare voces verorum amicorum liceat.

Ορεστ. Ἐρπασε νῦν ὀϊαξ ποδῶς μοι. Πυ. φίλα γ' ἔχων
κηδεύματα,

Vade gubernaculum mei pedis. Py. per gratam mihi habens curam. Eurip. in Orest.

Et alibi, ←EEBO51

Δίδου χεῖρ ὑπηρέτη φίλω,

Da manum ministro amico.

Δίδου δέρη σὴν χεῖρ ὁδηγίσω δ' ἐγώ,

Da collo manum tuam, ductor autem viæ ero tibi ego. Id in Her. furent.

Non enim hoc casu factum me omnino nullum; non quicquid est probi aut cordati hominis, positum in oculis putant esse. Quin & summi quoque in republica viri, quandoquidem non otio torpentem me, sed impigrum & summa discrimina pro libertate inter primos

adeuntem oculi deseruerunt, ipsi non deserunt; verùm humana qualia sint, secum reputantes, tanquã [tanquam] emerito favent, indulgent, vacationem atque otium faciles concedunt; si quid est ornamenti; non detrahunt: si quid publici muneris, non adimunt; si quid ex ea re commodi, non minuunt; & quamvis non æquè nunc utili, præbendum nihilo minùs benignè censent; eodem planè honore, ac si, ut olim Atheniensibus mos erat, in Prytanéo alendum decrevissent. Columbia76→ Sic ←EEBO52 mihi & apud Deum & apud homines cæcitatem solari meam quandiu licuerit, amissos honesti causâ oculos, [oculos] nemo meos lugeat; absit quoque ut ipse lugeam, aut vel animi satis ut nè habeam quo cæcitatibus convitiatores facilè possim contemnere, vel veniæ ut nè possim faciliùs condonare. Ad te, quisquis es, redeo, qui parùm tibi constans, nunc pumilionem me, nunc Antæum vis esse: *Non aliud postremò optas libentiùs fæderatis Belgii Provinciis, quàm ut tam facilè, tàmque feliciter defungantur hoc Bello, quàm defungetur Salmasius Miltonio.* Cui ego voto si facilè assensero, arbitror me nostris successibus Réique Anglicanæ nec ominari malè, nec malè precari.

En verò iterum clamorem, alienum quendam & stridulum! anseres puto alicunde advolare: Jam sentio quid sit; memini clamoris hanc esse tragœdiam; prodit Chorus: en duo Poëtastrî; vel duo vel unus, biformi sanè specie & bicolore; Sphingémne dicam an Horatianum ←EEBO53 illud monstrum Poëticum, capite muliebri, cervice asininâ, variis indutum plumis, undique collatis membris: id profectò ipsissimum est. Rhapsodus videlicet quispiam, centonibus & pannis obsitus; unúsne an duo incertum, nam & Anonymus quoque est. Poëtas equidem verè dictos & diligo & colo, & audiendo sæpissimè Columbia78→ delector; illorum etiam pleròsque tyrannis esse scio inimicissimos, si vel à primis exorsus ad Buchananum usque nostrum recenserem: istos verò versicolorum nugivendos, quis non oderit? quo genere hominum nihil stultius, aut vanius, aut corruptius, aut mendacius. Laudant, vituperant, sine delectu, sine discrimine, iudicio, aut modo, nunc Principes, nunc plebeios, doctos juxtà atque indoctos, probos an improbos, perinde habent; prout Cantharus, aut spes nummuli, aut fatuus ille furor inflat ac rapit; congestis undique & verborum & rerum tot discoloribus ineptiis, tàmque putidis, ut laudatum longè præstet sileri, & pravo, quod aïunt, ←EEBO54 vivere naso, quàm sic laudari: vituperatus verò qui sit, haud mediocri sanè honori sibi ducat, se tam absurdis, tam stolidis nebulonibus displicere. Primus qui est, si modò bini sunt, dubito Poëta sit an Cæmentarius; ità Salmasio os oblitit, immo totum quasi parietem dealbat atque incrustat. Curru nempe *triumphantem* inducit, Heroëm Gigantomachum, *hastilia & cæstus*, & nescio quæ nucamenta [nugamenta]⁵ armorum vibrantem, doctos omnes pedibus quadrigam sequentes, sed post terga ejus innumeris spatiis relictos, utpote *quem numen*

⁵ EEBO 版 *Errata* 修正内容は Columbia 版表記と一致。

rebus trepidis salutem orbis admoverit; tandem ergo tali tempus erat tegi umbone
 Columbia80→ *reges, parente nimirum Juris & imperii. Delirus necesse est fuerit & bis*
 puer Salmasius, qui his laudibus non solùm tantopere sibi placuerit, sed excudendas etiam
 quàm primùm de se tam sedulò curaverit: Misellus etiam poëta atque indecorus, qui
 Grammaticum, quod genus hominum poëtis ministrum semper atq; [atque] subserviens
 fuit, ←EEBO55 tam immodicis laudibus dignetur. Alter verò non versus facit, sed planè
 insanit, entusiastarum omnium, quos tam rabiðè insectatur, ipse amentissimus: hic
 Salmasii carnifex quasi sit, Syri Damæ filius, Lorarios invocat & Cadmum; veratro deinde
 ebrius, totam, quicquid ubique est, Servulorum & Ballionum sentinam, ex Indice Plautino
 evomit; credas lingua [linguâ] ⁶Oscum non latinè loquentem, aut inferarum, quas natat,
 paludum coaxare ranam. Tum ut intelligatis, quantus sit Iamborum artifex, duabus
 syllabis unâ in voce peccat, alterâ productâ, alterâ perperam correptâ.

Hi trucidato rege per horrendum nefas.

Aufer istas, asine, *vacivatum* tuarum clitellas; & tria verba, si poets, sani ac sobrii
 hominis tandem affer; si tua ista cucurbita & *blennum caput* vel ad punctum temporis
 potest sapere: interea te ego puerorum *virgidemiis* tuis cædendum trado Columbia82→
 Orbilium. Tu mihi sic perge maledicere, ←EEBO56 ut *Cromuello pejor* [pejor] tibi sim,
 quâ nullâ majore me laude afficere potuisti. Te verò benevolùmne dicam, an stolidum, an
 hostem insidiosum? benevolus certè non es, verba enim hostem indicant; cur ergò tam
 stolidus fuisti vituperator, ut anteferre me tanto viro in buccam tibi venerit? ecquid tu non
 intelligis, an me putas non intelligere, quò graviora vestra in me esse odia ostenditis, eò
 vos ampliora mea in rempublicam merita prædicare, vestra tot opprobria, tot mea esse
 apud meos præconia? Nam si vos me omnium maximè odistis, sanè ego vos omnium
 maximè exulceravi, vos ego maximè afflixi, causæque vestræ nocui: id si ità est, idem
 ego de meis civibus optime [optimè] quoque merui; hostis enim vel testimonium vel
 judicium, etsi aliàs leve admodùm, de suo tamen dolore longè est gravissimum. An Poëta
 non meministi, cùm de Achillis mortui armis, Ajax & Ulysses contenderent, non Græcos
 populares set Trojanos hostes ex sententia Nestoris Judices datos? ←EEBO57

Τὸν νεκρὸν Τρωσῶν ἐφώμεν εὐφροσὶ τίνδε δίχασαι.

⁶ Columbia 版では、“linguâ” は Columbia 版 76 ページに出現とされるがこれは誤記。

Quapropter Trojanis permittamus prudentibus hanc litem judicandam.

Et paulò pòst, Columbia84→

Οἱ εἰ δίκην ἰστίαν ἐπὶ σεβαστοῦσιν.
 Οὐ πνεῖ ἴσα φέροντες ἐπὶ μάλα πάντας Ἀχαιῶν
 Ἴσον ἀπεχθάρουσι κακίης μνησθῆναι ἄτης.

Qui justum judicium de iis fecerint,

Nemini gratificantes, cùm vehementer omnes Achivos

Æquè oderint, mali memores damni.

Hæc Smyrnæus ille, sive Calaber. Insidiosus itaque sis oportet, méque in invidiam conjicere labores, qui quod judicium in hoste rectum atq; [atque] sincerum esse solet, id dolo malo & gravius lædendi animo corrumpis atque depravas, ita non vir modò sed & hostis depravatissimus es. ←EEBO58 Verùm ego, nullo negotio frustrabor te, vir bone; quanquam enim Ulysem, id est, quàm optimè de patria meritum me esse sanè perquàm vellem, tamen Achilleïa arma non ambio; cœlum in clypeo pictum, quod alii, non ego, in certamine aspiciant, præferre, onus non pictum sed verum, humeris portare, quod ego, non alii sentiant, non quæro: Equidem cùm nullas omnino simultates aut inimicitias ullo cum homine privatas geram, neque ullus, quod sciam, mecum gerat, tot in me maledicta jactari, tot probra torqueri, reipublicæ duntaxat causâ, non meâ, eo æquiore animo fero: nec præmii & commodorum inde provenientium, partem longè minimam, ignominiaë longè maximam pervenisse ad me queror; contentus quæ honesta factusunt, Columbia86→ ea propter se solùm appetisse, & gratis persequi: Id alii viderint, túque scito, me illas *opimitates* atque *opes*, quas mihi exprobras, non attigisse, neque eo nomine quo maximè accusas, obolo factum ditiozem. ←EEBO59 Hic rursus infit Morus, & secunda epistola causas scribendi refert; cuinam? *Lectori Christiano* nempe Mœchus & stuprator Morus salutem: *piam sanè epistolam promittis; jam causas incipe. Excitati sunt*

Europæarum gentium animi, maxime omnium Galli nostri reformati, ut parricidium & parricidas, &c. cognoscerent. Galli & ipsi reformati contra reges bella gesserunt; quid

ulteriùs fuissent facturi, paribus usi rerum successibus, affirmari non potest: certè reges ipsorum, si qua earum rerum monumentis fides, ab illis haud minùs metuebant sibi, quàm à nobis noster: neque injuria [injuriâ], quoties meminissent quæ etiam illi scriptitarunt, & minati sæpe sunt: Nolint igitur, quicquid tu causare, splendidè nimis de

se polliceri, iniquiùs de nobis sentire. Pergit in causis. *Equidem ea Anglorum melioris notæ consuetudine sùm [sum] usus.* Qui tibi sunt melioris notæ, viris bonis sunt pessimæ.

Ut ausim dicere me ista hominum Columbia88→ *monstra nosse intus & in cute.*

←EEBO60 Putabam te mœchas tantummodo tuas & scorta; tu etiam monstra intus & in cute. *Ut nomen meum premerem, facile impetrarunt Angil quibuscum consuevi.* Et astutè quidem illi: sic enim sperabant & se impudentia [impudentiâ] tua [tuâ] eò largiore fruituros, & te tua [tuâ] fama [famâ], etiam tum mala [malâ], eo minus causæ nosciturum [nociturum]⁷. Noverant enim te, & quàm esses olim bonus hortorum custos, & nunc rasmus licèt & pumicatus sacerdos, ut à Pontia ne Pilata quidem abstinere manus potueris; nec de nihilo sanè [sanè], si enim à conficienda carne carnifex dictus putatur, cur minùs tu conficiendo Pontiam Pontifex factus ex sacerdote tibi videare? Hæc cùm de te non nescirent alii, cùm non posses ipse quin tibimet conscires, tamen incredibili, & execrandâ quadam impietate palàm audes profiteri, te *Dei gloriam unice quærere, & vindicare:* & dum ipse turpissima quæris, simul accusare alios, quod *pietatis larvam criminibus imponant:* cùm id nemo manifestiùs ac sceleratiùs quàm tu ←EEBO61 ipse facis, unquam fecerit. *Ad rerum ais gestarum seriem magno tibi fuisse adjumento cum alios scriptores tum maxime elenchum motuum nuperorum in Anglia.* Columbia90→ Næ tu ineptus homo es, qui tanto clamore facto, quod tuum sit nihil afferas; sed scriptores tantùm, regiis partibus addictos eóq; [eóque] meritò suspectos auctores contra nos adducere potuisti, quorũ [quorum] fides si elevabitur, progredi nequeas. Nos igitur scriptores illos, si opus erit & elenchum elencho refutabimus, non illis per te, sed tibi per illos, cum visum erit respondebimus; tibi quæ de tuo protuleris, videndum interea, ut tueri queas; quæ cujusmodi sint, ab impio & planè Atheo homine profecta, audiant nunc omnes pii & horrescant [horescant]. *Jubet amor dei & injuriæ sancto ejus nomini factæ sensus acerrimus cogit supplices manus ad deum attollere.* Abde [Abde,] abde obscœnas illas manus, quas libidine & ambitione supinatus attollere non vereris, nè cœlum ipsum quoque audias [audeas] iis manibus incestare, quibus sacra ←EEBO62 religionis mysteria contrectando polluisti. Quam enim divinam ultionem aliis temerarius & vœcors imprecaris, eam in ipsius tuum impurissimum caput devocasse te olim intelliges.

Hactenus clamoris quasi præludia fuere; nunc, (summas enim, & propè solas in hoc dramate partes clamor obtinet,) quàm potest maximo hiatu, rictum diducit: in cœlum scilicet iturus; quo si ascenderit, in neminem profectò acriùs clamabit quam in ipsum clamatorem Morum. *Cum omnibus* Columbia92→ *seculis, sacra fuerit regum majestas, &c.* Multa tu quidem More vulgariter, multa malitiose in nos declamas, quæ nihil attinent:

⁷ EEBO 版 *Errata* 修正内容は Columbia 版表記と一致。

regis enim cædes, & tyranni supplicium non sunt idem, More, non sunt, [sunt;] inter se distant longissimè, atque distabunt, dum sensus & ratio, [ratio] jus atque fas, rectique & obliqui iudicium hominibus concedetur. Verùm de his satis jam sæpiùs dictum, satis defensum est: non patiar qui tot diris inanibus lædere non potes, ut repetitâ crambe nos demum occidas. ←EEBO63 De patientiâ, deinde & pietate bellè disputas: Sed

——— *de virtute loquutus*

Clunem agitas: ego te ceventem, more [More], verebor?

Omnes aïs reformatos, prestrim Belgas & Gallos, factum nostrum horruisse: & statim,

bonis ubique non licuisse, idem sentire & loqui. Sed te tibi repugnare leviculum est; hoc

multò indignius atque atrocius; *præ nostro inquis, scelere, nihil fuit Judæorum scelus, Christum crucifigentium, sive hominum mentem, sive sceleris effectus compares. Furiosè [Furiose]!*⁸ tûne Christi minister perpetratum facinus in Christum tam leviter fers, quacunq̄ demum *mente vel effectu* ut pari scelere Columbia94→ interfectum quemlibet regem audias [audeas] dicere? Judæi certè clarissimis indiciis dei filium agnovisse poterant; nos Carolum non esse tyrannum, nulla ratione potuimus intelligere. Eventûs autem, ad minuendum scelus, ineptissimè ←EEBO64 facis mentionem: verùm semper animadverto regios, quò quisq̄; [quisque] acrior est, eò levius ferre quicquid committitur in Christum, quàm si quid in regem: cui tamen cùm Christi præcipuè causa [causâ] obediendum doceant, facilè ostendunt se neque Christum verè colere, neque regem: sed aliud quiddam sibi quærentes, incredibilem hanc erga reges fidem ac religionem suam, vel ambitioni, vel occultis quibusdam aliis cupiditatibus obtendere. *Prodiit ergo magnus literarum princeps Salmasius. Desine toties magnum, illud, More; quod millies licèt ingesseris, haud cuiquam profectò intelligenti persuaseris magnum esse Salmasium, sed minimum esse Morum, & nullius pretii homulum, qui, quid deceat ignarus, magni cognomine tam imperitè abutatur. Nos grammaticis atque criticis, quorum summa laus aut in alienis lucubrationibus edendis, aut librariorum mendulis corrigendis versatur, industriam quidem ac literarum scientiam, doctrinæ etiam haud ←EEBO65 contemnendæ laudem, ac præmia libenter concedimus, magni cognomen haud largimur. Is solus magnus est appellandus, qui res magnas aut gerit, aut docet, aut dignè scribit: res autem Columbia96→ magnæ sunt solæ, quæ vel vitam hanc nostram efficiunt beatam, aut saltem cum honestate commodam atque jucundam, vel ad alteram ducunt beatiorem.*

⁸ EEBO 版 Errata 修正内容は Columbia 版表記と一致。

Horum verò Salmasius quid egit? egit verò nihil; quid autem docuit aut scripsit magnum? nisi fortè contra Episcopos, & primatum Papæ, quod ipse postea & suis moribus, & aliis in nos pro episcopatu scriptis, recantatum penitus evertit. Magnus ergo scriptor dici non debet, qui aut nihil magnum, aut quod optimum in vita scripserat, ei fædissimè renunciavit. *Literarum princeps* ut sit, & Alphabeti per me licet; at verò tibi non *princeps* modò *literarum* est, sed *patronus regum*, & *patronus quidem dignus tantis clientibus*. Pulchrè tu quidem regibus consuluisti, ut post alios insignes titulos, Claudii Salmasii ←EEBO66 clientes appellentur. Ea [Eâ] nimirum lege solvimini cunctis aliis legibus, [legibus] Reges, ut in clientelam Grammatico tradatis vos Salmasio, scepra ferulæ submittat: *Debebunt ei Reges, dum stabit orbis, dignitatis & salutis suæ vindicias*. Audite [Audite,] Principes; qui pessimè [pessimè] vos defendit, immo ne defendit quidem, nemo enim oppugnavit, dignitatem & salutem vestram sibi imputat. Hoc nempe solum consequuti sunt, qui superbissimum Grammaticum Columbia98→ sustinendis regum rationibus ex tinearum & blattarum foro advocârunt. *Cui quantum res regia, tantundem etiam ecclesia debet*; non laudem sanè, sed meritissimam desertæ suæ causæ notam. Nunc in laudes effunderis Defensionis regiæ; *ingenium, doctrinam, infinitum prope rerum usum, & intimam sacri & profani juris penum, concitatae orationis vigorem, eloquentiam, facundiam aurei illius operis* admiraris, quorum cum nihil affuisse homini contendo, (quid enim Salmasio cum eloquentia?) tum aureum ←EEBO67 fuisse illud opus vel centies fateor; tot enim Carolus aureos numeravit, ne dicam quid Arausiacus etiam princeps in idem opus profuderit. *Nunquam major surrexit vir magnus, nunquam magis Salmasius*: Et tantò quidem major ut se ruperit, quàm magnus enim fuerit in illo opere jam vidimus; & siquid ejusdem argumenti, ut fertur, posthumum reliquit, fortasse videbimus. Non equidem inficior, edito illo libro, Salmasium in ore omnium fuisse, regiis mirè placuisse; *ab augustissima Sueciæ regina, amplissimis præmiis invitatum*; quinimò tota [totâ] illa [illâ] contentione Salmasio secunda omnia, adversa mihi penè omnia fuere. Primùm de illius eruditione, erat hominum summa opinio, quam multis ab annis jam diu collegerat, libros conscribendo Columbia100→ multos, & bene magnos, non eos quidem plerùmque utiles, sed abstrusissimis de rebus, & summorum authorum citatiunculis differtos; quo nihil citiùs litteratorum vulgus in admirationem rapit; me verò quis essem, nemo ←EEBO68 in iis ferè regionibus nôrat; magnam ille suî expectationem concitârat, attentior operi quàm solebat aliàs, ut in re tanta; ego mei nullam potui movere: immò verò multi me ab illo dehortabantur, tyronem cum veterano congressurum, partim invidentes, nè utcunque mihi gloriæ foret cum tanto hoste decertâsse; partim & mihi, & causæ metuentes, nè utriusque gravi cum ignominia victus discederem; causa denique speciosa atque plausibilis, inveterata vulgi opinion, sive superstitio dicenda potiùs est, & propensus in regium nomen favor Salmasio vires & spiritus addiderat; eadem omnia contra me fecêre, quo magis est

mirandum, quamprimum responsio nostra prodiit, non si à plerisque avidè arriperetur [arriperetur,] videre gestientibus ecquis tam præceps animi esset ut auderet cum Salmasio conflare, sed tam esse placitam multis atque gratam, ut, non authoris, sed ipsius veritatis ratione habitâ, qui modò summo in honore fuerat Salmasius, nunc quasi detractâ, sub ←EEBO69 qua latuerat, personâ, & existimatione, & animo repentè caderet; séque asserere, Columbia102→ tam esti [tamesti] ⁹omnibus nervis id agens, quoad vixit postea non valuerit. Te verò, serenissima Suecorum regina, tuúmque illud acre iudicium fallere haud diu potuit; tu veritatis partium studiis anteferebdæ, Princeps atque Author propè dicam cœlestis extitisti. Quamvis enim illum hominem eximiæ doctrinæ fama [famâ], causæque regiæ patrocinio tunc temporis longè omnium celeberrimum, à te invitatum, multis honoribus affecisses, tamen prodeunte illo responso, & singulari æquanimitate abs te perlecto, postquam vanitatis & apertissimæ corruptelæ redargutum Salmasium, multa leviter, multa immoderatè, falsa quædam, adversùs seipsum alia, & prioribus sententiis contraria disseruisse animadverteras, ad quæ, coram accitus, ut ferunt, quod satis responderet nihil habuit, ita palàm animo affecta es, ut ab illo tempore neque hominem, ut antea, colere, neque ejus ingenium aut ←EEBO70 doctrinam magni facere, &, quod erat planè inopinatum, ejus adversario propensius favere, omnes te intelligerent. Quod enim erat in tyrannos dictum, negabas id ad te ullo modo pertinere: unde & apud te fructum, & apud alios famam rectissimæ conscientiæ adepti es. Cùm enim tua facta satis declarent, tyrannum te non esse, hæc tua tam aperta animi significatio adhuc clariùs demonstrabat, te ejus rei ne omnino quidem tibi esse consciam. Columbia104→ O me spe meâ omni felicior! (Eloquentiam enim, nisi quæ in ipsa veritate Suada est, nullam mihi sumo) qui, cùm in ea patriæ tempora incidissem, ut necesse esset in causa [causâ] tam ardua [arduâ] tàmque [tâmque] invidiosa [invidiosâ] versari, ut jus omne regium impugnare viderer, tam illustrem, tam verè regiam nactus sim integritatis meæ testem atque interpretem, nullum me verbum fecisse contra reges, sed contra regum labes ac pestes duntaxat tyrannos. Te verò magnanimam, Augusta, te tutam undique divinâ planè virtute ac sapientiâ munitam! ←EEBO71 quæ quod in jus tuum ac dignitatem poterat videri scriptum, non solùm tam æquo animo atque sedato, tam incredibili mentis candore, vultùsque verâ serenitate perlegere sustinuisti; sed contra ipsum Patronum tuum ejusmodi sententiam ferre, ut ejus adverario palmam etiam adjudicare à plerisque existimeris. Quo te honore, quâ te veneratione, Regina, prosequi semper debuero, cujus excelsa virtus ac magnitudo animi non tibi solùm gloriosa, sed mihi etiam tam fausta atque fortunata, & suspicione me omni atque infamiâ apud alios reges liberavit, & præclaro ac immortalis hoc beneficio tibi in perpetuum devinxit. Quàm bene de æquitate tua, deque justitia &

⁹ EEBO 版 Errata 修正内容は Columbia 版表記と一致。

sentire exteri, & sentire & sperare semper tui populi debebunt, qui, cùm tua res ac majestas ipsa agi videretur, tam nihil turbatam [Columbia 106](#)→ te de tuo haud minùs placidè, quàm de populi jure soles, judicantem viderunt. Jam tu quidem haud temerè, tot conquisita undique volumina, tot literarum [←EEBO72](#) monumenta conguessisti, non quasi te illa quicquam docere, sed ut ex illis tui cives te discere, tuæque virtutis ac sapientiæ præstantiam contemplari possint; cujus ipsa Divæ species, nisi tuo animo penitùs insedisset, & quasi oculis conspiciendam se tibi præbuisset, haud ulla [ullâ] profectò librorum lectione, tam incredibiles amores excitâsset in te sui: quò magis illum mentis tuæ vigorem planè æthereum & quasi purissimam divinæ auræ partem in illas ultimas regiones delapsam admiramur; quam neque cœlum illud triste ac nubilosum ullis frigoribus extinguere aut gravare, neque solum illud horridum ac salebrosum, quod & ingenia quoque incolarum haud rarò indurat, quicquam in te inæquale aut asperum creare potuit: quin & ipsa terra illa, tot metallis fæcunda, si aliis noverca, tibi certè alma parens, te summis enixa viribus totam auream produxisse videtur. Dicerem Adolphi filiam invicti atque inclyti regis unicam prolem, nisi tu illi, *Christina*, tantum [←EEBO73](#) præluceres, quantum viribus sapientia, belli artibus pacis studia præcellunt. Jam inde profectò regina [Columbia108](#)→ Austri haud sola celebrabitur: habet nunc & septentrio reginam suam, & dignam sanè quæ non modò sapientissimum illum Judæorum regem, aut siquis unquam similis futurus esset, auditum proficisceretur, sed ad quam alii tanquam ad clarissimum regalium virtutum exemplar, & visendam omnibus Heroinam, undique concurrant: nullúmque in terris fastigium par esse ejus laudibus ac meritis fateantur, in qua minimum hoc esse videant, quòd sit Regina, tot gentium monarcha. Non autem hoc minimum, quòd etiam hoc esse decorum suorum minimum ipsa sentiat, aliúdq̄ longè [longé] majus atque sublimius meditetur, quàm regnare; hoc ipso nomine innumeris regibus præponenda. Potest itaque, si ea manet Suecorum gentem calamitas, regnum abdicare, Reginam deponere nunquam potest, non Sueciæ sed totius orbis terrarum dignam se imperio testata. [←EEBO74](#)

In has digressum me Reginæ meritissimas laudes, nemo est, opinor, qui non collaudet, nedum reprehendat; quas ego quidem sine summa ingratitude culpa, vel aliis tacentibus, prætermittere non potui; qui nescio quâ meâ sorte, sanè felicissimâ, aut si quis est occultus vel siderũ [siderum], vel animorũ [animorum], vel rerum consensus aut moderamem, tantã [tantam] arbitrã [arbitram] quam omniũ [omnium] minimè sperabam, omnium maximè optabam, tam mihi æquam & faventem in ultimis terris repererim [reppererim]. Nunc ad relictum opus, longè quidem diversissimum, redeundum [Columbia110](#)→ tamen est. *Infremuisse, ais, nos ad Defensionis regiæ famam; dispexisse igitur Grammaticastrum aliquem famelicum, qui venalem calamum parricidii patrocinio vellet commodare.* Hæc abs te malitiosissimè ficta sunt, ex quo memineras, regio, cum

suis mendaciis ac maledicentiæ præconem dispicerent, adisse Grammaticum, si non famelicum, certè auri plus nimio sitientem Salmasium; qui non solùm præsentem operam suam, ←EEBO75 sed bonam quoque mentem, si quam priùs habuit, illis libentissimè vendidit; ex quo memineras Salmasium, famâ jam deploratâ atque perditâ, cum dispiceret, qui existimationem afflictam atque obtritam, quoquo modo reparare quiret, te invenisse justo Dei judicio, non, unde excussus es, ministrum Genevensis, sed episcopum Lampsacenum, id est, ex horto Priapum, suæ domûs constupratorem; unde & insulsissimas laudes, tanto cum dedecore emptas aversatus, & ex amico inimicissimus factus, tibi laudatori suo, multa moriens imprecatus est. *Unus inventus est, magnus scilicet Heros, quem Salmasio opponerent, Jonannes Miltonus.* Ego Heroëm me esse nesciebam, tu Heroïs cujuspiam fortè filius per me sis licèt; totus enim noxa es. Atque unum me esse inventum, qui causam populi Anglicani tuear, si reipublicæ rationes cogito, sanè quàm doleo, si laudem, ejus participem habere me neminem facilè patior. Quis & unde sim dubium ←EEBO76 Columbia112→ ais esse. Tam olim erat dubium quis Homerus, quis Demosthenes. Equidem tacere diu, & posse non scribere, quod nunquam potuit Salmasius, didiceram; eaque in sinu gestabam tacitus, quæ si tum proferre libuisset, æquè ac nunc, inclaruisset jamdudum poteram: sed cunctantis famæ avidus non eram, ne hæc quidem, nisi idoneâ datâ occasione, unquam prolaturus; nihil laborans esti alii me quæcunque nôssem scire nesciebant; non enim famam sed oportunitatem cujusque rei præstolabar; unde factum est, ut multò ante plurimis essem notus, quàm Salmasius notus esset sibi; nunc Andremonè notior est caballo. *Homône an vermis.* Equidem malim me vermem esse, quod fatetur de se etiam rex Davides, quàm tuum vermem in pectore nunquam moriturum intùs celare. *Aiunt, inquis, hominem Cantabrigiensi Academia [Academiâ] ob flagitia plusum, dedecus & patriam fugisse, & in Italiam commigrasse.* Vel hinc licebit conjicere quàm veraces illi fuerint, ←EEBO77 ex quibus res nostras auditione accepisti; hîc enim & te & illos impudentissimè mentiri & nôrunt omnes qui me nôrunt, & statim ampliùs ostendam. Pulsus verò Cantabrigiâ, cur in Italiam potiùs quàm in Galliam aut Hollandiam commigrarem? ubi tu tot flagitiis coopertus, Minister evangelii, non Columbia114→ modò impunè vivis, sed concionaris, sed sacra etiam ministeria, summo cum illius Ecclesiæ opprobrio, inquinatissimis manibus conspurcas. Cur verò in Italiam, More? novus credo Saturnus, ut alicubi laterem, in Latium scilicet profugi. Verùm ego Italiam, non, ut tu putas, facinorosorum latibulum aut asylum, sed humanitatis potiùs, & civium doctrinarum omnium hospitium & noveram antea, & expertus sum. *Reversus librum de divortiis conscripsit.* Non aliud scripsi atque ante me Bucerus de regno Christi copiosè, Fagius in Deuteronomium, Erasmus in Epistolam primam ad Corinthios deditâ operâ in Anglorum gratiam, aliique multi percelebres viri, ←EEBO78 in commune bonum scripserunt. Quod in illis nemo reprehendit, cur id mihi præ cæteris fraudi esset, non

intelligo: vellem hoc tantùm, sermone vernaculo me non scripsisse; non enim in vernas lectores incidissem; quibus solēne [solemne] est sua bona ignorare, aliorum mala irridere. Téne verò, turpissime, de divortiis obstrepere, qui cum Pontia ancilla tibi desponsata, post stuprum eo obtentu illatum, immanissimum omnium devortium fecisti? Et tamen erat illa Salmasii famula, Anglica, ut fertur fœmina, regiis partibus apprimè dedita; nempe hoc erat, scelerate [sceleratè] adamâsti ut rem regiam, reliquisti ut rem publicam, cujus tamen conversionis, quam odisse adeo [Columbia116→](#) vis videri, vide ne ipse author fueris; vide [vide,]¹⁰ inquam, ne subversa [subversâ] funditus dominatione Salmasiana [Salmasianâ] Pontiam ipse in rem publicam converteris. Et hoc modo multas tu quidem una in urbe res publicas, regius licet, aut fundasse diceris aut ab aliis fundatas minister publicus administrare. Hæc tua sunt divortia, seu mavis, [←EEBO79](#) diverticula, unde in me Curius diisti [prodiisti]¹¹. Ad mendacia nunc redis. *Cum de regis capite inter conjuratos ageretur, scripsit ad eos, & nutantes in malam partem impulit.* Ego vero neque ad eos scripsi, neque impellere attinebat, quibus id omnino agere, sine me, deliberatum jam erat: verùm ea de re quid scripserim, infrâ dicitur, uti etiam de Iconoclaste. Nunc quoniam iste, Hominem an dicam hæreo; purgamentum potiùs hominis, ab ancillarum adulteriis ad adulterandam omnem veritatem progressus, congestis in me tot una [unâ] serie mendaciis, apud exteros infamem reddere conatus est, peto ne quis rem secùs interpretur, aut in invidiam trahat, néve molestè ferat, si de me plura quàm vellem & dixi suprâ, & porrò dicam: ut si oculos à cæcitate, nomen ab oblivione aut calumnia non possum, vitam tamē [tamen]¹² possim ab ea saltem obscuritate quæ cū [cum]¹³ macula sit, in lucem vindicare. Idque non unam ob causam mihi eritecessariò faciendum. Primùm [←EEBO80](#) ut tot viros bonos atque doctos, qui per omnes vicinas [Columbia118→](#) gentes nostra jam legunt, deque me haud malè sentiunt, ne propter hujus maledicta mei pœniteat; verùm ita sibi perusadeant non eum esse me, qui honestam orationem inhonestis moribus, aut liberè dicta, [dicta] seviliter factis unquam dedecorârîm vitâmq; [vitâmque] nostram Deo bene juvante, ab omni turpitudine ac flagitio remotam longè semper fuisse: deinde, ut quos laudandos mihi sumo viros illustres ac laude dignos, hi sciant nihil me pudendum magis existimare, quàm si ad eorum laudes vituperandus ipse ac nequam accederem; sciat denique populus Anglicanus, quem ut defenderem, meum sive fatum sive officium, sua virtus impulit, si vitam pudenter atque honestè semper egi, meam defensionem, nescio an honori aut ornamento, certè pudori aut

¹⁰ 以下の三語“vide”“subversa”“Salmasiana”の出現ページ数 Columbia 版 “Notes” では 114 とあるがこれは 116 ページの誤り。

¹¹ EEBO 版 Errata 修正内容は Columbia 版表記と一致。

¹² Columbia 版には注記なし。

¹³ Columbia 版には注記なし。

dedecori nunquam sibi fore: qui igitur, & unde sim, nunc dicam. Londini sum natus, genere honesto, patre viro integerrimo, matre probatissima [probatissimâ¹⁴, & eleemosynis per ←EEBO81 viciniam potissimum notâ [notâ]¹⁵. Pater me puerulum humaniorum literarum studiis destinavit; quas ita avidè arripui, ut ab anno ætatis duodecimo vix unquam ante mediam noctem à lucubrationibus cubitum discederem; quæ prima oculorum pernicies fuit: quorum ad naturalem debilitatem accesserant & crebri capitis dolores; quæ omnia cum [cùm] discendi impetum non retardarent, & in ludo literario, & sub Columbia120→ aliis domi magistris erudiendum quotidie curavit: ita variis instructum linguis, & percepta [perceptâ] haud leviter philosophiæ dulcedine, ad Gymnasium gentis alterum, Cantabrigiam misit: Illîc disciplinis atque artibus tradi solitis septennium studui; procul omni flagitio, bonis omnibus probatus, usquedum Magistri, quem vocant, gradum, cum laude etiam adeptus, non in Italiam, quod impurus ille comminiscitur, profugi, sed sponte meâ domum me contuli, meique etiam desiderium, apud Collegii plerisque socios à quibus eram haud mediocriter cultus, reliqui. Paterno ←EEBO82 rure, quo is transigendæ senectutis causâ concesserat, evolvendis Græcis Latinisque scriptoribus summum per otium totus vacavi; ita tamen ut nonnunquam, rus urbe mutarem, aut coëmendorum gratia [gratiâ], [-]¹⁶ librorum, aut novum quidpiam in Mathematicis, vel in Musicis, quibus tum oblectabar, addiscendi. Exacto in hunc modum quinquennio, post matris obitum, regiones exteras, & Italiam potissimum, videndi cupidus, exorato patre, uno cum famulo profectus sum. Abeuntem, vir clarissimus Henricus Woottonus, qui ad Venetos Orator Jacobi regis diu fuerat, & votis & præceptis, eunti peregrè sanè utilissimis, eleganti epistolâ perscriptis, me amicissimè prosequutus est. Commendatum ab aliis nobilissimus Columbia122→ vir Thomas Scudamorus vicecomes Slegonensis, Caroli regis Legatus, Parisiis humanissimè accepit; méque Hugoni Grotio viro eruditissimo, ab Regina Suecorum tunc temporis ad Galliæ regem Legato, quem invisere cupiebam, suo nomine, ←EEBO83 & suorum uno atque altero deducente, commendavit: discedenti post dies aliquot Italiam versùs, literas, ad mercatores Anglos, quâ iter eram facturus, dedit, ut quibus possent officiis mihi præstò essent. Nicæâ solvens, Genuam perveni; mox Liburnum & Pisas, inde Florentiam. Illa in urbe, quam præ cæteris propter elegantiam cum linguæ tum ingeniorum semper colui, ad duos circiter menses substiti; illic multorum & nobilium sanè & doctorum hominum familiaritatem statim contraxi; quorum etiam privatas acadmias, (qui mos illic, cum ad literas humaniores, tum ad amicitias comservandas laudatissimus est) assduè frequentavi.

¹⁴ Columbia 版には注記なし。

¹⁵ Columbia 版には注記なし。

¹⁶ Columbia 版には注記なし。

Tui enim Jacobe Gaddi, Carole Dati, Frescobalde, Cultelline, Bonmatthæi, Clementille, Francine, aliorúmque plurium memoriam, apud me semper gratam atque jucundam, nulla dies delebit. Florentia [Florentiâ] Senas, inde Romam profectus, postquam illius urbis antiquitas & prisca fama me ad bimestre ferè spatium tenuisset (ubi & ←EEBO84 Luca Holstenio, aliisque viris cum doctis tum ingeniosis, sum usus humanissimis) Neapolim perrexi; Illic per Eremitam quendam, quicum Roma [Româ] iter feceram, ad Joannem Baptistam Mansum, Marchionem Villensem, virum nobilissimum atque gravissimum, (ad Columbia124→ quem Torquatus Tassus insignis poeta Italus de amicitia acripit) sum introductus; eodemque usus, quamdiu illic fui, sanè amicissimo; qui & ipse me per urbis loca & Proregis aulam circumduxit, & visendi gratia [gratiâ] haud semel ipse ad hospitium venit: descendentem seriò excusavit se, tametsi multò plura detulisse mihi officia maximè cupiebat, non potuisse illa in urbe, propterea quòd nolebam in religione esse tectior. In Siciliam quoque & Græciam trajicere volentem me, tristis ex Anglia belli civilis nuntius revocavit: turpe enim existimabam, dum mei cives domi de libertate dimicarent, me animi causâ otiosè peregrinari. Romam autem reversurum, monebant Mercatores se didicisse ←EEBO85 per literas parari mihi ab Jesuitis Anglis insidias, si Romam reverterem; eò quod de religione nimis liberè loquutus essem. Sic [Sis]¹⁷ enim mecum statueram, de religione quidem iis in locis sermones ultro non inferre; interrogatus de fide, quicquid essem passurus, nihil dissimulare. Romam itaque nihilo minùs redii: quid essem, si quis interrogabat, neminem celavi; si quis adoriebatur, in ipsa urbe Pontificis, alteros prope duos menses, orthodoxam religionem, ut antea, liberrimè tuebar: Deoque sic volente, incolumis Florentiam rursus perveni; haud minùs mei cupientes revisens, ac si in patriam revertissem. Illic totidem, quod priùs, Columbia126→ menses libenter commoratus, nisi quod ad paucos dies Lucam excucurri, transceso Apennino, per Bononiam & Ferraram, Venetias contendi. Cui urbi lustrandæ cum mensem unum impendissem, & libros, quos per Italiam conquisiveram, in navem imponendos curâsem, per Veronam ac Mediolanum, & Pænicas Alpes, Lacu denique ←EEBO86 Lemanno, Gennevam delatus sum. Quæ urbs, cùm in mentem mihi hinc veniat Mori calumniatoris, facit ut Deum hinc rursus testem invocem, me his omnibus in locis, ubi tam multa licent, ab omni flagitio ac probro integrum atque intactum vixisse, illud perpetuò cogitantem, si hominum latere oculos possem, Dei certè non posse. Genevæ cum Joanne Deodato, Theologiæ professore doctissimo, quotidianus versabar. Deinde eodem itinere, quo priùs, per Galliam, post annum & tres plus minus menses in patriam revertor; eodem ferme tempore quo Carolus, cum Scotis, ruptâ pace, bellum alterum quod vocant Episcopale, redintegrabat; in quo fuis primo congressu regiis copiis, cùm videret etiam omnes

¹⁷ Columbia 版には注記なし。

Anglos, & meritò quidem, in se pessimè animatos, malo coactus, non sponte, Parlamentum haud ita multò post, convocavit. Ipse, sicubi possem, tam rebus turbatis & fluctuantibus, locum consistendi circumspiciens, mihi librísque meis, ←EEBO87 sat amplam in urbe domum conduxi; ibi ad intermissa studia beatulus me recepi; rerum exitu Deo imprimis, Columbia128→ & quibus id muneris populus dabat, facilè permisso. Interea Parlamento rem strenuè gerente, Episcoporum fastus detumuit. Ut primùm loquendi saltem cæpta set libertas concedi, omnia in Episcopos aperiri ora; alii de ipsorum vitiis, alii de ipsius ordinis vitio conqueri; iniquum esse, se solos ab ecclesiis omnibus, quotquot reformatæ sunt, discrepare; exemplo fratrum, sed maximè ex verbo Dei, gubernari Ecclesiam convenire. Ad hæc sanè expectatus, cùm veram affectari viam ad libertatem cernerem, ab his initiis, his passibus, ad liberandam servitute vitam omnem mortalium, rectissimè procedi, si ab religione disciplina orta, ad mores & instituta reipublicæ emanaret, cùm etiam me ita ab adolescentia parâssem, ut quid divini, quid humani esset juris, ante omnia possem non ignorare, méque consulissem ecquando ullius usus ←EEBO88 essem futurus, si nunc patriæ, immo verò ecclesiæ tótque fratribus evangelii causâ, periculo sese objicientibus deessem, statui, etsi tunc alia quædam meditabar, huc omne ingenium, omnes industriæ vires transferre. Primùm itaque de reformanda ecclesia Anglicana, duos ad amicum quendam libros conscripsi: deinde, cum duo præ cæteris magni nominis Episcopi suum jus contra Ministros quosdam primarios asserent, Columbia130→ ratus de iis rebus, quas amore solo veritatis, & ex officii Christiani ratione didiceram haud pejùs me dicturum quàm qui de suo quæstu & injustissimo dominatu contendebant, ad hunc libris duobus, quorum unus de Episcopatu prælatice, alter de ratione Disciplinæ ecclesiasticæ inscribitur, ad illum, scriptis quibusdam animadversionibus, & mox Apologia [Apologiâ], respondi; & ministris facundiam hominis, ut ferebatur ægrè sustinentibus, suppetias tuli; & ab eo tempore, si quid postea responderent, inerfui. Cùm petiti omnium ←EEBO89 telis Episcopi tandem cecidissent, otiúmque ab illis esset, verti aliò cogitationes; si qua in re possem libertatis veræ ac solidæ rationem promovere; quæ non foris, sed intus quærenda, non pugnando, sed vitam rectè instituendo, rectéque administrando adipiscenda potissimùm est. Cùm itaque tres omnino animadverterem libertatis esse species, quæ nisi adsint, vita ulla transigi commodè vix possit, Ecclesiasticam, domesticam seu privatam, atque civilem, deque prima jam scripsissem, deque tertia Magistratum sedulò agere viderem, quæ reliqua secunda erat, domesticam mihi desumpsi; ea quoque tripartita, cùm videretur esse, si res conjugalis, si liberorum institutio rectè se haberet, si denique liberè philosophandi potestas esset, de conjugio non Columbia132→ solùm ritè contrahendo, verùm etiam, si necesse esset, dissolvendo, quid sentirem explicui; ídque ex divina lege, quam Christus non sustulit, nedum aliam, tota [totâ] lege Mosaïca [Mosaïcâ] graviorem civiliter sanxit;

◀EEBO90 quid item de excepta solùm fornicatione sentiendum sit, & meam aliorúmque sententiam exprompsi, & clarissimus vir Seldenus noster, in Uxore Hebræâ plùs minùs biennio pòst editâ, uberiùs demonstrâvit. Frustrâ enim libertatem in comitiis & foro crepat, qui domi servitutem viro indignissimam, inferiori etiam servit; ea igitur de re aliquot libros edidi; eo præsertim tempore cùm vir sæpè & conjux hostes inter se acerrimi, hic domi cum liberis, illa in castris hostium materfamilias versaretur, vio cædem atque perniciem minitans. Institutionem deinde liberorum uno opusculo breviùs quidem tractabam; sed quod satis arbitrabar iis fore, qui ad eam rem, quâ par esset diligentîâ, incumberent; quâ quidem re, nihil ad imbuendas, unde vera atque interna oritur libertas, virtute hominum mentes, nihil ad rempublicam bene gerendam, & quam diutissimè conservandam majus momentum potest afferre. Postremò de typographia liberanda, ne veri & falsi ◀EEBO91 Columbia134→ arbitrium, quid edendum, quid premendum, penès paucos esset, eósq; [eósq;]¹⁸ ferè indoctos, & vulgaris iudicii homines, librorum inspectioni præpositos, per quos nemini ferè quicquam quod supra vulgus sapiat, in lucem emittere, aut licet aut libet, ad justæ orationis modum Areopagiticam scripsi. Civilem, quæ postrema species restabat, non attigeram; quam Magistratui satis curæ esse cernebam: neque de jure regio quicquam à me scriptum est, donec Rex hostis à Senatu iudicatus, bellóq; [bellóque]¹⁹ victus, causam captivus apud Iudices diceret, capitisque damnatus est: Tum verò tandem, cùm Presbyteriani quidam Ministri, Carolo priùs infestissimi, nunc Independentium partes suis anteferri, & in Senatu plus posse indignantes, Parlamenti sententiæ de Rege latae, (non facto irati, sed quod ipsorum factio non fecisset) reclamitarent, & quantum in ipsis erat, tumultuarentur, ausi affirmare Protestantium doctrinam, omnésque ecclesias reformatas ab ejusmodi in reges atroci ◀EEBO92 sentientiâ abohorrere, ratus falsitati tam apertæ palàm eundum obviàm esse, ne tum quidem de Carolo quicquam scripsi aut suasi, sed quod [quid]²⁰ in genere contra tyrannos liceret, adductis haud paucis summorum Theologorum testimoniis, ostendi; & insignem hominum meliora profitentium, Columbia136→ sive ignorantiam sive impudentiam propè concionabundus incesi. Liber iste non nisi post mortem Regis prodiit, ad componendos potiùs hominum animos factus, quàm ad statuendum de Carolo quicquam quod non mea [meâ], sed Magistratuum intererat, & peractum jam tum erat. Hanc intra privatos parietes meam operam nunc ecclesiæ, nunc reipublicæ gratis dedi; mihi vicissim vel hæc vel illa præter incolumitatem nihil; bonam certè conscientiam, bonam apud bonos existimationem, & honestam hanc dicendi libertatem facta ipsa reddidere: commoda alii, alii honores gratis ad se trahebant: me nemo ambientem, nemo

¹⁸ Columbia 版には注記なし。

¹⁹ Columbia 版には注記なし。

²⁰ EEBO 版 Errata 修正内容は Columbia 版表記と一致。

per amicos quicumque petentem, curiæ foribus [←EEBO93] affixum petitionario vultu, aut minorum conventuum vestibulis hærentem nemo me unquam vidit; domi fere me continebam, meis ipse facultatibus tametsi hoc civili tumultu magna ex parte sæpe detentis, & censum ferè iniquiùs mihi impositum, & vitam utcunque frugi tolerabam. His rebus confectis, cùm jam abundè otii existimarem mihi futurum, ad historiam gentis, ab ultima origine repetitam, ad hæc usque tempora, si possem, perpetuo filo deducendam me converti: quatuor jam libros absolveram, cum ecce nihil tale cogitantem me, Caroli regno in rempublicam redacto, Concilium [Columbia138→] Statûs, quod dicitur, tum primùm autoritate Parlamenti constitutum, ad se vocat, meâque operâ ad res præsertim externas uti voluit. Prodiit haud multò post attributus Regi liber, contra Parlamentum invidiosissimè sane scriptus: huic respondere jussus, Iconi Iconoclasten opposui; non *regiis manibus insultans*, ut insimulor, sed reginam veritatem regi Carolo [←EEBO94] anteponendam arbitratus; immo cum præviderem hanc calumniam cuivis maledico in promptu fore, ipso exordio, & sæpe aliàs, quoad licuit, à me istam invidiam sum amolitus. Prodiit deinde Salmasius; cui quis responderet, adeò non diu, quod ait Morus, dispiciebant, ut me in concilio tum etiam præsentem statim omnes ultro nominarent. Hactenus ad obturandum os tuum, More, & mendacia redarguenda bonorum maximè [maximè]²¹ virorum in gratiam, qui me aliàs non nôrint, meî ratinem reddidi. Tu igitur, More, tibi dico immunde, *φρασί- θητι*, obmutesce inquam; quo enim magis mihi maledixeris, eo me rationes meas uberiùs explicare coëgeris; ex quo aliud lucrari nihil poteris, quàm ut tibi mendaciorum opprobrium adhuc gravius concilies, mihi ad integritatis cõmendationem [commendationem]²² eo latiùs viam aperias. Reprehenderam ego Salmasium, quòd extraneum se & alienigenam rebus nostris immiscuisset: Tu instas, *ad eos qui ad Angliam non pertinent, hanc defensionem* [←EEBO95] *maxime [maximè] pertinere*. Quid [Columbia140→] enim? *possint*, inquis, *Angli existimari studio partium acriùs agere; Gallos verò consentaneum est rei, non hominum, rationem habuisse*. Ad hæc eadem quæ priùs regero; externum & longinquum, qualis tu es, in alienas res præsertim turbatas, immerusurum se neminem nisi corruptum; Salmasium prius demonstravi mercede conductum; te constat per Salmasium & Arausionenses professoriam cathedram petiisse; deinde, quod fædius est, exagitas Parlamentum, & subagitas Pontiam. Quam autem affers rationem, cur hæc ad externos potius pertinerent, deridicula prorsus est; si enim Angli partium studiis feruntur, quid vos aliud, qui illos solos sequimini, quàm eorum affectus duntaxat in vos transfertis? adeò ut, si Anglis illis credendum in sua causa non est, vobis profectò sit multò minus; qui rerum nostrarum

²¹ Columbia 版では “maxime” から “maximè” への修正とされる。さらに EEBO 版の該当語句の記号の形は “maximè” と判読されうる可能性も秘めている。

²² Columbia 版には注記なし。

nihil intelligitis, aut saltem creditis, nisi quas ab ipsis accepistis quibus, vestrâ quoque sententiâ, ←EEBO96 vix est credendum. Hic rursum effundis te in laudem magni Salmasii: magnus sanè tibi fuit, quem tu quasi pro lenone habuisti ancillæ suæ; laudas tamen; at is te non laudat, immo ante mortem palàm est abominatus, séque ipse millies incusavit, quòd Spanhemio gravissimo Theologo, de te, quàm Columbia142→ impius esses, non credidisset. Nunc totus in rabiem versus rationi quasi renuntias; *Jamdudum rationi scilicet defunctus est Salmasius*. Tu clamandi tantum & furendi partes tibi deprecas, & tamen primas in maledicendo etiam tribuis Salmasio; *non quia verbis sævit, sed quia Salmasius*. Ω σπερμολόγε! has nempe argutias morigeranti debemus Pontiaë. Hinc clamor tuus argutari atque etiam minurizare didicit; hinc minitabundus quoque, *experiemini*, inquis, *aliquando* [*aliquando*], *fædissimæ belluæ, quid styli potuerint*. Têne experiemur, ancillariolæ, têne mœche, aut stylum tuum, ancillis tantummodo [tantummòdo]²³ metuendum? cui si quis raphanum aut mugilem solùm intenderit, ←EEBO97 actum mehercule præclarè tecum putes, si nate non fissa & incolumi stylo isto salaci tuo queas aufugere. *Equidem non adeo sum*, inquis, *vacui capitis ut provinciam á Salmasio susceptam aggrediar*: quam ille quidem sine capite admodum vacuo, nunquam aggressus fuisse; festivè [festivè]²⁴ tu quidem vacuitate capitis, [capitis] magnum Salmasium tibi anteponis. *At regii sanguinis clamorem ad cælum tollere quod ineruditi etiam debent*: hoc nempe tuum esse ais. Clama, vociferare, boa; perge hypocritari, sancta verba usurpare, & Priapeïa vivere: Exurget, mihi crede, aliquando quem inclamas toties ultionum Deus, Columbia144→ exurget, téq; [tèque]²⁵ imprimis eradicabit, diaboli ministrum, & reformatæ ecclesiæ infandum dedecus & luem. Inculpantibus Salmasii maledicentiam quamplurimis, respondes, *Sic cum paricidis [parricidis] monstrorum omnium turpissimis, fuisse agendum*. Laudo; telis enim nos instruis: & quo te, [te] pacto, tuósq; perduelles tractari conveniat, commodus doces, nósque ipse absolvis. ←EEBO98 Nunc quando ratione nihil potes, ne audes quidem occupatum ab Salmasio jus omne regium, & quicquid est in eo rationis causatus, á contumeliis & rabie ad narrationes quasdam miserabiles conversus, experts rationis, institutos ab initio clamores tantùm persequeris: quas partim Salmasianas recoxisti, partim ex elencho illo θληγχίτω²⁶ anonymo, qui non patriâ solùm, sed nomine etiam profugit, descriptas interpolâsti: quarum ad præcipua capita, vel in Iconoclaste, vel in Salmasianis ita jam respondi, ut citra modum Historiæ, responderi ampliùs posse non putem. Sempérne ego u identidem eandem orbitam teram, & ad Balatronis cujusque

²³ Columbia 版には注記なし。

²⁴ Columbia 版には注記なし。

²⁵ Columbia 版には注記なし。

²⁶ Columbia 版でギリシア語表記に修正あり。

stridorem dicta toties cogar iterare? non faciam; neque meâ sic abutar vel operâ vel otio. Si quis conductitios ejulatus, & compositos vœnalissimi hominis ploratus, si quis declamatiunculas, quas etiam ancillaris concubitus, [concubitus] adulterinas eduxit [Columbia146→](#) & spurias, Morilli nothi gemellas, fide satis locupletes, [locupletes] arbitrarur esse, [←EEBO99](#) ad me quod attinet, nihil quidem moror, quo minùs ita existimet; neque enim est ut ab ejusmodi credulo ac temerario metuendum nobis quicquam sit: attingam tamen pauca, multorum instar, ex quibus tam quis ipse, quàm quid dicat, & quid de reliquo judicandum sit, summatim intelligetis. Postquam de camera plebis & camera procerum, ad unam redigenda, multa exoticus deblateravit, (quod postulatum nemo sanus reprehenderet) *ut æqualitate*, inquit, *in rempublicam invecta [invectâ], ad eandem in ecclesiam introducendam procederetur; tunc enim adhuc stabant episcopi; hic nisi sit purus putus Anabaptismus, nihil video*. Quis hoc à Theologo & ministro Gallico sperâsset unquam? sanè qui Anabaptismus quid sit, nisi hoc sit, non videt, eum ego drediderim haud magis videre quid sit Baptismus. Sed si res propriis vocabulis appellare malimus, æqualitas in republica non est Anabapsismus, sed Democratia longè antiquior; in ecclesia præsertim constituta, est [←EEBO100](#) disciplina Apostolica. At enim *stabant episcopi*. Fatemur, stabant & Genevæ; cum illa civitas & episcopum & eundem legitimum principem religionis causâ expulit; quod illis laudi, cur id nobis probro ducitur? scio [Columbia148→](#) quid tibi vis, Morè [More], Genevensium suffragia ultum is; quibus dimissus cum ignominia, an ejectus ex illa ecclesia fueris, in dubio est. Te ergo cum Salmasio tuo ab evangelico hoc instituto descivisse, & ad episcopos transfugisse, si modò refert quo tu transfugeris, apparet. *Deinde ad ministrorum*, inquis, *nostratum æqualitatem respublica transiit, ut palàm sit eundem spiritum tunc viguisse qui octavo demum anno nefando regis parricidio rem peregit*. Ergo idem ut videtur spiritus & ministros constituit vestrates, & parricidium peregit: Perge ut ocepisti, quas par est apostatam, eructare insanias. *Non plures*, inquis, *tribus libellis supplicibus confecerunt, qui in regem animadverti postulabant*. Quod notum est, & ipse memini, falsissimum esse. Sanè qui has [←EEBO101](#) res apud nos memoriæ mandarunt, non tres tantūmodo [tantummodo]²⁷ libellos istiusmodi, sed multos ex diversis Angliæ provinciis, exercitúsque; [exercitúsque]²⁸ legionibus unius ferè mensis spatio, tres uno die allatos fuisse memorant. Vides quanta cum gravitate hac de re deliberaverit Senatus, cujus cunctationem Populus lenitatis nimie suspectam tot supplicibus libellis eximendam putavi. Quot reris millia hominum fuisse idem sentientium, qui Senatum ad id hortari, quod jam tum seriò agitabat, vel importunum existimarent [Columbia150→](#) vel

²⁷ Columbia 版には注記なし。

²⁸ Columbia 版には注記なし。

supervacaneum? quorum ex numero & ipse fui, qui tamen quid voluerim obscurum non est. Quid si conticuissent omnes rei magnitudine percussi, eóne minùs habuisset Senatus in re tanta quod statueret, expectandúsne populi nutus erat, ex quo tantorum exitus consiliorum penderet? enimverò supernum gentis Concilium, ab universo populo ea mente adhibitum, ut impotentem regis dominatum coereret, posteaquam efferatum & repugnantem ←EEBO102 bello cepisset, si recurrere ad jussa populi deberet, velit jubeátne de captivo hoste supplicium sumi, profectò qui rempublicam fortissimè recuperassent, quid aliud fecisse viderentur quàm in laqueos tyranni à populo, si fors ita ferret, absoluti sese præcipites dedisse? aut si accepta [acceptâ] maximis de rebus decernendi summa [summâ] potestate, de iis quæ præsertim vulgi captum superant, non dico ad populum (nam cum hac potestate ipsi populus jam sunt) sed ad multitudinem rursus referre cogentur quæ imperitiæ suæ, [suæ] conscia ad eos prius omnia retulerat, quis ultro citróq; [citróque] ²⁹referendi finis esset? quis tandem in hoc Euripo consistendi locus? quod firmamentum inter libellos istiusmodi tot capitum levissimorum, quæ salus quassatis rebus hominum foret? quid si Columbia152→ restituendum regno Carolum postulassent? cujusmodi libellos extitisse aliquot non supplices sed minaces fatendum est seditiosorum hominum, quorum nunc odium, nunc miseratio æquè stulta aut malitiosa ←EEBO103 esse solebat; horúmne ratio habenda fuit? qui *ut cum Rege colloquium institueretur, ingenti, iniquis, numero pagis relictis ad Parlamenti fores accurrebant; quorum Senatores, immisso milite, plurimos trucidarunt.* Et Surrienses dicis paganos, qui nescio aliorum è malitia, agrestes ipsi, an sua [suâ] improbitate impulsì, cum libello supplice bene poti, & comessabundi potiùs, quam aliquid petituri, per urbem ibant; mox curiæ fores facto agmine, [agmine] ferociter obsederunt; collocatos ibi milites stationibus deturbârunt, unum ad ipsas curiæ fores occiderunt, priusquã [priusquam]³⁰ illos vel dicto vel facto quiquã [quiquam]³¹ lacessisset: inde meritò pulsì ac malè multati, haud ultra duos trèsvè occisi, vinolentiam potiùs quàm *libertatem spirantes*. Passim concedis *potiores fuisse Independentium partes, non numero, sed consilio & virtuti [virtute] ilitari*. Unde ego & jure & merio superiores quoque fuisse contendo: nihil enim est naturæ convenientius, nihil jusius, nihil humano generi utilius aut melius, ←EEBO104 quàm ut minor majori, non numerus Columbia154→ numero, sed virtus virtuti, consilium consilio cedat; qui prudentiâ, qui rerum usu, industriâ atque virtute pollent, hi meâ quidem sententiâ, quantumvis pauci, quantumvis numero, plures erunt, & suffragiis ubique potiores. Multa sparsim inseris de *Cromuello*, quæ cujusmodi sint infra videbimus; de reliquis responsum jampridem Salmasio est. Judicium quoque Regis non prætermittis, quamvis

²⁹ Columbia 版には注記なし。

³⁰ Columbia 版には注記なし。

³¹ Columbia 版には注記なし。

& illud à magno tuo rhetore miserabiliter sit declamatum. Proceres, id est, Regis purpuratos, & ministros ferè aulicos, à judicando Rege ais abhorruisse: Nos id parùm referre, altero libro ostendimus. *Deinde curiarum iudices erasos; quippe qui responderant esse contra Angliæ leges, Regem iudicio sisti.* Nescio quid tunc responderint, scio quid jam approbent atque defendant: non est novum, Iudices, quos minimè decet, meticulosos esse. *Præficitur ergo sordidæ & sceleratæ curiæ, par Præses, obscurissimus & petulantissimus nebulo.* [←EEBO105] Te verò tot vitiis & sceleribus obstrictum, immo meram spurcitiem, merum scelus, usque adeo obduxisse menti & sensibus callum, nisi tua mens potiùs tota callus est, ut in Deum atheus, & sacrorum contaminator, in homines inhumanus, cujusque optimi [Columbia156→] calumniator esse ausis, quid aliud est esse quàm germanum Iscariotam atque diabolum? Quamvis autem tua vituperatio laus summa sit, tamen prætantissimo viro cui oblatras, nec non amico mihi semper plurimùm colendo, nequaquam deero; quo minus ab improbissimis per fugarum [perfugarum] & Mororum linguis, quas, [quas] nisi causa [causâ] reipublicæ nunquam sensisset, vindicem. Est *Joannes Bradscianus* (quod nomen libertas ipsa, quacunque gentium colitur, memoriæ sempiternæ [sempiternæ] celebrandum commendavit,) nobili familia [familiâ], ut satis notum est, ortus; unde patriis legibus addiscendis, primam omnem ætatem sedulò impendit; dein consultissimus causarum ac disertissimus patronus, libertatis & populi vindex acerrimus, & [←EEBO106] magnis reipublicæ negotiis est adhibitus, & incorrupti Iudicis munere aliquoties perfunctus: Tandem uti Regis iudicio præsidere vellet, à Senatu rogatus, provinciam sanè periculosissimam non recusavit. Attulerat enim ad legum scientiam ingenium liberale, animum excelsum, mores integros ac nemini obnoxios; unde illud munus omni prope exemplo majus ac formidabilius, tot Sicariorum pugionibus ac minis petitus, ita constanter, ita graviter, tanta animi cum præsentia ac dignitate gessit atque implevit, ut ad hoc ipsum opus, quod jam olim Deus edendum in hoc populo mirabili providentia [providentiâ] decreverat, [Columbia158→] ab ipso Numine designatus atque factus videretur; & Tyrannidarum omnium gloriam tantùm [tantum]³² superaverit, quantò est humanius, quantò justius, ac majestate plenius, Tyrannum iudicare, quàm injudicatum occidere. Alioqui nec tristis, nec severus, sed comis ac placidus, personam tamen quam suscepit tantam, æqualis ubique sibi, ac veluti consul non unius [←EEBO107] anni, pari gravitate sustinet, ut non de tribunali tantùm, sed per omnem vitam iudicare Regem diceres. In consiliis ac laboribus publicis maximè omnium indefessus, mutisque par unus; domi, si quis alius, pro suis facultatibus hospitalis ac splendidus, amicus longè fidelissimus, atque in omni fortuna certissimus, bene

³² EEBO 版 Errata 修正内容は Columbia 版表記と一致。Columbia 版 “Notes” にも表記あり。

merentes quoscunque nemo citiùs aut libentiùs agnoscit, neque majore benevolentia [benevolentia] prosequitur; nunc pios, nunc doctos, aut quavis ingenii laude cognitos, nunc militares etiam & fortes viros ad inopiam redactos suis opibus sublevat; iis si non indigent, colit tamen libens atque amplectitur; alienas laudes perpetuò prædicare, suas tacere solitus; hostium quoque civilium si quis ad sanitatem rediit, quod experti sunt plurimi, nemo ignoscentior. Quod si causa oppressi cujuspian defendenda palam, si gratia aut vis potentiorum oppugnanda, si in quenquam bene meritum, ingratitude publica objurganda sit, tum quidem in illo viro, vel facundiam ←EEBO108 vel constantiam nemo desideret, non Columbia160→ patronum, non amicum, vel idoneum magis & intrepidum, vel disertiore alium quisquam sibi optet; habet, quem non minæ dimovere recto, non metus aut munera proposito bono atque officio, vultùsque ac mentis firmissimo statu dejicere valeant. Quibus virtutibus, & plerisque merito [meritò] charus, & inimicissimis non contemnendus, gestarum egregiè rerum in republica laudem, dirupto te, More, tuique similibus, apud omnes tum exteros tum posteros, in omne ævum propagabit. Sed pergendum, Rex capite damnatus est: *contra hanc vesaniam Londini pulpita fere omnia detonare*. Ligneo isto tonitru haud multum terres; istos Salmoneas nihil veremur, qui fictitium illud fulmen & arrogatum sibi, aliquando luent; graves profectò authores & synceri, qui paulò ante ex iisdem pulpitis contra Pluralistas & Nonresidentes strepitu æquè horribili detonabant; paulò post, raptis hic sibi ternis, ille quanternis Prælatorum ←EEBO109 sacerdotiis, quos tonando abegerant, atque inde nonresidentes necessariò facti, eodem ipsi crimine tenebantur in quod detonabant, & sui quisque tonitrus bidental factus est: neque ullus adhuc pudor; nunc in vendicandis sibi decimis toti sunt; & sanè si decimarum tanta sitis est, Columbia162→ censeo affatim decimandos: non terræ fructus tantùm, sed & maris fluctus sibi habeant decumanos. Iidem primò bellum suadebant in Regem, ut in hostem exitio devotum; mox capto hosti, & imputatæ à semetipsis toties cædis ac sanguinis effusi damnato, parci volebant utpote regi. Ita in pulpitis tanquam in taberna quadam meritoria,³³ quæ volunt mercimonia, quæ volunt scruta, vendunt popello; & quod miserius est, quæ jam vendidere, quoties volunt repossunt. At *Scoti regem sibi reddi flagitabant, commemorant Senatus promissa quando Anglis regem tradiderant*. Atqui ego vel Scotos etiã [etiam] fatentes habeo, nulla omnino promissa publica intercessisse, cū [cùm] rex traderetur; & turpe ←EEBO110 sanè fuisset Anglis, regem suum à Scotis in Anglia conductitiis, reddendum non fuisse nisi per conditiones: quid? quod ipsa Parlamenti responsio ad Scotorum cartulas Id. Mart. 1647. edita, ullam hac de re interpositam ab se fidem, quo pacto rex tractandus esset, dilucidè negat; indignum quippe censuisse, non nisi eâ lege sua jura obtineri à Scotis potuisse. Attamen

³³ Columbia 版注では “meritoria” から “meritoria” へ修正。

regem reddi sibi flagitabant. Mites, Columbia164→ credo, homines frangebantur animo, desiderium sui regis ferre diutius non poterant: immoverò iidem illi, cum ab initio horum in Britannia motuum, de jure regio haud semel in Parlamento retulissent, essétq; [essétque] ab omnibus assensum, ob tres maximè [maximas] causas regem privari regno posse, si tyrannus existat, si fundum regium alienet, si suos deserat, circa annum 1645. Parlamento Perthæ habito sententias rogare cæperunt, citnè rex quem sanctis infestum esse constet, ommunione ecclesiæ interdicendus? verùm [verum] antequam ea de re quicquam decerneretur, Montrossius ad eam urbem ←EEBO111 cum copiis accedens conventum disturbavit. Idem [iidem]³⁴ in suo quodam ad Cromuellum Imperatorem responso, an. 1650. fatentur punitum jure regem, juris tantummodo forman fuisse vitiosam, eo quòd ipsi in illius judicii consortium non vocarentur. Hoc ergo facinus sine illis atrox, cum illis egregium fuisset, ex eorum quippe nutu fas atque nefas pendebat, justum atque injustum definiendum erat: quid isti, obsecro, rege sibi reddito lenius in eum statuissent? At *Delegati Scotici à Senatu Anglico responsum hoc prius tulerant, nolle se regni Anglicani forman* Columbia166→ *immutare, postea tamen respondere se tunc noluisse, nunc velle, prout salus reipublicæ postulet.* Et rectè quidem responderunt: quid tu hinc? *hæc strophæ, inquis, omnia fædera, commercium, ipsumque sensum communem evertit.* Tuum quidem evertit, qui nescis inter libera promissa, & pactam fæderis fidem quid intersit: Angli de forma reipublicæ suæ futura, cujus rationem Scotis reddere ←EEBO112 necesse non erat, quod tum ipsis videbatur, libere quidem respondent; nunc salus reipublicæ aliud suadebat; si fidem, si jusjurandum populo datum violare nollent. Utrum sanctius [sanctiùs] obligare putas, liberúmne de forma reipublicæ futura datum Scotis legatis responsum, an necessarium de salute reipublicæ procuranda datum suo populo jusjurandum & summan fidem? Licere autè [autem]³⁵ Parlamento vel Senatui, prout expedit, consilia mutare, quoniam quicquid nos affirmamus, anabaptisticum tibi est & monstrosum, malo ex Cicerone audias pro Plancio. Stare omnes debemus tanquam in orbe aliquo reipublicæ; qui quoniam versetur, eam deligere partem debemus, ad quam nos illius utilitas salúsque converterit. Et statim. Neque enim inconstantis puto, sententiam, tanquam aliquod navigium atque cursum, ex reipublicæ tempestate moderari. Ego verò hæc Columbia168→ didici, hæc vidi, hæc scripta legi, hæc de sapientissimis & clarissimis viris & in hac republica, & in ←EEBO113 allis civitatibus monumenta nobis literæ prodiderunt, non semper easdem sententias, ab iisdem, sed quascunque Reipublicæ status, inclinatio temporum, ratio concordiae postularet, esse defendendas. Hæc Marcus Tullius: sed tu More Hortensium mavis; hæc illæ ætates quæ civili maximè

³⁴ EEBO 版 Errata 修正内容は Columbia 版表記と一致。

³⁵ Columbia 版には注記なし。

prudentiâ floruerunt; quæ si sequuntur anabaptistæ, meâ quidem sententiâ sapiunt. Quàm multa alia possem proferre, quæ à ministerculis hisce & suo Salmasio, si res non verba spectemus, planè indocto, pro anabaptisticis damnantur. At *nihilo*, inquis, *plus potuerant potentissimi Belgii fœderati ordines, qui per oratores suos & prece & pretio oblato strenuè allaborarunt sacrum Regis caput redimere*. Velle profectò justitiam sic redimere, idem erat atque regem salvum nolle: verùm didicerunt, non omnes esse mercatores; non adeò vendacem esse Senatum Anglicanum. Quod autem ad iudicium regis, *ut plurima*, inquis, *Christo similia Carolus pateretur, milites* ←EEBO114 *in eum ingeminant ludibria*. Plura quidem passus est similia Christus maleficis, quàm Carolus Christo; & multa istiusmodi jactabantur vulgò ab iis quibus ad invidiam facti majorem excitandam, quidvis fingere aut fictum referre studium erat: Fac tamen gregarios milites insolentiùs Columbia170→ se gessisse; non id continuò in causam est conferendum. *Mactatum vero esse quempiam ad pedes regis prætereuntis, apprecantem ut Deus ejus miseretur, nec antea audivi unquam, nec convenire quenquam adhuc potui qui audivisset: quin immo tribunum ipsum, qui toto illius iudicii tempore custodiis præfuit, regisque à latere vix discessit, interrogandum hac de re curavi: is denique nec audivisse se hoc antea, & pro certo scire falsissimum id esse, constanter asseverabat. Ex quo intelligi potest tuarum narrationum fides, etiam in reliquis quàm firma sit. Nam in benevolentia quoque & adoratione, si posses, Carolo post mortem procuranda, quàm in obio nobis vel iniquissimè* ←EEBO115 *conflando haud multo veracior invenieris. Auditum ais fuisse Regem in fatali pegmate episcopo Londinensi ingeminantem, memento, memento*. Id regis Iudices anxios nempe habuit, quid illa ultimum iterata vox sibi voluisset; accersitur, ut ais, episcopus, & illud geminum *memento* quid sibi quæsivisset, additis minis, enuntiare jubetur. Is primò, (sic enim fingi expediebat) ex composito nimirum delicias fecit; &, quasi arcanum quoddam, prodere recusavit. Cum illi vehementiùs instarent, id quasi metu sibi expressum, & nolenti extortum, ægrè tandem edidit, quod re vera quovis Columbia172→ pretio divulgatum vellet; *Jusserat me, inquis, rex, ut si possem ad filium pervenire, hoc supremum morientis patris mandatum ad eum perferrem, ut regno & potestati suæ restitutus, vobis suæ necis authoribus ignosceret: hoc me meminisse, rex iterum atque iterum jussit*. O magis, regémne dicam pietatis, an episcopum rimarum plenum! qui rem tam secretò ←EEBO116 in pegmate suæ fidei commissã [commissam]³⁶ ut effutiret, [effutiret] tam facilè expugnari potuit. At ô taciturne! jampridem Carolus hoc idem inter alia præcepta filio mandaverat, in illa Icone Basilica; quem librum ideo scriptum satis apparet, ut omni cum diligentia nobis vel invitis secretum illud, qua ostentatione simulatum erat, eadem [eâdem] paulo pòst evulgaretur. Sed video planè decrevisse vos

³⁶ Columbia 版には注記なし。

Carolum quendam absolutissimum, si non Stuartum hunc, at saltem hyperboreum aliquem & fabulosum, fucatis quibuslibet coloribus depictum, imperitis rerum obtrudere: ita fabellam hanc velut acroama quoddam, diverbiis & sententiolis pulchrè distinctum, nescio quem ethologum imitatus, ad inescandas vulgi aures putidè concinnasti. Ego verò, ut non negaverim interrogatum fortasse obiter ab uno vel altero consessorum hac de re episcopum, ita accersitum, dedita [deditâ] opera [operâ] vel à concilio vel ab illo iudicum collegio, quasi Columbia174→ id omnes curassent, aut sollicitè quæsivissent ←EEBO117 non comperio. Sed demus inde quæ vís: dederit in pegmate suprema hæc episcopo mandata, ut suæ necis authoribus ignosceretur, perferenda ad filium Carolus: quid tam egregium aut singulare præter cæteros eò loci deductos fecit? quotusquisq; [quotusquisque] est morientium in pegmate, qui peracturus jam vitæ fabulam, cùm hæc mortalia quàm vana sint videt, non idem faciat; & inimicitias, iras, odia, tanquam ex scena quadam jam exiturus, libens non deponat, aut saltem simulet, ut vel misericordiam, vel innocentiae opinionem suæ in animis hominum relinquat? Simulâsse Carolum, neque unquam ex animo, & sincero mentis proposito tale mandatum dedisse filio, *ut suæ necis authoribus ignoscret*, vel si hoc palàm, aliud tamen clanculum mandâsse, argumentis non levibus demonstrari potest: nam filius, alioqui plus satis patri obsequens, patris gravissimo atque ultimo præcepto tam religiosè sibi per episcopum tradito, haud dubiè paruisset: quî autem paruit, cujus vel jussu vel ←EEBO118 autoritate duo Legati nostri, alter in Hollandia, alter in Hispania, & hic ne suspicione quidem ulla regiae necis reus, trucidati sunt? qui denique haud semel scripto publico edixit Columbia176→ atque omnibus palam fecit, se nolle patris sui interfectoribus ullo pacto veniam concedere? Hanc igitur narratiunculam tuam vide an veram esse velis; quæ quo magis collaudat patrem, eo magis vituperat filium. Nunc instituti oblitus, non regii sanguinis ad cælum, sed populi ad Senatum clamores ementiris, odiosissimus post Salmasium in republica aliena pragmaticus & ardelio, qui tam fœdè præsertim res tuas domi agas. Tuâne voce, impurissime, populus pro se utatur, cujus [cujūs]³⁷ halitum ipsum oris lue venerea [venereâ] fœtidum, purus omnis aversaretur? tu verò perfugarum ac perditorum voces populo attribuis; & quod agyrtra peregrinus ad coronam solet, vilissimorum duntaxat animalium voces imitaris. Quis autem negat ea posse tempora sæpiùs accidere, in quibus civium longè ←EEBO119 major numerus improborum sit; qui Catilinam vel Antonium, quàm saniozem Senatus partem sequi malint; neque idcirco boni cives obniti contra, & fortiter facere non debebunt, sui magis officii, quàm paucitatis rationem ducentes: tuam ergo tam bellam pro nostro populo oratiunculam, ne charta omnino pereat, in annales Volusi suadeo inseras; nobis rhetorculo tam hircoso atque olido, non est usus. Dehinc

³⁷ Columbia 版には注記なし。

injuriarum in ecclesiam postulamus. *Exercitus est omnium hæresewn lerna*. Qui non maledicunt, exercitum nostrum ut fortissimum, [Columbia178→](#) ita modestissimum ac religiosissimum esse confitentur: aliis in castris ferè potatur, variis libidinibus indulgetur, rapitur, aleâ luditur, juratur & perjuratur; in his nostris quod datur otii, disquirendæ veritati impenditur, sacræ Scripturæ invigilatur; nec quisquam pulchrius existimat hostem ferire, quàm se atque alios cœlestium cognitione rerum erudire, aut bellicam magis quàm evangelicam militiam exercere. [←EEBO120](#) Et sanè si proprium belli usum consideramus, quid aliud magis deceat milites? qui ideo constituti sunt atque conscripti, ut essent legum defensores, paludati justitiæ satellites, ecclesiæ propugnatores: quid illis, non ferocius aut truculentius, sed civilius aut humanius esse oporteat? qui non bellum serere ac metere, sed pacem & incolumitatem humano generi arare, vero ac proprio fine laborum suorum debent. Quòd siquos ad hæc præclara instituta aspirantes vel alienus error, vel sua animi infirmitas transversos abducit, in eos, non ferro sæviendum, sed rationibus ac monitis [monitis,] precibus quoque ad Deum fuis enitendum, cujus est solius omnes animo errors dispellere, & cœlestem veritatis lucem, cui volet impertire. Hæreses quidem, sic verè dictas, nos nullas approbamus, ne omnes quidem toleramus; extirpatas etiã [etiam] volumus, sed quibus convenit modis, præceptis nimirum & saniore doctrina, [Columbia180→](#) ut in mente sitas, non ferro ac flagris quasi ex corpore evellendas. [←EEBO121](#) *Altera, inquis, par nostra injuria est in temporalis, quod vocant, ecclesiæ fundo*. Percontare Belgas vel etiam Germaniæ superioris protestantes, numquid ab ecclesiæ bonis abstinerint; in quos Cæsar Austriacus quoties bellum movet, vix alium quærit belli titulum, quàm ut bona ecclesiæ restitui jubeat. Verùm illa profectò non ecclesiæ, sed ecclesiasticorum duntaxat bona fuere, qui hoc maximè sensu clerici, vel etiam holoclerici, ut qui sortem totam invasissent, rectiùs nominari poterant; immo lupi veriùs plerique eorum, quàm aliud quidvis erant dicendi; luporum autem bona, vel congestas potiùs prædas majorum ex superstitione partas, quam per tot sæcula quæstui habuerunt, in usus transferre belli à semetipsis conflati, nefas non erat, quando aliud non erat reliquum, unde sumptus belli tam gravis ac diuturni suppeterent. Atqui *expectabatur, ut episcopis ereptæ opes in pastores ecclesiarum erogarentur*. Expectabant, scio, illi, & avebant omnia [←EEBO122](#) in se transfundi: nulla enim est vorago tam profunda, quæ non expleri citiùs quàm clericorum avaritia possit. Aliis fortasse in locis, haud æquè ministris provisum; nostris jam satis superque bene erat; oves potiùs appellandi quàm pastores, pascuntur magis quàm pascunt; pingua illis [Columbia182→](#) plerumque omnia, ne ingenio quidem excepto; decimis enim saginantur, improbato ab aliis omnibus ecclesiis more; Deoque sic diffidunt, ut eas malint per magistrarum atque per vim suis gregibus extorquere, quàm vel divinæ providentiæ, vel ecclesiarum benevolentia & gratitudini debere; atque inter hæc tamen & apud discipulos & apud discipulas, tam crebrò

convivantur, ut quid domicœnium sit, aut domiprandium penè nesciant: hinc itaque luxuriant plerique, non egent; liberique eorum & conjuges luxu & lautitiis, cum divitum liberis atque conjugibus certant: hanc novis latifundiis adauxisse luxuriam, idem prorsus fruisset, ac si quis novum venenum, (quam olim ←EEBO123 pestem sub Constantino vox missa cœlitùs, [cœlitùs] deflevit) in ecclesiam infudisset. Proximum est ut de injuriis in Deum, quarum tres maximè nominantur, de fiducia nimirum divinæ opis, *de precibus etiam atque jejuniis*, reddenda nobis ratio sit. Verùm ex ore tuo, hominum orruptissime, te redarguo; illúdque Apostoli abs te prolatum in te retorqueo, Quis es tu qui *alienum servum judicas?* coram Domino nostro sine stemus vel cadamus. Illud insuper addam Davidis prophetæ, Cùm flens affligo jejunio animam meam, tum hoc vertitur in summum probrum mihi. Cæteras hac de re tuas garritiones febriculosas, quas nemo bis legat, minutim persequi si vellem, haud leviùs profectò ipse peccem. Nec minus aliena sunt quæ de successibus prolixè oscitas: Cave tibi, Columbia184→ More, & vide, ne post Pontianos sudores, gravedinem fortè contraxeris aut polypum; metuendum, ne, ut Salmasius ille magnus nuper, Thermas refrigeres. Equidem de successu sic paucis ←EEBO124 respondeo; causam successu neque probari bonam, neque argui malam: nos causam nostram non ex eventu, sed eventum ex causa judicari postulamus. Jam rationes politicas desumis tibi tractandas, mancipium cathedrarium, immo cathedralitium; injurias nimirum nostras [nostras,] in omnes reges ac populos. Quas? nobis enim nihil tale propositum erat; res nostras tantummodo egimus, aliorum missas fecimus; siquid ad vicinos ab exemplo nostro boni redundavit, haud invidemus; si quid secùs, non nostrâ id culpâ, sed abutentium evenire credimus. Reges aut populi, te Balatronem suarum injuriarum interpretem, quinam tandem constituerunt? certè oratores eorum ac legatos, alii in Senatu, ipse in concilio cum audirentur sæpè audiivi non solùm de suis injuriis nihil querentes, sed amicitiam nostram ac societatem ultrò petentes; quinetiam regum suorum ac principum nomine, de rebus nostris nobis gratulantes, etiam bene precantes, pacem ac ←EEBO125 diuturnitatem, atque eosdem felices successus, in perpetuum Columbia186→ exoptantes. Non inimicorum hæ voces, non eorum qui odissent, ut tu prædicas; aut tu mendacii, quod in te levissimum est, aut reges ipsi fraudum ac malarum artium, quod illis inhonestissimum foret, damnentur necesse est. Verùm scripta nostra objectas confitentium, *Dedisse nos exemplum populis omnibus salutare, tyrannis omnibus formidandum*. Immane crimen profectò narras; idem ferè atque si dexisset quispiam,

Discite justitiam moniti, & non temnere Divos.

Numquid dici potuit perniciosius? hæc Cromuellius ad Scotos post Dumbarrense prælium scripsit. Et se quidem & illa [illâ] nobili victoria [victoriâ] dignè. *Ejusmodi sesamo & papavere conspersæ sunt infames Miltoni paginæ.* Illustrem tu quidem collegam semper mihi adjungis, & in hoc facinore parem planè facis, nonnunquam & superiorem; quo ego nomine [←EEBO126](#) cohonestari me maximè abs te putem, siquid à te honestum posset proficisci. *Crematæ vero, inquis, sunt istæ paginæ à carnifice Parisiensi supremi Senatus auctoritate.* Nequaquam id comperi à Senatu factum, sed ab officario quodam urbico, loco [locum] tenente civili nescio an incivili, cui clerici quidam, ignavissima animalia, authores fuere; tam ex dissito atque longinquo, abdomini suo, quod aliquando precor evenire possit, augurantes. Censes non potuisse nos vicissim Salmasii defensionem regiam cremasse? potuissem sanè vel ipse à magistratibus nostris hoc [Columbia188→](#) facilè impetrasse, nisi illam contumeliam contemptu potiùs ulciscendam existissem: Vos ignem igne properantes extinguere, Herculeum præbuistis rogam, unde clarior exurgerem; nos consultiùs, Defensionis Regiæ frigus calfaciendum non censuimus. Illud miror, tam esse Majorum dissimiles factos Tolosates (nam & Tolosæ combustos nos accepimus) ut qua in urbe sub Raimundis [←EEBO127](#) comitibus, & libertas & religio defensa olim tam insigniter est, in ea nunc & libertatis & religionis Defensio combureretur. *Utinam & Scriptor, inquis. Itane ergastulum?* at ego parem ne reddam tibi salutem, More, tu egregiè cavisti; ut qui nigrioribus multò ignibus jamdudum pereas: urunt te adulteria tua, urunt stupra, urunt perjuria, quorum ope desponsatam tibi stupro fœminam perfidus excussisti; urunt perditissimi furores, qui impulerunt te, ut sacrosancta munia facinorosus concupisceres, & imperspectum Domini corpus incestis manibus sacerdos pollueres; sanctitatem etiam simulans, in sanctitatis simulatores, dira omnia hoc tuo clamore denuntiares; tuúmque execrabile caput, tuámet ipsius damnatum sententia [sententiâ] irretires: his tu sceleribus & infamiis totus flagras, his tu flammis furialibus dies atque noctes torreris, dásque nobis pœnas quibus graviores [Columbia190→](#) imprecari tibi nullus hostis potest. Me interim concremationes [←EEBO128](#) vestræ non lædunt, non tangunt, & istis ignominiis habeo complura quæ opponam grata meo animo atque jucundâ [jucunda]. Ura me curia, unus fortè lictor Parisiensis, malarum avium impulsu, combussit; at quamplurimi per totam Galliam viri boni atque docti nihilo minus legunt, approbant, amplectuntur? [amplectuntur;] quamplurimi per immensum Germaniæ totius tractum, libertatis ferè domicilium, per cæteras quoque regiones, quâcunque ejus vestigia ulla adhuc manent; quin & ipsa Græcia, ipsæ Athenæ Atticæ, quasi jam redivivæ, nobilissimi alumni sui Philaræ voce, applausere. Hoc etiam verè possum dicere, quo primùm tempore nostra Defensio est edita, & legentium studia incaluere, nullum vel principis vel civitatis legatum in urbe tum fuisse, qui non vel fortè obvio mihi gratularetur, vel conventum apud se cuperet vel domi inviseret. Tuos verò nefas sit præterire manes, Adriane Pauui, qui

legatus ad nos summo cum honore missus, Hollandiæ decus atque ornamentum, [←EEBO129](#) summan in me ac singularem benevolentiam tuam, etiamsi videre nunquam contigerit, multis sæpe nuntiis significandam curasti. Hoc verò etiam sæpius recolere memoria juvat, quod sine Dei propitio numine accidere arbitror nunquam potuisse; mihi, qui contra reges, ut videbatur, scripseram, majestatem ipsam regiam placidè [Columbia192→](#) annuisse; meæque integritati, nec non sententiæ, ut veriori, testimonium divino proximum perhibuisse. Quid enim verear hoc dicere, quoties augustissimam reginam illam, quantis cum laudibus in ore omnium versetur, mecum cogito. [cogito?] Equidem Atheniensem illum sapientissimum, cui me tamen non confero, ne ipsius quidem Pythii testimonio, quàm [quam] me illius judicio ornatorem existimem. Quòd si mihi quidem hæc scribere adolescenti contigisset, & oratoribus idem quod poetis liceret, haud dubitasset profectò sortem meam deorum sorti nonnullorum anteferre: quippe illos de forma duntaxat aut de musica, deos, [←EEBO130](#) humano sub iudice contendisse; me hominem in certamine longè omnium præclarissimo, deâ iudice, superiorem discessisse. Sic me cohonestatum, nemo nisi carnifex ignominiosè audeat tractare, tam qui iusserit quàm qui fecerit. Hic vehementer laboras, ut ne facta nostra Belgicorum pro libertate facinorum exemplo tueri queamus; quod à Salmasio quoque frustra laborarum est: cui quod tunc respondi, idem tibi nunc responsum volo; Falli qui nos opinatur cujusquam exemplo niti; Belgarum pro libertate facinora adjuvisse sæpius ac fovisse, æmulari necesse nunquam habuisse; siquid pro libertate fortiter faciendum est, autores ipsi [Columbia194→](#) nobis sumus, præire, non sequi alios assueti. Tu verò etiam ad bellum contra nos tressis orator, stultissimis argumentis, & te verberone dignis, Gallos hortaris: *Nostros, inquis, legatos excipere Gallicus spiritus nunquam sustinebit*. Sustinuit quod plus est, suos jam ter & amplius ad nos ultrò mittere: Galli igitur generosi, [←EEBO131](#) ut solent, tu degener & spurius, politicarum rationum rudis ac falsus deprehenderis. Hinc id agis ut demonstres, à *fæderatis ordinibus ex composito rem in longum duci, eosque nobiscum nec fædus nec bellum velle*. Atqui interest profectò ipsorum ordinum, non pati consilia sua sic nudari, & ut ita dicam, vitiari a Genevense [Genevensi] perfuga apud se stabulante, qui si diutiùs toleretur, non ancillis modò, sed consiliis etiam publicis stuprum videtur illaturus; cùm ipsi fraterna atque sincera omnia præ se ferant; nunc pacem, quæ vota sunt bonorum omnium, perpetuam nobiscum redintegraverint. *Jucundum erat, inquit, videre, quibus ludibriis, quibus periculis furciferi illi legati, Anglorum scilicet, quotidie conflictarentur, non modo ab Anglis regiis, &c. sed maxime [maximè] omnium à Batavis*. Nisi exploratum nobis jam diu esset quibusnam & prioris legati Dorislai cædes, & duorum postea acceptæ injuriæ referendæ sint, en delatorem, qui hospites & altores suos etiam falsò [←EEBO132](#) deferat: Huncine apud vos, [Columbia196→](#) Batavi, non modò

venereum in ecclesia ministrum, sed sanguinarium etiam, nec violandi solùm juris omnis hortatorem, sed violati quoque falsum indicem ac proditorem ali?

Ultimus accusationum titulus est *nostra injuria in Reformatas ecclesias*. At verò quì magis nostra in illas quàm illarum in nos? si exemplo instes, certè si ab ipsis Valdensibus & Tolosanis, ad Rupellanam usque famen monumenta repetas, nos omnium ecclesiarum ultimi reperiemur contra tyrannos arma sumpsisse. At primi capite damnasse. Sanè quia nobis hoc primis in manu adhuc fuit: quid illi, si data similis facultas fuisset, fuissent facturi, opinor ne ipsos quidem satis nôsse. Equidem in ea sum sententia, contra quem bellum gerimus, eum, siquis rationis aut judicii usus sit, hostem à nobis judicari; hostem autem tam interficere quàm oppugnare, eodem semper jure licuisse: Tyrannus igitur cùm non noster solùm, sed totius ←EEBO133 propè generis humani publicus hostis sit, eum quo jure armis oppugnari, eodem posse & interfici. Nec verò hæc mea unius sententia est, aut nova, eandem & aliis olim sive prudentia sive sensus communis dictavit. Hinc pro Rabirio M. Tullius: Si interfici Saturninum nefas fuit, arma sumpta esse contra Saturninum sine scelere non possunt; si arma jure Columbia198→ sumpta concedis, interfectum jure concedas necesse est. Plura hac de re & suprâ dixi, sæpè aliàs, & per se res obscura non est. Ex quibus quid Galli etiam, eadem data [eâdem datâ] occasione fuissent facturi, ipse queas divinare. Addo & hoc amplius, quicumque armis tyrannum oppugnant, iidem, quantum in se est, & interficiunt: immo, quicquid vel sibi vel aliis ineptè satis persuadere cupiunt, jam interfecere. Sed & doctrina hæc nobis haud magis quàm Gallis, quos tu hoc piaculo cupis eximere, debetur: unde³⁸ enim Francogallia illa, nisi ex Gallia, unde vindiciæ contra tyrannos? qui liber etiam Bezæ vulgò ←EEBO134 tribuitur; undè [unde] alii quorum meminit Thuanus? tu tamen, quasi edo solus, *id satagit*, inquis, *Miltonus, cujus ego piacularem vesaniam pro meritis excepissem*. Tu excepisses, furcifer? cujus nefaria flagitia si ecclesia illa Middleburgensis, te pastore infamis & infelix, pro meritis excepisset, jamdudum te Satanæ mandasset; si pro meritis excepisset magistratus, jamdudum adulteria patibulo pendens luisses: Et luiturus propediem sane [sanè] videris; evigilavit enim, ut audio nuper, tua illa ecclesia Middelburgensis, suæque famæ consuluit, téque caprimulgum pastorem, immo hircum potius olentissimum ablegavit ab se in malam crucem; hinc & magistratus Amsterodamensis Columbia200→ pulpitem quoque interdixit tibi, orchestram tuam; tuúmque illud os impudicum eo ex loco ad summam omniũ bonorũ [omnium bonorum]³⁹ offensionem conspici, ilã impiã [ilam impiam]⁴⁰ vocem vetuit in sacro publicè audiri: restat jam tibi sola Græcarum literarum professio; & hæc quoque brevi eripienda, præter unam illam ←EEBO135 literam, cujus

³⁸ Columbia 版注では“undè”から“unde”へ修正。

³⁹ Columbia 版には注記なし。

⁴⁰ Columbia 版には注記なし。

non professor, sed discipulus [discipulus] mox pensilis meritò futurus es. Neque hæc iratus tibi ominor, sed duntaxat jus dico: maledicis enim tantum abest ut talibus offendamur qualius tu es, ut tales semper nobis vel exoptemus; immo divinâ planè benevolentîâ fieri arbitremur, ut qui in nos acerrimè clamitarunt, tales potissimùm semper extiterint; qui maledicendo non infamant, sed honestant, sed laudant, nam laudando certè maledixissent. Sed irruentem modò quid te retinuit tam fortem homuncionem? *Nisi mihi, inquis, religio fuisset in magni Salmasii provinciam excurrere, cui solida de magno scilicet adversario victoria relinquetur.*⁴¹ Siquidem & ille & ego nunc magnus tibi videor, eo difficilior provincia, praesertim mortuo, fortassis ero; de victoria, modò veritas vincat, parum sollicitus. Interim tu clamitas; *parricidium in doctrinam vertunt, eámque reformatarum ecclesiarum consensione cupiunt quidem, non audent aperto ore defendere; fuit, inquit Miltonus, ←EEBO136 etiam summorum hæc sententia Theologorum, qui ipsi reformatandæ ecclesiæ authores fuere. Fuit, Columbia202→* inquam, & id fusiús [fusiùs]⁴² docui in eo libro qui nostro idiomate Tenor sive Tenura regum & magistratuum inscriptus est, secundùm editus, & alibi: nunc actum toties, agendi fastidium cepit: illic ex Luthero, Zuinglio, Calvino, Bucero, Marthyre, Paræo, citantur ipsa verbatim loca; ex illo denique Cnoxo, quem *unum, me, Scotum ais innuere, quemque hac in re reformatos omnes, praesertim Gallos, illa [illâ] ætate condemnasse.* Atqui ille contrà, quod ibi narratur, se illam doctrinam nominatim à Calvino, summisque aliis ea [eâ] tempestate theologis, quibuscum familiariter consueverat, hausisse affirmat: plura etiam illic nostrorum, regnante Maria & Elizabetha [Mariâ & Elizabethâ], sinceriorum theologorum in eandem sententiam deprompta reperies. Tu verò tandem conceptis ad Deum precibus malè prolixis peroras impius abominandis; & os illud adulterum, obdurantus cœlo ←EEBO137 offers: sino te facilè, neque interpello; major enim cumulus ad impietatem tuam accedere non potuit. Revertor nunc ad id quod suprâ pollicitus sum, & objecta Cromuello præcipua crimina quæ sunt, in medio hic ponam; ut sparsa quàm fuerint levia possit intelligi, quæ collecta nullum pondus in se habent. *Coram pluribus testibus pronunciavit sibi in animo esse, monarchias omnes evertere, reges omnes exitio dare.* Quæ tua sit narrationum fides, jam aliquoties vidimus; dixit fortasse tibi perfugarum aliquis Cromuellum ita dixisse: ex Columbia204→ illis multis testibus nullum nominas: quod itaque sine authore maledicis, suopte vitio ruit. Non is est Cromuellus, quem de suis jam factis ullus unquam vaniloquum audierit; tantùm abest ut infecta quæ sunt, tàmque difficilia, de iis insolentius quicquam promittere ac mintiari consueverit: sanè ista tibi qui narrarunt, nisi voluntate atque natura [naturâ] magis quàm consilio mendaces essent, hoc saltem ←EEBO138 quod ab ingenio ejus alienissimum est,

⁴¹ Columbia 版では原典にないピリオドを付加している。

⁴² Columbia 版注では“fusius”を“fusiùs”に修正。

non affinxissent. Regibus autem, quos ut sibi caveant frequenter mones licebit cum saluti prospexerint suæ, spreto te monitore tam imperito, non sermunculos ex trivio arripere, sed rationes se dignas inire, quibus quid sua [suâ] intersit faciliùs perspexerint. Alterum est crimen persuasisse regi Cromuellum, *ut in insulam Vectim clanculum se subduceret*. Constat regem Carolum rem suam multis aliàs rebus, ter fuga [fugâ] perdidisse; primùm cum Londino Eboracum fugit, deinde cum ad Scotos in Anglia conductitios, postremò cum ad insulam Vectim. At hujus postremæ suasor erat Cromuellus. Optimè; sed tamen ego regis illos primùm miror, qui Carolum toties affirmare non dubitant fuisse prudentissimum, & eundem simul vix unquam suæ spontis; sive apud amicos sive inimicos, in aula vel in castris, in aliena ferè potestate semper fuisse; nunc uxoris, nunc episcoporum, nunc purpuratorum, Columbia206→ nunc militum, denique hostium; ←EEBO139 pejora plerùmque consilia, & pejorum fermè sequutum; Carolo persuadetur, Carolo imponitur, Carolo illuditur, metus incutitur, spes vana ostenditur, velut præda omnium communis, tam amicorum quàm hostium, agitur & fertur Carolus. Aut hæc è scriptis suis tollant, aut sagacitatem Caroli prædicare desistant. Fateor deinde, quamvis prudentia [prudentiâ] atque consilio præstare pulcrû [pulcrum]⁴³ sit, tamen ubi respublica factionibus laborat, suis incommodis haud carere; & consultissimum quemque eo magis obnoxium calumniis utriusque partis reddere: hoc sæpè Cromuello obfuit; hinc presbyteriani [Presbyteriani], inde hostes quicquid in se durius fieri putant, non id communi Senatus consilio, sed Cromuello soli imputant; immo siquid per imprudentiam ipsi malè gerunt, id dolis & fraudibus Cromuelli assignare non erubescunt; culpa omnis in eum derivatur, omnis in eum faba cuditur. Et tamen certissimum est, fugam ad Vectim regis Caroli, absentis tum aliquot millibus ←EEBO140 passuum Cromuello, tam novum accidisse & inopinatum, quàm cuilibet ex Senatu tum in urbe versanti, quem ut de re inopinatissima sibi recèns allata per literas certiozem fecit. Res autem ita se habuit; exercitus universi vocibus rex territus, qui eum nullis Columbia208→ officiis suis aut pollicitis factû [factum]⁴⁴ meliorem, ad supplicium poscere jam tunc cœperat, statuit cum duobus tantummodo consciis nocturnâ fugâ sibi consulere: verùm fugiendi certior, quàm [quam]⁴⁵ quo fugeret, per comitum suorum vel imperitiam vel timiditatem, inops consilii quo se reciperet, Hamundo Vectis insulæ præsidî se ultro dedit; ea spe, facilem sibi ex ea insula, parato clam navigio, transitum in Galliam aut in Belgium fore. Hæc ego de fuga regis in Vectim ex iis comperi, quibus rem totam pernoscendî quàm proxima facultas erat. Sed & hoc quoque criminum est, quòd per Cromuellum, *Angli ingentem de Scotis parti sunt victoriam*. Non *parti sunt*, More, sed sine solæcismo claram sibi pepererunt;

⁴³ Columbia 版には注記なし。

⁴⁴ Columbia 版には注記なし。

⁴⁵ Columbia 版には注記なし。

◀EEBO141 tu verò cogita, quàm Scotis cruentum illud prælium fuerit, cujus tu mentionem tantummodo facere nequivisti, quin instabile præ metu professorium caput tuum ad Prisciani pluteum nutando allideres. Sed videamus porro quantum flagitium Cromuelli fuerit, Scotos irrumpentes, imperium sibi in Anglos jam pollicentes, nobilissimo post multas ætates prælio vicisse. *Inter has turbas, dum Cromuellus cum exercitu abest*: Immò dum hostem in Angliæ viscera jam progressum, jam Parlamento ipsi imminentem Cromuellus, etiam deficientes ◀Columbia210→ Cambros ad fidem reducendo, & obsidione longa [longâ] defessus, ut vidit, ut vicit, ut gloriosissimè fudit, Presbyterianos *tædium Cromuelli ceperat*: Hic verum dicis; dum is communem hostem cum vitæ discrimine propulsat, hi militantem pro sese & in acie fortiter dimicantem confictis criminibus accusant domi; & Huntingtonum centurionem quendam [quendam]⁴⁶ in ejus caput subornant. Quis tantæ ingratitude fœditatem ◀EEBO142 sine fremitu vel audire possit? Eorundem instinctu, nequissimum genus homuncionum ac petulantissimum, tyrones tabernarum maximo numero curiæ fores obsident; Senatum, quicquid ipsis videtur, (quo quid indignius?) clamore suo ac minis cogunt decernere: jamque reducem à Scotis victorem fortissimum, aut exulantem, aut pœnas indignissimas dantem vidissemus Camillum nostrum; nisi Fairfaxius imperator, invictissimi Legati sui tantum dedecus perferendum non censuisset; nisi cunctus exercitus, & is quoque satis ingrati habitus, tam atrocia prohibuisset. Urbem itaque ingressus, urbicos nullo negotio repressit; Scotorum hostium partibus addictos meritò Senatu movit: pars reliqua insolentiis tabernariorum jam liberata, colloquium Vectense, contra Senatus consultum edictumque publicum, cum rege initum rescindit: Huntingtonus ◀Columbia212→ autem ille accusator, impunis & sui juris relictus, tandem pœnitentiâ ductus, ipse sua [suâ] sponte à Cromuello veniam petiit, ◀EEBO143 & à quibus esset subornatus ultro fassus est. Hæc ferè sunt quæ fortissimo patriæ liberatori, nisi ad quæ supra respondi, crimina objiciuntur; quæ quid valeant videtis. Verùm ego tantum virum, deque hac republica tam insignitiè meritum, si duntaxat nihil mali commisisse defendam, nihil egero; cum præsertim non reipublicæ solùm, sed & meâ quoque intersit, ut qui eadem infamia [eâdem infamiâ] tam prope sim conjunctus, quàm optimum eum, atque omni laude dignissimum, gentibus, quoad possum, omnibus atque sæculis demonstrare. Est *Oliverius Cromuellus* genere nobili atque illustri ortus: nomen republica [republicâ] olim sub regibus benè administrata [administratâ] clarum, religione simul orthodoxa [orthodoxâ] vel restituta [restitutâ] tum primùm apud nos vel stabilita [stabilitâ] clarius: Is matura [maturâ] jam atque firmata [firmatâ]⁴⁷ ætate, quam & privatus traduxit, nulla [nullâ] re magis quàm

⁴⁶ Columbia 版には注記なし。

⁴⁷ Columbia 版には注記なし。

religionis cultu purioris, & integritate vitæ cognitus, domi in occulto creverat; & ad summa quæque tempora fiduciam Deo fretam & ingentem animum tacito ←EEBO144 pectore aluerat. Parlamento ab rege ultimùm convocato, sui municipii suffragiis lectus Senatorium munus obtinuit; illic rectissimis sententiis consiliis que Columbia214→ firmissimis statim innotuit: Ubi ad arma deventum est, delata [delatâ] sua [suâ] opera [operâ], equitum turmæ præficitur; sed bonorum virorum concursu, ab ejus signa undique confluentium, auctus copiis, & gestarum rerum magnitudine & celeritate conficiendi summos ferè duces brevi superavit. Nec mirum; sui enim noscendi exercitatissimus miles, quicquid intus hostis erat, spes vanas, metus, cupiditates, apud se prius aut deleverat, aut subactas iam habuerat; in se priùs imperator, sui victor, de se potissimùm triumphare didicerat; itaque ad externum hostem quo primùm die in castra venit, veteranus, & in illa omni castrensi militia consummatus accessit. Non est ut in his possim orationis carceribus, tot urbes captas, tot prælia & quidem maxima, in quibus nunquam victus aut fusus, Britannicum orbem totum continuis ←EEBO145 victoriis peragravit, pro dignitate rerum exequi; quæ justæ sanè historiæ grande opus, & iterum quasi campum quendam dicendi, & exæquata rebus narrandi spatia desiderant. Sufficit hoc unicum singularis & prope divinæ virtutis indicium, tantam in eo viguisse sive animi vim atque ingenii, sive disciplinæ non ad militarem modò, sed ad Christianam potiùs normam & sanctimoniam institutæ, ut omnes ad sua castra tanquam ad optimum non militaris duntaxat scientiæ, sed religionis ac pietatis gymnasium, vel jam bonos Columbia216→ & fortes undique attraheret, vel tales, ipsius maximè exemplo, efficeret: eósque toto belli, pacis etiam nonnunquam intermediæ tempore, per tot animorum & rerum vicissitudines, non largitionibus & militari licentia [licentiâ], sed autoritate & solo stipendio, adversantibus licèt multis, in officio contineret & adhuc contineat: quâ quidem laude neque Cyro, neque Epaminondæ, neque antiquorum ulli excellentissimo Imperatori laus ulla ←EEBO146 major attribui solet. Hinc enim exercitum, quo nemo minori spatio majorem aut instructiorem, sibi comparavit, & per omnia dicto audientem, & civibus gratum atque dilectum; & hostibus, armatis quidem formidolosum, pacatis admirabilem, quorum in agris atque sub tectis ita non gravis, & sine omni maleficio versabatur, ut cum regionum suorum vim, vinolentiam, impietatem atque libidines, cogitarent, mutata [mutatâ] sorte læti, non nunc hostes, sed hospites advenisse crederent; præsidium bonis omnibus, terrorem malis, virtutis etiam omnis & pietatis hortatores. Sed neque te fas est præterire, *Fairfaxi*, in quo cum summâ fortitudine summam modestiam, summam vitæ sanctitatem, & natura & divinus favor conjunxit: Tu harum in partem laudum evocandus tuo jure⁴⁸ ac merito es; quanquam in illo nunc tuo secessu, quantus olim Literni Africanus ille Scipio,

⁴⁸ Columbia 版では原典に付いていたカンマを削除している。

abdis te quoad potes; [Columbia218→](#) nec hostem solùm, sed ambitionem, & quæ præstantissimum quemque mortalium [←EEBO147](#) vincit, gloriam quoque vicisti; tuique virtutibus & præclarè factis, jucundissimum & gloriosissimum per otium frueris, quod est laborum omnium & humanarum actionum vel maximarum finis; qualique otio cùm antiqui Heroes, post bella & docora tuis haud majora, fruerentur, qui eos laudare conati sunt poetæ, desperabant se posse aliâ ratione id quale esset dignè describere, nisi eos fabularentur, cælo receptos, deorum epulis accumbere. Verùm te sive valetudo, quod maximè crediderim, sive quid aliud retraxit, persuasissimum hoc habeo, nihil te à rationibus reipublicæ divellere potuisse, nisi vidisses quantum libertatis conservatorem, quàm firmum atque fidum Anglicanæ rei columnen ac munimentum in successore tuo relinqueres. Te enim salvo, Cromuelle, ne Deo quidem satis confidit, qui rebus Anglorum, satis ut salvæ sint, metuat; cùm videat tam faventem tibi, tam evidenter opitulantem ubique Deum. Verùm tibi tum soli decertanda alia bellorum palæstra erat. [←EEBO148](#)

Quid autem multa? res maximas, quâ tu celeritate soles, eadem [eâdem] si possum brevitate expediam. Amisssâ Hiberniâ præter unam urbem totâ, tu, exercitu transmissa, uno statim [Columbia220→](#) prælio Hibernicorum opes fregisti; relinqua indies conficiebas; cùm repentè ad bellum Scoticum revocaris. Hinc contra Scotos irruptionem cum rege suo in Angliam parantes, indefessus proficisceris; regnum illud, quod omnes reges nostri octingentis annis non poterant, uno circiter anno perdomuisti, & Anglorum ditioni adjecisti; reliquas eorum copias, validissimas tamen & expeditas, per summam desperationem in Angliam tum ferè præsiidiis nudatam, inopinâ impressione factâ, Vigornium usque progressas, magnis itineribus assecutus, uno prælio delevisti; captâ penè tota [totâ] gentis nobilitate. Hinc alta pax domi: tum te, sed neque tum primùm, non minùs consiliis, quàm belli artibus valere sensimus: id quotidie in senatu agebas, vel ut cum hoste pacta fides servaretur, [←EEBO149](#) vel uti ea, quæ ex reipublicâ essent, maturè decernerentur. Cum videres moras necti, privatæ quemque rei, quam publicæ, attentioem, populum queri delusum se suâ spe, & potentiâ paucorum circumventum esse, quod ipsi toties moniti nolebant, eorum dominationi finem imposuisti. Parlamentum aliud convocatur novum; concessa [concessâ] iis duntaxat, quibus par erat, eligendi potestate; conveniunt electi; nihil [Columbia222→](#) agunt; cùm se invicem dissidiis & altercationibus diu defatigassent, animadvertentes plerique se rebus tantis exequendis, neque pares esse, néque [neque] idoneos, ipsi sese dissolvunt. Deserimur Cromuelle; tu solus superes, ad te rerum summa nostrarum rediit; in te solo consistit; insuperabili tuæ virtuti cedimus cuncti, nemine vel obloquente, nisi qui aut aequales inaequalis ipse honores sibi quærit, aut digniori concessos invidet, aut non intelligit nihil esse in societate hominum magis vel Deo gratum, vel rationi [←EEBO150](#) consentaneum, esse in civitate nihil æquius [æquius,] nihil utilius, quàm potiri rerum dignissimum. Eum te agnoscunt omnes,

Cromuelle, ea tu civis maximus & gloriosissimus, dux publici consilii, fortissimorum exercituum Imperator, pater patriæ gessisti: sic tu spontaneâ bonorum omnium & animitus missâ voce salutaris: alios titulos te dignos tua facta non norunt, non ferunt, & superbos illos, vulgi licet opinione magnos, meritò respuunt. Quid enim est titulus, nisi definitus quidam dignitatis modus? tuæ res gestæ cùm admirationis, tum certè titulorum modum omnem excedunt; & velut pyramidum apices cælo se conduunt, populari titulorum aurâ excelsiores. Sed quoniam summis etiam virtutibus, [Columbia224](#) qui honos habetur, humano quodam fastigio finiri ac terminari, non dignum est, sed tamen expedit, assumpto quodam titulo patris patriæ simillimo, non evehi te quidem, sed tot gradibus ex sublimi descendere, & velut in ordinem cogi, publico commodo, [EEBO151](#) & sensisti & sustinuisti; regium nomen majestate longè majore aspernatus. Et meritò quidem: quod enim nomen, privatus sub jugum mittere, & ad nihilum planè redigere potuisti, eo si tantus vir factus caperere, idem penè faceres, atque si gentem aliquam Idololatram Dei veri ope cùm subegisses, victos abs te coleres deos. Tu igitur, Cromuelle, magnitudine illâ animi macte esto; te enim decet; tu patriæ liberator, libertatis auctor, custosque idem & conservator, neque graviores personam, neque augustiorem suscipere potes aliam; qui non modò regum res gestas, sed Heroum quoque nostrorum fabulas factis exuperasti. Cogita sæpiùs, quàm caram rem, ab quàm cara parente tua, libertatem à patriâ tibi commendatam atque concreditam, apud te depositam habes: quod ab electissimis gentis universæ viris, illa modò expectabat, id nunc à te uno expectat, per te unum consequi sperat: Reverere tantam de te expectationem, spem patriæ [EEBO152](#) de te unicam; reverere vultus & vulnera tot fortium virorum, quotquot, te duce, pro libertate tam strenuè decertârunt; manes etiam eorum qui in ipso certamine occubuerunt: [Columbia226](#) reverere exterarum quoque civitatum existimationem de nobis atque sermones; quantas res de libertate nostra, tam fortiter partâ, de nostrâ republicâ, tam gloriosè exortâ sibi polliceantur: quæ si tam citò quasi abortiva evanuerit, profectò nihil æquè dedecorosum huic genti, atque pudendum fuerit: teipsum denique reverere, ut pro quâ adipiscendâ libertate, tot ærumnas pertulisti, tot pericula adiisti, eam adeptus, violatam per te, aut ullâ in parte imminutam aliis, ne sinas esse. Profectò tu ipse liber sine nobis esse non potes; sic enim natura [naturâ] comparatum est, ut qui aliorum libertatem occupat, suam ipse primus omnium amittat; séque primum omnium intelligat servire: atque id quidem non injuriâ. At verò, si patronus ipse libertatis, & quasi tutelaris deus, si is, quo [EEBO153](#) nemo justior, nemo sanctior est habitus, nemo vir melior, quam vindicavit ipse, eam postmodum invaserit, id non ipsi tantum, sed universæ virtutis ac pietatis rationi perniciosum ac lethale propemodum sit necesse est: ipsa honestas, ipsa virtus decoxisse videbitur, religionis angusta fides, existimatio perexigua in posterum erit, quo gravius generi humano vulnus, post illud primum, infligi nullum poterit. Onus longè gravissimum

suscepisti, quod te penitens explorabit, totum te atque intimum perscrutabitur atque ostendet, quid tibi animi, quid virium insit, quid ponderis; vivatne in te verè illa pietas, fides [fides,] justitia, animique moderatio, ob quas evectum te præ cæteris [Columbia228→](#) Dei numine ad hanc summam. [summam] dignitatem credimus. Tres Nationes validissimas consilio regere, populos ab institutes pravis ad meliorem, quàm ante hac [antehac], frugem ac disciplinam velle perducere, remotissimas in partes sollicitam mentem, cogitationeque immittere, vigilare, prævidere, [←EEBO154](#) nullum laborem recusare, nulla voluptatum blandimenta non spernere, divitiarum atque potentiae ostentationem fugere, hæc sunt illa ardua, præ quibus bellum ludus est; hæc te ventilabunt atque excutient, hæc virum poscunt divino fultum auxilio, divino penè colloquio monitum atque edoctum. Quæ [Quæ] tu, & plura, sæpenumero quin tecum reputes atque animo revolvas, non dubito: uti & illud, quibus potissimum queas modis & illa maxima perficere, & libertatem salvam nobis reddere & auctiorem. Quod meo quidem iudicio, haud alià [aliâ] ratione rectius effeceris, quam si primum quos laborum atque discriminum comites habuisti, eosdem, quos facis, consiliorum socios cum primis adhibueris; viros sanè & modestissimos, & integerrimos, & fortissimos; quos tot mortes conspectæ, tot strages ante ora editæ, non ad crudelitatem, aut duriciem animi, sed ad justitiam, & numinis reverentiam, & humanæ sortis miserationem, ad libertatem [←EEBO155](#) denique eo acrius retinendam erudierunt, quo gravioribus ejus causa [causâ] periculis ipsi suum caput onjecere: Non illi quidem ex colluvione vulgi, [Columbia230→](#) aut advenarum, non turba collectitia, sed melioris plerique notæ cives, genere vel nobili, vel non inhonesto, fortunis vel amplis, vel mediocribus; quid si ipsa [ipsâ] paupertate aliqui commendatiores? quos non præda convocavit, sed difficillima tempora, rebus maximè dubiis, sæpè adversis, ad liberandam tyrannide rempubl. [republicam] excitarunt; non in tuto aut curiâ sermones inter se atque sententias tantum, sed manus cum hoste conserere paratos. Quòd nisi spes semper infinitas, atque innanes [inanes]⁴⁹ persequemur, in quibus tandem mortalium sisti aut confidi possit non video, si his horumque similibus fides non habebitur. Quorum fidelitatis, certissimum pignus, & indubitatum habemus, quòd pro republica vel mortem oppetere, si ita sors tulisset, non recusarint; pietatis, quòd implorato suppliciter dei auxilio, [←EEBO156](#) totiesque [totiesque] ab eo insigniter adjuti, à quo auxilium petere, eidem gloriam tribuere omnem rerum prosperè gestarum consueverint; justitiæ, quòd etiam regem in iudicium adduxerint, damnato parci noluerint; moderationis, quòd & eam experti jam diu sumus, & quam ipsi sibi peperere pacem, si eorundem per injuriam rumpatur, quæ mala inde oritura sunt, ipsi primi sint persensuri, ipsi prima vulnera suis

⁴⁹ Columbia 版には注記なし。

corporibus excepturi, deque suis omnibus fortunes atque ornamentis feliciter jam partis rursus dimicaturi; [Columbia232](#)→ fortitudinis denique, quod nulli unquam libertatem felicius aut fortius recuperaverint; ne arbitremur ullos alios posse diligentius conservare. Gestit clarorum virorum nomina commemorare oratio mea: te primum, Fletuode, quem ego ab ipsis tyrociniis ad hos usque militiæ honores, quos nunc obtines à summis proximos, humanitate, mansuetudine, benignitate animi eundem novi; hostis fortem & [EEBO157](#) imperterritum, sed & mitissimum quoque victorem sensit: Te, Lamberte, qui vix modicæ dux manûs, ducem Hamiltonum juvenis, totius Scoticæ juventutis flore ac robore circumseptum, & progredientem retardasti, & retardatum sustinuisti: Te, Desboroe, Te, Hualei, qui atrocissimas hujus belli pugnas vel audienti mihi vel legenti, inter hostes confertissimos expectati semper occurristis: Te, Overtone, mihi multis abhinc annis, & studiorum similitudine, & morum suavitate, concordiam plusquam fraternam conjunctissime; te Marstonensi praelio illo memorabili, pulso sinistro cornu nostro, respectantes in fugam duces stantem cum tuo pedite, & hostium impetus propulsantem inter densas utrinque cædes videre: Scotico deinde bello, ut primum Cromuelli auspiciis, tuo Marte occupata Fife littora, & patefactus ultra Sterlinium aditus est, te Scoti [Columbia234](#) occidentales, te Boreales humanissimum hostem, te Orcades extremæ domitorem fatentur. Addam [EEBO158](#) & nonnullos, quos togam celebres & pacis artibus, consiliarios tibi advocasti, vel amicitia [amicitiâ] vel fama [famâ] mihi cognitos; Huitlochium, Picheringum, Striclandium, Sidnamum, atque Sidneium (quod ego illustre nomen nostris semper adhæsisse partibus lætor) Montacutium, Laurentium, summo ingenio ambos, optimisque artibus expolitos; aliosque permultos eximiis meritis cives, partim senatorio jam pridem munere, partim militari operâ insignes. His & ornatissimis viris & spectatissimis civibus libertatem nostram proculdubio rectè commiseris; immò quibus tutius committi possit aut concedi, haud facile quis dederit. Deinde si ecclesiam ecclesiæ reliqueris, teque ac magistratus eo onere, & dimidio simul & alienissimo, prudens levaveris; nec duas potestates longè diversissimas, civilem & ecclesiasticam, siveris inter se scortari; seque invicem promiscuis ac falsis opibus in speciem quidem firmare [firmare,] re autem veram labefactare ac demum subvertere: [EEBO159](#) si vim omnem ab ecclesia sustuleris; vis autem nunquam aberit, quando pecunia, ecclesiæ toxicum, veritatis angina, enuntiandi evangelii merces, vi etiam ab nolentibus [Columbia236](#)→ coacta, erit; ejeceris ex ecclesia nummularios illos, non columbas sed columbam, sanctum ipsum spiritum cauponantes. Tum si leges non tot rogaveris novas, quot abrogaveris veteres; sunt enim sæpè in republica, qui multas leges ferendi, ut versificatores multa carmina fundendi impetigine quadam pruriunt: sed leges quo sunt plures, eo ferè sunt deteriores; non cautiones sed cautes, tu necessarias duntaxat retinueris, alias tuleris, non quæ bonos cum malis eodem jugo subjiciant, aut quibus, dum improborum fraudes præcaventur, quod bonis liberum

esse debet, vetatur, sed quæ in vitia tantum animadvertant, res per se licitas abutentium ob noxam, non prohibeant. Leges enim ad frænandam malitiam solùm sunt comparatæ, virtutis libertas formatrix optima ←EEBO160 atque auctrix est. Deinde si juventutis institutioni ac moribus meliùs prospexeris, quàm est adhuc prospectum, nec dociles juxta atque indociles, gnavos atque ignavos, impensis publicis ali æquum senseris, sed jam doctis, jam benè meritis doctorum præmia reservaveris. Tum si liberè philosophari volentibus permiseris, quæ habent, sine magistelli cujuspiam privato examine, Columbia238→ suo periculo in lucem proferre: ita enim maximè veritas effloruerit; nec semidoctorum semper sive censura, sive invidia, sive tenuitas animi, sive superstitio aliorum inventa, omnémque scientiam suo modulo metietur, suóque arbitrio nobis impertiverit. Postremò si ipse neque verum neque falsum, quicquid id est, audire metueris: eos autem minimè omnium audieris, qui sese liberos esse non credunt, nisi aliis esse liberis, per ipsos non liceat; nec studiosiùs aut violentius [violentius] quicquam agunt, quàm ut fratrum non corporibus modò sed conscientis quoque vincula injiciant; pessimámque omnium tyrannidem, vel ←EEBO161 pravarum consuetudinum vel opinionum suarum & in rempublicam & in ecclesiam inducant; tu ab eorum parte semper steteris, qui non suam tantummodo sectam aut factionem, sed omnes æquè cives, æquali jure liberos esse in civitate arbitrantur oportere. Hæc sicui satis libertas non est, quæ quidem à magistratibus exhiberi potest, is mihi ambitionis atque turbarum, quam libertatis ingenuæ studiosior videtur; præsertim cum agitatus tot factionibus populus, ut post tempestatem, cùm fluctus nondum resederunt, statum illum rerum optabilẽ [optabilem]⁵⁰ atq; [atque] perfectũ [perfectum],⁵¹ ipse nõ [non]⁵² admittat.

Nam & vos, ô cives, quales ipsi sitis ad libertatem vel acquirendam vel retinendam haud parvi interest: nisi libertas vestra ejusmodi sit, quæ neque parari armis, neque auferri possit, Columbia240→ ea autem sola est, quæ pietate, justitiâ, temperantiâ, verâ denique virtute nata, altas atque intimas radices animis vestris egerit, non deerit profectò qui vobis istam, quam vi atque armis quæsivisse ←EEBO162 gloriamini, etiam sine armis citò eripiat. Multos bellum auxit, quos pax minuit: si perfuncti bello, pacis studia neglexeritis, si bellum pax vestra, atque liberas, bellum tantummodò vestra virtus est, vestra summa gloria, invenietis [invenietis,] mihi credite, ipsam pacem vobis infestissimam; pax ipsa vestrum bellum longè difficillimum, & quam putâstis libertatem, servitus vestra erit. Nisi per veram atque sinceram in Deum atque homines pietatem, non vanam atque verbosam, sed efficacem & operosam, superstitiones animis, religionis veræ ac solidæ ignoratione ortas, abegeritis, habebitis, qui dorso atque cervicibus vestris,

⁵⁰ Columbia 版には注記なし。

⁵¹ Columbia 版には注記なし。

⁵² Columbia 版には注記なし。

tanquam jumentis insidebunt; qui vos etiam victores bello suam veluti prædam sub hastâ non bellicâ nundinabuntur; & ex ignorantia [ignorantiâ] & superstitione vestrâ, uberem quæstum facient. Nisi avaritiam, ambitionem, luxuriam mentibus, immò familiis quoque vestris luxum expuleritis, quem tyrannum foris & in acie quærendum credidistis eum [←EEBO163](#) domi, eum intus vel duriozem sentietis, immò multi Indies tyranni ex ipsis præcordiis vestris intolerandi pullulabunt. Hos vincite in primis, hæc pacis militia est, hæ sunt victoriae, difficiles quidem, at incruentæ, illis bellicis & [Columbia242→](#) cruentis longè pulchriores; nisi hîc quoque victores eritis, illum modo in acie hostem atque tyrannum, aut non omnino aut frustra vicistis: nam pecuniæ vim maximam in ærarium inferendi rationes posse calidissimas excogitare, pedestres atque navales copias impigrè posse instruere, posse cum legatis exterorum cautè agere, societates & fœdera peritè contrahere, si qui majus atque utilius ac sapientius in republica existimavistis esse, quàm incorrupta populo judicia præstare, afflictis per injuriam atque oppressis opem ferre, suum cuique jus expeditum reddere, quanto sitis in errore versati, tum serò nimis perspicietis, cum illa magna repente vos fefellerint, hæc parva vestro nunc iudicio & neglecta adversa tum vobis & exitio fuerint. Quin [←EEBO164](#) & exercituum & sociorum, quibus confiditis, fluxa fides, nisi justitiæ sola [solâ] autoritate retineatur: & opes atque honores, quos plerique sectantur, facillè dominos mutant: ubi virtus, ubi industria, & laborum tolerantia plus viget, eò transfugiunt, & ignavos deserunt. Sic gens gentem urget, aut sanior pars gentis corruptiorem proturbat: sic vos regios dejecistis. Si vos in eadem vitia prolabi, si illos imitari, eadem sequi, easdem inanitates aucupari ceperitis, vos profectò regii estis, vel eisdem adhuc hostibus, vel aliis vicissim [Columbia244→](#) opportuni; qui iisdem ad Deum precibus, eadem [eâdem] patientia [patientiâ], integritate, solertia [solertiâ] freti, qua [quâ] vos primo valuistis, depravatos nunc, & in regium luxum atque socordiam prolapsos, meritò subjugabunt. Tum verò, quod miserum est, videbimini, planè quasi Deum vestri pœnituisset, pervasisse ignem ut fumo pereatis: quantæ nunc admirationi, tantæ tunc omnibus contemptioni eritis; hoc solum quod aliis fortasse, non vobis, prodesse in posterum [←EEBO165](#) queat, salutare documentum relicturi, quantas res vera virtus & pietas efficere potuisset, cum ficta & adumbrata, duntaxat bellè simulando, & aggredi tantas, & progressus in iis tantos per vos facere valuerit. Non enim, si propter vestram sive imperitiam, sive inconstantiam, sive improbitatem tam præclare facta malè cesserunt, idcirco viris melioribus minus post hæc vel licebit vel sperandum erit. Sed liberare vos denuò tam facillè corruptos nemo, ne Cromuellus quidem, nec tota, si revivisceret, Brutorum natio liberatorum, aut si velit, possit, aut si possit, velit. Quid enim quisquam vobis libera suffragia & eligendi quos vultis in senatum potestatem tum assereret, an ut suæ quisque factionis homines per urbes, aut qui conviviis unctiùs vos, & majoribus poculis per municipia colonos ac rusticos exceperit, eum quantumvis

Columbia246→ indignum eligere possitis? ita non prudentia, non autoritas, sed factio & sagina, aut ex tabernis urbicis caupones & ←EEBO166 institores reipublicæ, aut ex pagis bubulcos, & verè pecuarios senatores, nobis creaverit. Illis nempe rempublicam commendaret, quibus vel rem privatam nemo committeret? illis ærarium & vectigalia qui rem suam turpiter prodegere? illis publicos redditus, quos depeculentur, quos ex publicis privatos reddant? an legislatores ut illi extemplò gentis universæ fiant, qui ipsi quid lex, quid ratio, quid fas aut jus, rectum aut curvum, licitum aut illicitum sit, nunquam intellexerint? qui potestatem omnem in violentia, dignitatem in superbia atq; [atque] fastidio positam existiment? Qui in Senatu nihil prius agant, quàm ut amicis pravè gratificentur, inimicis memores adversentur? qui propinquos sibi ac necessarios, tributis imperandis, bonis proscribendis, per provincias substituant, homines plerosque viles ac perditos, qui suarum ipsi auctionum sectores, grandem exinde pecuniam cogant, coactam intervertant, rempublicam fraudent, provincias expilent, se locupletent [locupletent,] ←EEBO167 ad opulentiam atque fastum ex mendicitate hesterna ac sordibus repentini emergant? quis tales ferat servos furaces, dominorum vicarios? quis ipsos furum dominos ac patronos, libertatis idoneos fore custodes crediderit, aut illiusmodi curatoribus Columbia248→ reipublicæ (quingenti licet consueto numero sint ex municipiis omnibus hunc in modum electi) pilo se factum liberiores putet, cùm & libertatis ipsi custodes & quibus custoditur tam pauci tum sint futuri, qui libertate uti atque frui vel sciant vel digni sint? Libertate autem indigni, quod omittendum postremò non est, erga ipsos primum libertores ingratisissimi ferè existunt. Quis nunc talium pro liberate pugnare, aut vel minimum adire periculum velit? non convenit, non cadit in tales esse liberos; ut ut libertatem strepant atque jactent, servi sunt & domi & foris, nec sentiunt; & cùm senserint tandem, & velut ferocientes equi frænum indignantes, non veræ libertatis ←EEBO168 amore (quam solus vir bonus rectè potest appetere) sed superbia [superbiâ] & cupiditatibus pravis impulsus, jugum excutere conabuntur, etiamsi armis rem sæpiùs tentaverint, nihil tamen proficient; mutare servitutem fortasse poterunt, exuere non poterunt. Id quod Romanis etiam antiquis luxu jam fractis ac diffluentibus persæpè accidit; recentioribus multò magis; cùm longo post tempore Crescentii Nomentani auspiciis, & postea duce Nicolao Rentio, qui se tribunum plebis nominaverat, antiquam renovare gloriam Romanam, & rempublicam restituere affectarent. Scitote enim, ne fortè stomachemini, aut quemquam præter vosmetipsos inculpate possitis, scitote, quemadmodum esse liberum idem planè est atque esse Columbia250→ pium, esse sapientem, esse justum ac temperantem, sui providum, alieni abstinentem, atque exinde demum magnanimum ac fortem, ita his contrarium esse, idem esse atque esse servum; solitòque ←EEBO169 Dei iudicio & quasi talione justissima [justissimâ] fit, ut quæ gens se regere séque moderari nequit, suisque ipsa se libidinibus in servitutem tradidit, ea aliis,

quibus nollet, dominis tradatur; nec libens modò, sed invita quoque serviat. Quod etiam & jure & naturâ ipsâ sancitum est; ut qui impos sui, qui per inopiam mentis aut furem suas res rectè administrare nequit, in [in] suâ potestate ne sit; sed tanquam pupillus, alieno dedatur imperio; nedum ut alienis negotiis, aut reipublicæ præficiendus sit. Qui liberi igitur vultis permanere, aut sapite imprimis, aut quamprimùm resipiscite: si servire durum est, atque nolitis, rectæ rationi obtemperare discite, vestrùm esse compotes; postremò factionibus, odiis, superstitionibus, injuriis, libidinibus ac rapinis invicem abstinete. Id nisi pro virili vestra [vestrâ] parte feceritis, neque Deo neque hominibus, ne vestris quidem jam nunc liberatoribus, idonei poteritis videri, penes quos libertas & reipublicæ ←EEBO170 gubernatio, & imperandi aliis, quod tam cupidè vobis arrogatis, potestas relinquenda sit: cum tutore potius aliquo rerùmque vestrarum fideli ac forti curatore tanquam pupilla gens, tum quidem Columbia252→ indigeatis. Ad me quod attinet, quocunque res redierit, quam ego operam meam maximè ex usu reipublicæ futuram udicavi, haud gravatim certè, & ut spero, haud frustra impendi; meaque arma pro libertate, non solùm ante fores extuli, sed etiam iis ita latè sum usus, ut factorum minimè vulgarium jus atque ratio, & apud nostros & apud externos explicata atque defensa, bonis certè omnibus probata, & ad meorum civium summam laudem, & posterorum ad exemplum præclarè constet. Si postrema primis non satis responderint, ipsi viderint; ego quæ eximia, quæ excelsa, quæ omni laude propè majora fuere, iis testimonium, prope dixerim monumentum, perhibui, haud citò interiturum; & si aliud nihil, certè fidem ←EEBO171 meam liberavi. Quemadmodum autem poeta is qui Epicus vocatur, si quis paulò accuratior, minimèque abnormis est, quem Heroem versibus canendum sibi proponit, ejus non vitam omnem, sed unam ferè vitæ actionem, Achillis putà ad Troiam, vel Uliassis reditum, vel Æneæ in Italiam adventum ornandum sibi sumit, reliquas prætermittit; ita mihi quoque vel ad officium, vel ad excusationem satis fuerit, unam saltem popularium meorum heroicè rem gestam exornasse; reliqua prætereo; omnia universi populi præstare quis possit? si post tam fortia facinora fœdiùs deliqueritis, si quid vobis indignum commiseritis, loquetur profectò posteritas, & judicium feret; Columbia254→ jacta strenuè fundamenta fuisse, præclara initia immò plusquam [plus quam]⁵³ initia; sed qui opus exædificarent, qui fastigium imponerent, non sine commotione quadam animi desiderabit; tantis incœptis, tantis virtutibus, non adfuisse perseverantiam dolebit; ingentem ←EEBO172 gloriæ segetem, & maximarum rerum gerendarum materiam præbitam videbit, sed materiæ defuisse viros: non defuisse qui monere recta, hortari, incitare, qui egregiè tum facta, tum qui fecissent, condecorare, & victuris in omne ævum celebrare laudibus potuerit.

⁵³ Columbia 版には注記なし。

FINIS. [*FINIS.*]